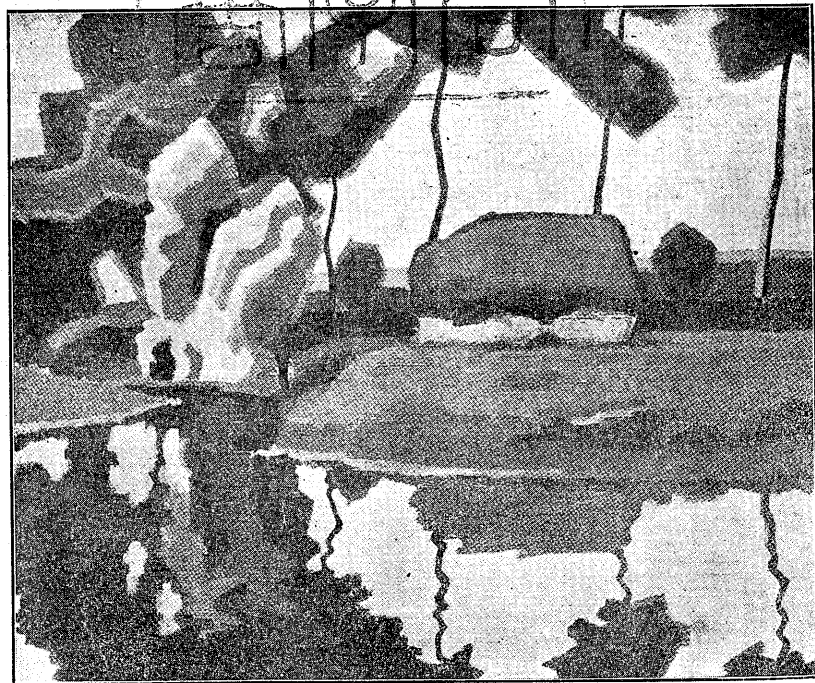
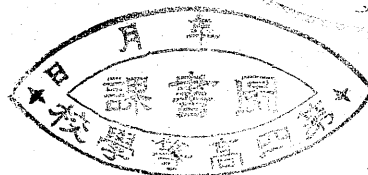


# 北展會雜誌



NO. LXXXXI

VII, MDGGGGXXI



# 北辰會雜誌 第九十一號 目次

## 創作

|          |              |
|----------|--------------|
| 智者と善者    | 太田 定康 (一)    |
| 小さな出来事   | 本多 三郎 (一一)   |
| 國旗       | 中野 重治 (三二)   |
| 美しき暗闇    | 深町 弘三 (三八)   |
| 治療室を周りにて | 三木 佑彦 (六四)   |
| 壽樂座の話    | 佐々木 直次郎 (七六) |

## 附録

|      |                       |
|------|-----------------------|
| 部報   | (一一五)                 |
| 雜報   | (一一五)                 |
| 同人雜記 | (一一七)                 |
| 表紙   | Landscape             |
| 挿繪   | Woman with Frying Pan |
|      | Herbin                |
|      | Van Gogh              |



VAN GOGH. Woman with Frying Pan.

## 智者と善者

——善に美しく、惡に慧しくあれ——

太田 定 康

善者「貴方は、相變らず神經を病んでゐますね。どうです？この静けさは。陽炎が浮んでゐます。私にとつてはこんな場合には、全く自分が人間であると言ふ氣がしません。陽にあたゝめられた石の様です。しみじみと沈黙の尊さを思ひます。永久に永久に何も云はない心持を私は讚美します。」

智者「貴方は生れつきの幸福兒です。恐らく人間界に生るべきではなかつたでせう。貴方の強い憧憬が、何一つに觸れても、それになりきつてしまふのをうらやみます。ですが、御覽なさい。あの峯のあたりを。雲が走つて行きます。こゝでは太陽はうららかに輝いてゐますが、あそこは、空は、今嵐です、私は雲のあの様に飛んで行くのを見ると、戦慄を感じます。恐ろしい事です。地上は御覽の通り静寂で平和に満ちてゐます。が、恐ろしい事です。それを知らないでゐると云ふ事は更に恐ろしい事です。貴方は運命を信じなさいますか？」

善者「信じます。昔、不智から總ての罪惡が生れると云つた人がありましたが、貴方の云はれる運命とは、その罪惡に關係のある事を指すのでせう、私は、それよりも、人間としての運命よりも、見えな



いある力によつてとても云ひませうか、その力に私の身も心も溶けこんでしまふ場合、新しい語で云へば自然の抱擁です、ですから、苦しみであらうが、楽しみであらうが、偽りなくまことから、涙を流し、笑ふ事の出来る場合に、私がどうしても誘はれて行く氣分を、運命とします。私は運命にさからひたくありません。よしんば惡運にとりつかれた時ですらも、私は笑ふ事があるかも知れませんか。それは、さうとして、貴方は罪惡に就いて如何なる意見を持つていらつしやいますか？」

智者「罪惡ですか。私は今の場合否定します。人間のなすことに罪を斷せらるべきものがあるでせうか。人間の性は善だと云つた人に同意します。私は、人間の罪惡は、人間の本能を色々物知り顔に研究して、あれこれと世話を焼いた結果、本能は時々不規則に爆發して所謂罪をなすのでせう。それ故、私は道徳に支配されて行く社會に生れた事を不幸に感じます。遠い原始を懐しく思ひます。その自由さ、その清新さを、今の世では、どうして得られるものですか。今は總てなんでもかんでも、規則づめにしやうとし、機械的であることが只一の安全な世渡りの方法です。それですから、極端に云へば眞の死をするものはないと云つてもよいと思ひます。皆殺されるのです。私は、人々を澤山見ましたが、悲しい事には、未だ會つてそんな風にならないで飽く迄自己のため快く命を捨てた人を見ません。自己の爲、命を捨てると云へば、大層利己的に聞えるかも知れませんが、私の云ふのは、自己が得て來た生命と云ふものを完全に養育して、それを完全にこの世に、置いて行くものがない事です。皆、お互のせりあひの結果、疲れてしまつて、散々に生命を玩具にしたあげくの果に消えてしまふのです。私は生命のための行爲で、罪惡と云はれるものが無い事を斷言します。」

善者「失禮かも知れませんが、貴方は餘り一方にばかり走つてゐます。無論、貴方の云ふ通り現代は、

感心したものでありません。

囚はれてゐます。私の見る所では、それは丁度あの籠の中の小鳥の様に思はれます。皮肉に云へば、文明の籠とでも云ひませうか。現代の人間は其の中ではたゞしてゐます。或は囀り、或は小さく飛び、或は泣いてゐます。刺戟と云ふ餌を啄いてゐるのみです。其の中に病的になつて弱つてしまひます、それで、或るものは、その籠をぐる／＼廻つて、一生懸命にあれこれと調べて見ますが、結局は、堅かつた嘴を痛めるに過ぎないのです。まあ殆んど病める小鳥で一杯でせう。貴方も其の一つです、廣い空を見る事さへ忘れて、籠の底の醜い汚い物を究めて、今貴方は満足してゐる様ですが、人間はその様なものでないと思ひます。貴方は、何處かで美しい聲が、歌つてゐるのを聞く事が出来ませんか。籠と云ふのは形容に過ぎません。定つた閉ぢられた扉があると云ふわけでもありません。しかし、貴方にはその扉さへも氣付かないのではないでせうか。」

智者「かくの如き神祕な比喻を聞く事を喜びます。おつしやる通り病める小鳥でせう。小鳥だとして、空を忘れてゐるとは少しわからない云草ではないでせうか。私にそこがれの心がないと云ふ意味でせうか。憧憬と云ふ文字の現代では不用の物になつてしまつた事を私は知ります。今私が何かを考へて見たい、何かを行つて見たいとします。ところが、何を考へて見たところが、何を行つて見たところが、皆古いのです。何一つとして新しさがありません。御存知の通り、あらゆる學問、文化は、我々のつくつたものでありません、多くは過去の人々です。我々は、たゞ夫を受繼ぐに過ぎないのです。ですから前申した通り巧妙に機械的であればある程、いゝのです。今後如何ともしやうがないのです。これが、この世紀の人の次の世紀への經路です。あきらめねばなりますまい。口惜しい事です。」

善者「私の心は、涙で一杯です。貴方の様に大抵の事を知つて居られるに拘はらず、あきらめねばならない、平氣で云はれるのが不思議です。これは私の推測ですが、貴方は随分享樂なさいました様ですね、官能の倦怠はその極にある様です。いけない事です。前言の如くば、貴方自身が生命をおもちやにしたのですね。それに反して私は、未だ未だ生きかひのある身だと考へます。少しも悔いる心はありません。貴方の様な方は、よく私よりも高い所できよい事をなさつてゐますが、大抵は失望の奈落に陥るのですね。」

智者「それは意外な觀察です。貴方は私をあなたごつていらつしやる。嘲りの言葉です。あゝ申したからと云つて、直ぐ、それが、私自身の告白ではない事はわかりになるでせうに。」

善者「云はないで下さい。恐ろしい矛盾です。人間は光を浴びます。闇に包まれます。又、人間は肉そのものになりきる事が出来ます。靈そのものに化する事が出来ます。其所に永遠の喜悅と、不滅の苦惱があります。貴方自身は、これらを餘り知抜いた。それで、ごだけ貴方が恐ろしい破壊と、尊い建設を、直接に見聞してお出になつたか。貴方は強い方だと信じます。その強さが今は全く惡魔の強さになつてゐます。おゝ、惡魔。貴方は一刻も早く心を淨化しなくてはいけない。呪はれてゐます。開化に呪はれてゐます。もつともつと貴方の持つてゐる智識で總てを批判しなくてはいけないと思ひます。批判ばかりではなく、ものゝ差別を分明につけるのです。貴方の附近は危険で満ちてゐる。」

智者「感謝します。平常沈黙を定めとしてゐなされる貴方に、かく迄云はせた事を私は申譯なく思ひます。ですが、これが少なくとも現代でありがちな事ではないでせうか。私は私自身を勿論呪咀します。それと同時に現代をも呪咀します。貴方の善良な心が、一度打破られる時まで呪咀します。貴方は私

を惡魔の様であると云はれた。それは宗教家や信心家の無鐵砲な言分です。一体人間は何のために生きて行くのです。理想に近づくためです。理想の一部分を實現して次へ進む。それが生命の進行です。自由の凱歌をあげながら進む。その強さ、その強さを私は主張します。動搖はつまり泥濘です。貴方が泥中の蓮として任じてゐる間に、ごだけの人々が窒息してゐるでせうか。その行爲に何故出ないのです。それは弱いからでせう。それで萬事が片付くと思つてはごんだ間違ひです。私の強さがわかる貴方は、それをもちたいと思ひませんか。」

善者「もつてゐます。御心配は無用です。運命が來ます。奇蹟の現はれる事を貴方は、信じないのですか。奇蹟です。私の力は奇蹟の時に出来ます。御覽なさい。よい夕暮ではありませんか。さつき貴方のお云ひになつた峯のあたりに、小さな星が輝いてゐます。私はあの様に、如何に小さくても、あの無窮のかなたに浮んでゐる姿を、奇蹟と思はずに居られません。私は口を慎しみます。しかし、眞理のためなら眞理自身にかはつて述べるのです。あの薄い光りの星に代つて、詩として、囁きを述べる事が出来ます。だん／＼日が暮れて行く。さつきより更に靜寂です。人はかゝる時に、赤裸々にならなくてはいけないと思ひます。病める小鳥のそゞろに古巢が戀しくなる時にちがひありません。」

智者「あの様に、鴉がねぐらに飛んで行く様にですか？、貴方は詩が出來ると云ひましたね。さうでせう、詩そのものが奇蹟とも云へますからね。私は奇蹟を奇蹟として認める事は出來ません。人間がなくては奇蹟などのある筈がありません。文化を進めたものに科學と云ふものがありますが、科學の發見事實はこれ皆奇蹟です。人がこの宇宙に潜んでゐたものを見出したのです。しかも、其れを掌中に保つ事の出來るまで成功したのです。不要の奇蹟などはつまりないと同じではないでせうか。貴方であるな

らば、恐らくは詩的方面から見た奇蹟を主としてゐるのでせう。専ら自然界の現象でせう。科學者が何故太陽は東から上るものであるかを研究したなら滑稽なものです。それは自身分明の事實ではありませんか。宇宙の法則ですからね。その法則がよつて生ずる因果關係を見るところに彼等の任務があるので。ですけれども、科學者はもぐらの様な場合が多くて、飽くまで掘つて掘つて、行くばかりの事が多いために、時々變挺な撞着になる事がありますが、これなどはこの開化に恵みした事のための犠牲です。私は犠牲となつた彼等を尊敬します。何しろ科學の用ひ方如何で人工の最大の結果を得るのですからね、あそこに聳えてゐる建築物と、又向の山とは同じく天に向つてゐます。かくの如き高さを作り得た事は奇蹟です。しかし又、あの建築物を一發のもとに破壊することも科學者は知つてゐます。あの山でも勿論です。科學を戦争に應用した最近の事實は、明らかなものです。私は其處に幾多の生命の犠牲者と、智識（科學）の犠牲者を見ます。少し貴方の考へてゐる方面とちがつた事を云つた様です。」

善者「妙な奇蹟の説明です。して見ると、あの灯は、貴方の様に云へば、又私の云ふあの星と同價值だと云はれるのですね。分ります。しかし何んと云ふ馬鹿らしい比較です。人間の出現。それを貴方はどう見ます？そんな形而下の見解を私は心から卑しみます。」

智者「人間の出現？それは一体何んですか。人間の實在では勿論ないでせう。かゝる奇蹟めいた言葉は前申した様に不可解です。私は人間の復活ならば考へられます。近代の新しい運命として、必ず貴方はうなづくでせう。あの天使の様な少年少女が、今では自然に育つ事が殆んど出来なくなつたと云つてもいいのです。それは餘りに教養されるからです。自分と云ふものを發見しないのである。時には偶然に、又必然にそんな場合に際した時、彼等は一變して懷疑者となり更に病的にまで昂進して全く絶望してし

まふ。幸ひ周圍が善ければどうにか元通りに戻る事が出来ますが、それは平凡化されてしまふに過ぎません。つまり常識のある白痴になるのです。これとちがつて絶望の底から自力でむく／＼と起きあがる者が少なくありません。正に復活です。しかし復活者を無残にも葬り易くしてしまふものは、一体何んでせうか。この人生の淋しさの會得でせう。彼等の復活した力は偉大なものであつたけれども、いざ復活した時、その力に相對するものが一つもない時、全く張合ひがないのです。ある程度迄は、復活力は華やかな過程を續けますが、何時までたつてもぶつかものがない時には、彼等の復活の意氣が消滅してしまひます。彼等は試練を要求するのですが、相手がない程、人生の淋しさをしみじみと感ずる事は他にあるでせうか。それらの經驗は全く得難いものですが、逆を見ると了解が出来ると思ひます。即ち、今迄自分のものであつたもの、云はゞ、そのものと自分とは異つたものであるが、何處かで一致してゐる事の出来る對稱である。それが突然なくなつたと思つた。失つたものが再び手に入る様な輕々しい事件であれば別として、永久に歸つて來ないと思つた、その人の惱み悲しみは想像以外です。そのはては、その人は自身をも消失してしまふか、又は一生を通して胸の創として、思ひ出しては泣くものです。よく子を失つた母や、戀に痛められた若い者やの事件のあるのは皆これです。其他卑近な例をあぐれば限りない事でせう。ですから、さつきの様な復活者の淋しさは、能動的であるだけ相手の無い事とはどれだけつまらないか知れません。私の考へでは天死して行く天才などは皆これだと思ひます。文化の通俗平等的になる程、彼等は淋しいのです。」

善者「私の云ふ人間の出現とは、今貴方自身の用ひられた言葉の中にある天才を云ふのです。空はさつきより星の數を増やしました。天は不變です。流星の如きは天自身すらも知らない奇蹟です。嗚呼、

正に人間界の星は、天才でなければなりません。貴方の云はるゝ奇蹟などはつまり天才の副産物ではありませんか、又、貴方が人生の淋しさを相手を失つた時や、相手の得られなかつた時を以つて説明しましたね。私はこゝに貴方が飽く迄人間と云ふものを批判してゐられるのを深く尊敬します。眞に、人間にそれがあてはまる事を知ります。ですから、憧憬や理想や奇蹟や神祕やなどの念頭をはなれない者も、云はゞ淋しいのです。求めて得ざるが故に求めて得ざる物を求めやうとする、人間の行く道です。現在の私はこれ以外を知りません。」

智者「貴方の、偽はらぬ告白と思ひます。尊い事と思ひます。このくらやみに貴方の瞳のうるんでゐる事を知ります。少し寒い様な氣がしますね、しかし、我々は充分幸福です。このまゝで、このまゝで、生きてゐますから。ですけれど私は、何かしら心のわなゝきを今感じます。自動的であるか他動的であるかはつきりしません。私は正に貴方以上の幻を見てゐるのです。それは、智慧で飾られた殿堂内で、反逆の焰が燃えてゐるのです。私はぞつとします。夜は怖ろしい。貴方は未だこゝにゐますか。」

善者「居りますとも。貴方の唇が眞赤です。目に殺氣があります。祈りなさい。あゝ、貴方は何も信仰しないのでしたね。心を平和にしなくてはいいけません。あゝ、貴方は祈る事が出来ないですね。」

智者「御安心下さい。一時氣が狂はしくなつたのみです。何んだか、群集と共に騒ぎたい氣分です。外は皆虚無です、空虚です。群集と共に動くは、最大の感激です。革命、戦争の心理はこれです。自己の鬱積を社會の鬱積にぶちつける。生命なんかでんで問題になるものですか。他人の生命も、自分の生命も。超生命の行爲は文明に覺醒劑となるのです。超生命が如何に野性と相似て居るかは、幾多の歴史が示して居るではありませんか。物も人も殺戮してしまふ状態は幾度も繰り返へされた。小さく云つて

も個人的にも、道德や法律に觸れる行爲は皆この状態がもとです。淋しさを知れるものは禍なるかなです。」

善者「人は闇に包まれる。肉そのものになり切る事が出来る事を私は云ひました筈です。貴方は人間の永遠の苦悶に打勝つ事が出来ないのですね。金や色や名などに自己の生命を惜氣もなく切賣る人がありますが、貴方は智のために生命を玩弄してゐます。貴方が生命を完全にしてこの世に残して行くこと云はれた言葉と非常な矛盾をしてゐると思ひます。矛盾をそのまゝ受入れる事の出来るのは非凡な事ですが、貴方は、清濁併せ飲むと云ふのではなく、智を愛する心と智を弄ぶ心が混雜するのです、淋しさから超生命の實現を期待する猛烈な野心は、何んと云つても肯定せらるべきものではないのです。思想上の犯罪になつてゐます。その結果、行爲となつて現はれたとしても、それは宇宙の汚點です。避けなければなりません。」

智者「ですから、私は自分を呪咀してゐると云ひました。疑つて考へる。哲學などの全部はこれですが、悪い事を考へるのでなく、考へて悪るゝ見られたと云ふ事は、何等驚くべき事ではありません。寧ろ當然なのです。事件は當然です。今、何事が起るべき時です。でなければ私は堪へられません。この闇が、明朝明けて行く様な出来事の一刻も早くあらん事を切望します。貴方は未だ居りますか。」

善者「居りますとも。私はこゝやつてゐますと、この事そのものが尊い實在に思はれてなりません。私はこのまゝ睡るでせう。雲雀の聲で目が醒める迄。」

智者「生きてゐるのか死んでゐるのか分らない事を云つては困ります。貴方の天才だと云はれた星がさつきより数が少なくなつた様です。私の豫言した黒い雲はあの峯から擴がつて來たのです。ぽつりぽ

つり雨は降るでせう。私は失敬します。何んだか色々な事を争論しましたね。舌か疲れた様です。言語の増加はかくも我々を饒舌にするものでせうか。ですが、私は未だ言語を自由に統一表現する事の不完全なる事をしみじみ知りました。思想の言語でなくて、言語に誘はれた思想の様です。云へない事が澤山ある心程つらいものはありません。それは何々的である、又それは何々性を帯びてゐる位で、何んでも解決がついた心算でゐる學者が可愛くてなりません。又何も云はずに無言の行爲で、道を踏みかためる自惚の方々もお目出度いものです。貴方は詩人見たいな事を屢々云ひましたが、詩人でない事を反省なさるがい、でせう。貴方はよりよく自己を完成しなくてはいけない。よく自己を教養した後他人に干渉すべきでせう。否失言でした。貴方は沈黙を知つてゐました。それが又、貴方の詩人のがらでない事を證明してゐます。ではお休みなさい。」

善者「行つていらつしやい。何處か途中に谷があつた筈ですから氣をつけて落ちない様に。少し風が出た様ですから案外早く暴風雨になるかも知れません。電光に打たれない様に。」

智者「有難う、何處かそこに朽ちた古木の洞窟があつた様ですから、うづくまつてゐなさるが宜しいでせう。久し振りで暴風雨の中を歩く事が出来る。人間の倦怠した時、自然の刺戟が最大だ。おゝ、この一閃。痛快だ。失禮します。——彼は戦慄を凝視するのも知れない、俺は戦慄を体験するのだ——」

善者「大丈夫ですか。行きなさい。何か獨言してゐる様だ。人間の悲壯美だ。」

## 或る出来事

本 多 三 郎

外祖母が死んだのは三月の末だつた。病氣ではあつたものゝ、そしてその上もう七十に近い老齡ではあつたものゝ、その死が聊か突然であつた爲に、外祖父は或る茶の湯の會に出て居て家には居なかつたので、その枕許で最後の看護をしたものは外祖母の只一人の娘である私の母と、それにいつも私達の家へ出入して手傳ひをしたり、ほごきものをしたりして呉れる松尾と云ふ老婆と只二人だけだつた。

外祖母と松尾とはよく氣があつて居た。心の優しい外祖母は憐れな貧しい松尾の身の上を知つて居ただけに一層いたはつてやつた。

松尾はよく自分の生家が武士であつた事を衰へきつた後でも可なり誇りとして居た。

彼女は若い頃に一度、犀川の近くにある染物屋へ嫁いだのであつた。けれども彼女の楽しい結婚生活は長くは續かなかつた。彼女は直に夫の結婚前の不品行をきかねばならなかつた。しかもなほ彼女は幾多の彼女の前に設けられてあるあるまじき夫の城壁を感じなければならなかつた。

そして或る夜、二人が寐に就かうとして居た時に彼女の家は二三名の刑事にふみこまれたそうである。夫はその場から拘引された。

間もなく詐偽横領の罪で牢へぶちこまれた。彼女は夫の拘留と同時に初めて或る時機が來た事をはつ

まり知つた様な氣がした。彼女は冷めたい結婚生活にすつと我慢してゐるにはあまりに若かつたのである。彼女の生家でもその身を憐んで彼女に歸つて來ることをすゝめた。そしてすゝめられた離婚をきいた時には、既に彼女には武士の娘にふさはしい、壯烈と迄云ひたい理由の許に決心は出來て居た。苟くも武士の娘たる者が、そんな詐僞罪の様な破廉恥罪を犯した人と一緒に居る事が出來るものか。自分の生家は貧しい。併し自分は富にあこがれて來たものではない。財産よりは人物。と彼女はかうした自分にとつては立派な、併し虚しい誇りを口實に、貧しい自分の里へ歸つた。再婚の意志はあつたのだらうが、到頭それから四十年、彼女は嫁がすにその兄夫婦の家に養はれて來たのである。彼女の兄と云ふのは市役所の小使をして居て、家では古い刀劍や鍔などを商ふ古道具商をして居た。けれども貧しい彼等には生活はあまりに峻嚴に過ぎた。彼等は一人娘を藝者に賣つて了つた。

松尾が私達の家へ出入りする様になつたのは、私の生れた時からである事をきいた。お産の際の急がしい時の手傳ひに、松尾はどんな人の紹介で來たのかは私は知らないが、來ることになつたので、それから頻りに出入する様になつた。武士氣質の多少残つて居る松尾は、私の家の人に好かれて居た。その人となりの正直なことも信ぜられて居たので、一家揃つて外出する時などには、松尾に留守居を頼んだりした。

さうした關係で松尾は親しく外祖母の臨終に侍し、私の母と一緒に彼女も外祖母の死を泣いてくれたのであつた。

この事を思ふと私は外祖母と松尾との深い因縁を思はずには居られなかつた。その夫でさへあへなかつた臨終に、松尾があへたのは、ほんとに祖母と深い縁があつたからだなど云ひあつたりもした。

その後とても松尾は時々やつてきた。そしてその來る度數が少なからうが、そんな事は問題にもならなかつた。私達はその間に藝者に賣つた娘の年期があいて歸つた事。嫂が眼を病んで盲目になつた事などをきいた。

所が外祖母が死んでから六七ヶ月たつた或る日の事だつた。

私が學校から歸ると茶の間の長火鉢の前で母と松尾とが話して居た。

私はいつもの事だから何とも思はなかつたし、松尾も少し笑つて「お歸り遊ばせ」と云つて居た。けれども私は「只今」と云つてもだまつて「お歸り」とも云つて呉れない母を一寸變に思つた。すぐに私は母と松尾とが餘り話をして居ないのを知つた。

母は火鉢の縁に肘ついて、只手持無沙汰に火箸をとつて火鉢の中の灰をいぢつて居た。

松尾も煙草のますにうつむいてだまつて居るのを見た。私はいやな氣がした。その様子を變に思つた。併し聞いてならない話が話されてる様な氣がしたので、何事かを知りたい好奇心はありながら、ゆる／＼と茶の間を出て自分の室へ行かうとした。

すると突然母が腹立たしいのを無理に抑へようとした調子で

「だつて妾に、そんな覺えがないんだもの」と云つた。私ははつと思つて立ち止つた。そしていつもおべつかを使つてるとまで思はれる程従順な松尾が、その時その母の怒り聲を押し返す様に冷めたく笑つたのには私は一層驚かされた。

「そりや屹度お奥様の思召し違ひでせう。お貸し申したには違ひ御座いません」  
と、も一つ松尾は下卑た笑をした。

私はいやな話だなど思つた。そして何かしら色々な不安が私の胸のうちを急がはしく往來しだした。母の犯罪と云ふ様な事を思ふと淋しい／＼氣がした。併しそれよりも松尾の母に對する態度の不遜が私をひどく不快にした。そして二人の短い對話で、大凡どんな性質のものか想像されたその事柄が、私を母に關係あるとないに關はらずたまらなく不快にした。

そんないやな事が話されない様に、早く松尾が歸つてくれ、ばい、と私は思つた。母がもし罪を犯してゐるにしても、こんな女にぎり／＼せめられてるのは可愛そうだと云ふ氣がした。

「そんな事今更云つてきてお婆さんもあんまりぢやないの」

と、母は涙聲になつて、たゞこんな事を繰り返して居た。

松尾の方では貸したと云ひ、母の方では借らぬと云ふ。これでは話にならなかつた。只私は愛情の上から松尾を憎んで母をいとしいと思つた。

「いゝえ、今直ぐと申すんぢや御座いませませんが、お貸し申した事は間違ひ御座いません。そのうちに頂きに参りますから、探して置いて頂けば宜ろしう御座います」

と、松尾は強い言葉で云ひきりながらも、どこまでも禮は失はぬと云ふ様に笑つて居た。その笑ひ方が又、私には勝ち誇つて居る様で小憎くらしかつた。

「でもそんな筈がないぢやないかい。私の所では子供に誰一人お珠數はもたせなかつたのよ。旦那様と私のは持つてゐるし、子供に持たそうたつて一つや二つちや仕様がなないもの。」

お前なんか借りる筈がないよ」

「そんな事は妾は存じませんけれども、兎に角一つだけ足りないからつておつしやつて、妾が急いで家へ取りに参りましたんです」

と、松尾はすまじきつて居た。

事柄の如何に關らず、私は松尾をはり倒してやりたかつた。この憎惡は、母と松尾との態度の甚しい差異によつて感ぜられる松尾に對する恐怖の念で強められて行つた。

峻嚴な檢事の前に出て居る罪人の家族の一人の様な心持を、事件のすべてを、特に母の心の中を知らぬ私は感じないわけにゆかなかつた。そうなる私はいよく母の痛々しい様子を見て居られなかつた。母が松尾の強辯に云ひ解く術もない様にされてだまつて居るのも見て居られなかつた。

青白い顔を下にたれたまゝ、母は火鉢によつて居たが、その縁に置いた手が痙攣的にふるふて居るのを見ると、私が白髪首を縮めて沈黙して母に向つて居る松尾の様子が、息をひそめて今にも飛びかゝらうとして居る恐ろしい獸の様に思はれて、遮二無二松尾をつきのけて家へ追ひ歸したいと云ふ氣にさへなつた。

が、兎に角私は其處の場のまづさを、母が子に見られたくないと思つてゐるやうな氣がしたので自分の室へ入つて了つた。

それから時は時々、長い沈黙のあとに、峻しい短い對話がきこえたが、私が歸つてから三十分位すると、話がどうなつたものか松尾は歸つて行つたらしなかつた。

松尾が歸つて行つたと知ると、私は別に用事もなかつたが、お茶が飲みたくなつたと云ふ風に見せて



茶の間へ行つた。母はさつきのまゝの格好で、だるそうに兩手を火鉢の縁にのせたまゝ、ぐつたりとしてうつむいて居た。母がする事もせずにくうして今の話を思ひかへして居るのだと思ふと、とり返しのつかぬ禍を置いて行かれた様な氣がした。けれども今の場合、母をどう云つて慰さめていゝかは、私にはわからなかつた。

勿論母自身の犯した罪が、彼女を苦しめて居るとしても、私にはそれを責める心はつゆいさゝかもなかつた。私は母に同情して居た。こんな風に母に罪があつても母をかばいたいと云ふ心と同時に、母がそんな事をする筈がないと思はれた。それなのに矢張り母に松尾の事に就て尋ねるのは氣がひけた。一方では否定しながらも、一方では母が自分の罪を我が子に語らねばならぬ時にどんな苦痛を感じるだらうと思ふと、だまつてすべてを見て居らねばならぬと思はれた。けれども又いだたい心は、多少ながらも好奇心と交つて、無暗にその事件の公開を欲してやまない一面にも働いて居た。

母が計劃的に、意識的に、他人の物を盗むなんてことは、勿論、私には全然考へられなかつた。けれどもどんな偶然が、或はどんな無意識が母に罪を犯さして居たかもしれない。それは、斷言的な否定を與へることの出来ぬことだつた。

かすかながら私にはその方の不安は感ぜられた。

私は湯呑の中へ茶をうつしながらも、勉めて母と目を合すことをさけようとした。目を合したら屹度、母の目の中に見てはならぬ者が閃めいて居そうな氣がした。例へば盗とか隠匿、とか云ふ字がその儘表はれて居はすまいかと云ふ氣さへした。

私にしても沈黙が長く續かれると云ふことは反つて恐ろしい様であつたが、それからどんな言葉でこ

の沈黙が破られねばならぬかと考へてみれば、私の方から破るとすれば、それはあまりいゝ感じのしない言葉で破られることはたしかだつた。言葉そのものはやさしくても、その時の感じが屹度不快だと思つた。それで私は自分の方から口を切るのがどうしても出来なかつた。母の方から物云ふのを待つより外なかつた。

すると母が、私に訴へると云ふのでもない様な云ひ振りだ

「ほんとに失禮な松尾だ」

と呟いた。

私はその言葉を聞いて初めて安心した。母の方に不正はないのだと思つた。母は公明正大な心を、立派に子の前で述べることの出来る位置にあるのだと思つた。それで安心して私は

「どうしたんですか」とさくことが出来た。

「そりやひどい事を云ふのよ。呆れて了つた。お里の外祖母さんのお葬式の時ね、信夫なんか何もお珠数は持たなかつたでせう。それなのにあの時にね、松尾に子供に持たすのにも一つ足りないから貸して呉れつて云つたつてのよ。それで悪いのぢやいけないと思つて松尾が珊瑚のお珠数があつたから、それをもつて来てお貸したがまだ返して頂かないから貰ひに來たつて云ふのよ、まあどうしてそんな事を今になつて云ひ出したものかね」

と、母は強いて私に見せる爲に笑をつくりながらも憎々しげに云つた。

私も驚いた。勿論私には珊瑚はおろか、珠数さへあの時にもつて行つた覚えはなかつた。

「ひどい松尾ですね。そんな生意氣な事を——強請りに來たんでせうかね」



「松尾がそんな悪い人だとは思はれないけれども、あの兄嫁つてのがいけない人ださうだしね、それに藝者をして居た娘つてのがいゝ女ぢやない様だからね、そんなことをさせたのかもしれないけれども、それにしてもあんまり失禮な事を云ふんだもの」

と、母は味方を得て心の中の口惜しさを悉皆云つて了ふことの出来るのが満足そうだった。私は母の顔の晴れたのを見て嬉しかった。

が、一方には此方が正しいと信しながら、松尾が又來やしまいかと云ふ事が氣になつた。松尾がこれで再びこの家へ來ぬ様になればいいと思つた。

それから四五日たつた或る日、私が嫁いで居る姉の所へ遊びに行つて、姉と一緒に家へ歸つて來たことがあつた。

私達二人が楽しさうに話しながら歸つてきて玄關の戸をあけると、母は話し聲でわかつたらしく直ぐ出てきた。そして

「今どこかで松尾にあはなかつたか」と尋ねた。

「いゝえ。又來たんですか」

二人は同時に尋ねた。

「そりや憎くらしい態度だね、まるで私を泥棒の様にしてるのよ。憎くらしいつて、あんな思しらすは見ることがない」

と、母が口を極めて罵倒するのにつけても、私は松尾がどんなにひどく母にあたつたか想像された。そして私には、或る夕方少しの米を袋に入れて脊負ふて門を出て行つた時の松尾の様が思ひ出された。米の價がひどく上つた時の事であつた。松尾は明日の米にも差し支へて居たが、この米屋でも現金でなければ賣つてくれぬと云つて餘儀なく私の家へ借りに來たことがあつた。松尾は家の窮狀をさらけ出しに云つて同情を求めた。そして貸與の哀願が同情の施與になつたのを恥かしがる餘裕もなく、松尾は大袈裟に涙を出して喜んでその米を脊負ふて、夕暗の濃くなつた門を出て行つたことがあつた。私にはあの時の松尾の様が思ひ出た。

「屹度あの盲目の兄嫁つてのがいけないのよ。それにしたつて此れ迄随分可愛がつてやつたりして居たのに、そんな失禮なことを云つてくるなんて」

と、姉もはがゆがつて居た。

「ほんとに松尾が珊瑚のお珠數なんかを持つて居たんでせうかね。あの貧乏のくせによくも賣らずにそんな贅澤品を持つて居たもんですね」

と、云つて私達は松尾の店にはげ／＼の膳や木碗のならべてある事、あれは毎日自分達が食事の時に使つては用がすむとあゝして店に賣り物に出して置くんだなど、話しあつて可なり陽氣に笑つた。

「あんな店をしてる癖に、珊瑚のお珠數なんてよすぎますわね。そして幾價位いくばいのでせう」

「それがね、幾價位するのかつてきいたら、ずつと以前に買つたので、もう古くなつて居たから五圓位頂けばいいつて云つてるのよ。その云ひ様がね。」

「いよ／＼本性をあらはして來たんですね。」

と、私は云ひながら、松尾がうつかりして居て強請の言葉を少し早く云ひすぎてる様なのが滑稽に思はれて笑つて了つた。

けれどもいよいよ本物の強請だなど思ふと、それが松尾だけに一層不快だつた。それ位のものが何のたしになるのだらうと思ふと莫迦けても來た。そして僅かそれ位の金の爲に主人の家を罵倒し脅迫する淺ましき、愚かさが考へられた。

「今度來たら僕うんと抑へてやりませうか、此方が正しいのならどこへ突き出されたつて恐れる事はありませんからね。疑ふなら警察へ云ふなり、何んなりするがいゝぢやありませんかね。松尾も莫迦だな」

と、云ひながら、私は威丈高になつて松尾を説き伏せる様を想像したりした。

「お金が五圓ばかりほしいのならそう云つて呉れたらね、可哀そうに思つて何でもしてあげるんだけれど、そんな人を泥棒呼はりするなんて餘りだわね。人のものを盗むなんて汚らしい事は思つた事さへないのに、あんな松尾なんかの物を盗んだなんて疑はれるのは、ほんとに口惜しくて仕様がな」

と、母は自分の言葉に自分が哀れまれて涙聲になつて居た。

「松尾なんか乞食の類ぢやありませんか。乞食のものを誰が盗むもんですかね」

と、私は母を安心させる爲に、散々松尾を罵倒した。

私達の間では色々松尾に恵んでやつた事や何か話された。よしや此方が悪い事をしたとしても、そんな恩恵でその罪を消して貰ふ心は微塵もなかつたし、その恵みをかけてやつた時だつても、報ひを求める心からではなかつたものゝ、こんな時になると、松尾の忘恩を責める爲に、こんな事ばかりが思ひ出てきた。

「それでどう云つてお歸しなさんです」

「兎に角、五圓のお金がほしいつて云ふんだからね、お父うさんにお話してみてどうかするつて云つて歸したの。まあしつこいつてほんとにいやになつて了つた」

と、母は疑はれて居る者の悲しさに青いこめかみをびり／＼動かして居た。

私には他人から疑はれて居る口惜しさ寂しさと云ふものはわかつて居た。ましてそれが忌はしい盗みであるだけに、母としてはどんなに口惜しく悲しいかと察せられた。五圓の金を與へて松尾をこの後出入させない様にしたらとも云ひあつた。

母はどちらにしたつて此の後一切松尾は近づけぬと云つて居た。

「氣味が悪くてならないのよ。之を恨に思つて何かしやしないかと氣づかはれてね」

と、母は自分の臆病を恥ぢてる様に笑ひながら云ふのを聞くと、私の胸には偉大な説教者の強い心の様なものがこみ上げて來た。

「僕この次に來たらうんと云ひふせてやりませう」

私はこう云ひながら、そうなるのなら自分の力をふる爲に、松尾がも一度位は來てくれてもいいと云ふ氣がした。

その夜。夕飯の時に又そのことが話された。父は併し、五圓の金を與へることに反對した。

「お前の方に少しの疚ましいところもないなら、この際は壹錢だつて松尾にやつてはいけないよ」と父は眞面目な顔で云つて居た。母はうつむいてうなづいて居た。

「そんなものを借りた事は恥度ないんだらうな」と、頻りに父は念を押した。

「此方に疚ましい所がなければ、おくが一番い。何もやつちやいけないせ。向ふの云ふ通り五圓の金を、たとひ恵んでやつたのも、そうするとそれこそ反つて本物にされて了ふからな」

と云つてゐるのをきいて、私は成程そうだったと思つた。疑はれて居る人がどんなに身をつゝしまねばならぬかと思つた。そしてすべては解決させようとして、解決を與へる所へ迄行けば正邪が定まるのだ。そして常に私達の方が正であり、松尾が不正であることを信じて私達はだまつて居ればいゝのだと思つた。

「珊瑚のお珠數なんて随分高價なものですな。妾吃驚して了つた」と、母は云つて居た。

「そんなものを尋ねて歩く必要がないぢやないかい」と、父は不興氣だつた。

「えゝ、何も買ふ氣ではなかつたんですけれども、只お珠數屋の前を通つたから、どんなものかと思つて尋ねて見たんです」

「そんなもの決してやつちやいけないよ。そんな物を與へたらもう、どんなにお前が辯解しても、それを與へた理由を云つてきかせても駄目だからな」

「はゝ」

と、母は自分の心に疚ましい所のないのを示さうとする様に笑つた。

私はあまり松尾の責め様が苛酷な爲に、一時逃れに母が珊瑚の珠數がもし安かつたら、買つて與へてもいゝ位の氣で價なんかを尋ねたのではないかと思ふと、實際母が氣の毒だつた。

自分に不正があるにしろ、ないにしろ、責められる辛さから、この場を逃れたいと思ふ心になる事は、あり得ることだと思はれた。まして女の身としては疑はれ、責められるのがどんなに辛いことかと思は

れた。今、珊瑚の珠數を買つて與へるのは、犯罪を自白するに等しいのだと云ふ感じに伴ふ苦痛や、恥辱よりも、少しの口惜しさ位は忍んで、自分の忘却として許されたい。そして心の奥底は明であること、を示したいと云ふ方が強く働いて居たんぢやあるまいかと思はれた。そう考へると母の爲にどんなにでもして松尾を説き伏せて、松尾が兄嫁や姪の爲に唆かされた事を白狀させたいと思つた。松尾を悔悟させてやらねばならぬと思つた。

「決して物をやつてはいけない。此の次來たら追ひ歸して了へ」と、父は云つてゐた。

それから四五日たつた後に、又姉が自家へ遊びに來て居た時に、松尾がそつと入つて來た。

「あら又來た！」

と、小さな聲で妹か誰か云つた聲が、直ぐに私達の心に可なり暗い影を投げた。

「僕一つ云つてやりませう」

と、私が立ち上つて勝手口の方へ行くと、

「厚かましいわね、五圓のお金を貰ひに來たんでせうか」

と、云ひながら姉も立ち上つた。

松尾は勝手知つてゐる事だから、だまつて臺所の方へ入つて居た。そして姉と私を見ると、苦しそうな御愛想笑ひをした。

私は松尾が板の間へべつたりと座つて、頭を板にすりつけてお辭儀してゐるのをぢつと見下してると、

急に可哀そうになつてきた。

頭から叱りつけてやらうと思つて居たのが、あんまりみすばらしい様子に出あつて氣がひけた。こんなに迄苦しい目にあつて主人を罪人にしたり、僅か五圓の金を取りに来る爲に悪者になつたのかと思ふと可哀そうだった。五圓位の金がどうにもならないのかと思ふと、叱りつけて追ひ歸へす代りに、自分の小遣ひの中から壹圓でもやりたい氣がした。

私はだまつて立ちすくんで了つた。すると姉がびり／＼した調子で云ひ出した。

「お婆さん。どんな用事があつたの。今はね、お母さんは頭が痛いので寐て居らつしやるんだから私がいいてあげませう、お婆さんあの珊瑚のお珠數のことで來たんぢやないの」

松尾は曖昧な様でうなづいた。

「お婆さんどうしてうちでお婆さんのものを盗んでると思つてるの」

と、姉がてきぱきとやつ／＼けるのに、私は少なからずはら／＼した。

「そりやお貸し申したには決して間違は御座いません。屹度お奥さんの思し召し違ひでせうと思ふんで御座います。」

「でもね、いくらお婆さんがそう云つたつて此方ぢや決してそんなお珠數なんか借りる筈がないのよ。澤山子供が居ることだから、一つ位かりたつて何にもなりやしないんだからね」

「そりやそうかも知れませんが、たしかにお貸し申しました」

と、松尾も負けようとはしなかつた。

「そしてお婆さんではどうしてもそのお珠數を返へしてくれつて云ふの」

「え、そりや妾のなら、お差し上げしてもよう御座んすけれども嫂ので御座んして、それでどうしてもお貰ひしてこいと申しますので」

と、如何にもすまない様には云つて居たが、可なり強い言葉だつた。

「ぢや若しも私達の方で借りたんだけれどもなくして了つたと云ふのだつたらどうする氣なの」

松尾はこう云はれてもすまないと云ふ風に

「そうなれば致し方が御座いませんから、五圓位頂いて參りますれば、何とか云ひ譯が立ちますんで」  
と、云つて卑しい追従笑ひをした。

私はその言葉をきくと、姉が松尾の見えすいた強請をきいて見たい心持から、こんな惡戯のやうな問ひ方をしたのではないかと思はれて可笑しくなつて笑ひかけた。すると今まで冷めたい顔でぢつと松尾をみつめて居た姉の顔にも突然笑ひが上つた。

そして姉は笑ひながらも鋭い調子はゆるめなかつた。

「まあお婆さん——初めからそれがほしくてお珠數のことなんかこしらへたんぢやないの。そうでせう」

松尾は袂でそつと涙を拭いた。

「大外れたそんな事がどうして出来るのですか。只私にはお珠數か、お金を頂いて行きませんと申し譯が立ちませんので……」

「そんな事云つて、どうでもしてお金をとつていかなきや承知出來ないんだらうけれども、私の方ぢや一寸も覺えがないんだからね、そりや五圓のお金位ならほしいつて云ふのならあげてもいいけれども、

私達を泥棒呼ばりするのは餘りぢやなくつて。ねえお婆さん。私達があやしいと、どうしても思はれるなら巡査になり何になり云つてみたがいゝぢやないの。こんな事で毎日／＼來てはいやな事ばかり云つて居らずにさつさと出る所へ出て頂戴よ」

姉はかう云つてきめつけた。

姉の言葉の強いのに／＼しながらも、私には自分の云ひ得なかつた事を姉が／＼云つてくれたのが、矢張り小氣味よかつた。

松尾はうつむいて頻りに袖で涙を拭いて居た。

「お婆さん。私もお婆さんが心の中から悪い人とは思つて居ないのよ。お婆さん屹度うちの人に唆かされてるんだわ。よつく考へて御覽よ。そんな莫迦らしいことをせずね。たつた五圓のお金をほしい爲にこんないやな名を主人にくつゝけていゝと思つてゐるの」

と、姉は口調をかへて、しんみりとささす様に云ひ聞かせた。

私には松尾が悪かつたと云つて泣き出して謝罪する場面が次の瞬間に起るものと想像された。そして妙にセンチメンタルな氣分になつてきた。

けれども松尾は顔をあげて涙にぬれた目を／＼させながら

「何も五圓のお金がほしいのでも御座いせんけれども、珊瑚のお珠數はお貸し申したには違ひないんで御座いますから……」

姉は自分の言葉が何にも役に立たなかつたと知ると、到頭怒つて了つた。

「お婆さん。あんまりだわ。こんなに云つてもまだわからないのなら私もう知らない」

と、姉は腹立たしげに云ひすてゝ、さつさと茶の間へ行つてしまつた。私も何も云はずに、そこに俯して泣いて居る松尾だけを殘して姉と一緒に去つた。

私には松尾の心が憎いには憎かつたが可哀そうだつた。自分のやつてることが悪いと知りながら、邪見な嫂や我儘な姪にこづきまはされてる辛らさに、何か持つて歸らねば又、ひどい目にあふのが恐ろしくて、かうして必死になつてつかみかゝつてくるのだと考へると哀れでもあつた。

「お母さん駄目です。ほんとに松尾は仕様がありません」

と姉は茶の間でさつきからぢつときいて居た母に告げて居た。母は小聲で松尾との話をきいたりした。そのうちに松尾はだまつて歸つて行く様子だつた。私達はほつとした氣持になつた。

「困つた事になつたもんだね」

と、云つて居た母の心の中では、結局どう云ふ風にしてけりをつけるか考へられて居るらしかつた。

それから後も私達の方では松尾が來やしまいかと云ふことが氣になつた。

時には巡査か何かくるのでないかと云ふことさへ私は思つたこともあつた。そして可なり長い間刑事が來ないと云ふのが、なくてはならぬものがない様な不思議な氣さへした。

併し松尾はその時から二度と來なくなつた。が、ほんとにもうこれで來ないのだと信じ切れる迄には可なり長い日がかゝつた。そしてその間に不快な記憶が時々出てきては私の心を惱ました。

勿論母を信じきつて居た。けれども松尾の來ることが恐ろしかつた。底知れぬ氣味悪さだつた。來ぬ

様にと願ふ心になつて居た。

松尾がもう再び來なくなつた後にも、時々松尾の話などが出ると、松尾は自分の不正を恥ぢて來なくなつたのだと云ひあつた。

「莫迦だね。あんなつまらないことで、到頭うちへも來られぬ様になつて了ふなんて」  
と、云つたりした。

私の誕生の時から自家へ出入りする様になつた事を考へて

「ありや僕と縁があつたんぢやないんですね。僕の生れたと一緒に自家へ來る様にはなつたもの、實はお里の外祖母さんと縁があつたんですね。だから外祖母さんが死なれるとこんなことになつたんでせう」

と、別に人間同志の間の縁とか云ふものを深くも考へて居ない私も、軽い雑談の一つとして云つたりした。

妹等は時々街で出會つたと云ふ話をした。

「まるで知らぬ人の様に餘所の方を見てだまつて行きました。」

と、話すのをきくと、莫迦だなあと云ふ氣ばかりした。可哀そうとも憎いとも思はなかつた。

それから一年ばかりたつた後のことであつたが、東京に居る上の姉の所で、私と二番の姉とが集つたことがあつた。

可なり長い間會はなかつたので、私達の間には色々なことが話された。

その時何かの話から松尾の話へ移つた。上の姉はまだ何も知つて居なかつたので

「松尾は今でも來るの」

と尋ねた。私と下の姉とは同時に顔見合した。

「來られるもんですか。あんなひどいことをしたんですもの。でも僕憎いと云ふより莫迦だなあといつと思ひますね」

と、云ひながら、私は下の姉が強い言葉で松尾の不正と母の疑はれた痛はしさを云ふのをまつた。が、下の姉は只私の言葉に輕くうなづいたのみだつた。

「まあ何かあつたの。松尾がどうしたの」

と、何もしらぬ姉は驚いて尋ねた。

「つまらない事なんですけれども、松尾がお母さんを泥棒呼ばりしたんです」

と、云ひながら、例の出來事をぼつ／＼と話した。私はその話をきながら、終つたら散々松尾を惡く云つて、皆で松尾の愚鈍をせめてやらうと思つて居た。

ところが姉は悉皆云ひ終つてから、私の知らない出來事をつけ加へた。

「でもね、あれ松尾ばかりが悪いのぢやないかもしれないのよ。お母さんがよく考へて御覽になつたらね、もしや長澤ね——あの外祖母さんの乳兄妹の長澤がもしや松尾から借りたんぢやないかと思はれるんですつてね。そうだつたら松尾も可哀そうだね」

私達三人とも同時にだまつて了つた。そして私はもしかして之が事實だとすると濟まないと思つた。

そして事實であつてくれ、ばい、とも思つた。

松尾は穩にものを云ふことが出来なかつたのだ。慇懃にも云ふことをしなくて、それであんな粗暴をしたのかもしれない。それが反つて此方から疑はれたのだ。と、そう思ふと松尾の愚ろかさが可哀そうに思はれた。

そう云へば、松尾自身では主人を訴へることの出来ること云ふ正しい心はもつて居ても、主人の名譽を重んじて差し控えて置いたのかもしれないぬと思はれた。

「そうだとすると松尾は偉い奴ですね」

と、私は云つた。

「別に偉つてこともないぢやないの」

「でも、そりや自分の思ひ違ひにしろ、向ふに邪があり、自分の方に正があると信じて居られたのに、訴へもせず、あゝして泣き寐入りしてしまつたんですからね。考へて見ればたつた五圓位を強請する人もないでせう」

と、私は疑はれて罪された忠婢のあとを思ふ様な心持になつて、いつかの日、姉に叱られて板の間に泣き伏して居た松尾の様子を思ひ出して涙つぽい氣になつて了つた。

「だつてそりや信さんのお人よしつてものよ。長澤が借りたかどうかはそりやわかりやしないことだし、只お母さんの推量だけなのよ。何しろ貧すりや貧するで、あの盲目や藝者あがりが居たら何をさせたかしないわ。貴方みたい心になつて松尾に長澤に貸したんぢやないかなんて云つたら、それこそ貴方を證人にして又長澤の所へ押しかけて行くかも知れなくつてよ。訴へないからつて、五圓位のもので

證據もなしに訴へる人もあるまいしね」

かう云はれると、私の考へも皆こわされて行つた。

「さうかも知れませんがね。でも姉さん達はごちうだつたらいいと思ひます。松尾がほんとに強請るつもりだつたが、それとも長澤に貸したのを思ひ違ひして居たのか……」

と、私は當面の問題をはなれてこんな事に興味をおぼえ始めた。もしも思ひ違ひをしたのだとすると、私達の處置はあまり嚴格だつたと云ふ様な事から、自分達の行爲の省察に興味をもつた。

「ごちうでも同じ様なものゝ、矢張り思ひ違ひの方がいいわね」

姉は議論に入るのを面倒くさい様に口をとぢた。

私は事實は何れにしろ松尾の思ひ違ひを信じたかつた。そしてそれによつて感ぜられる方の松尾の愚かさを憐れみだかつた。

そしてその心だけが松尾をほんとに許すことが出来、今すぐでなくとも、何かの機會に於て、外の心では出来ない時でも、この事件に解決を與へることの出来る心だと思つた。

再び出入せぬ様になつた松尾と私との間に、何の關係もないにしろ、私としては、短氣でともすれば怒り勝ちになり人を憎もうとする心を、こんな拙い手段によつてでもいゝ、すなほな、人を愛し、人をゆるし、人を哀れんで行く心になほし立てゝ行きたいと思つた。

姉二人が色々な話をして居る間に、私はだまつてこの事について考へて居た。

# 國旗

中野重治

泰三が事務所へ出かけてしまうと、お房は昨日のほごき物を又續けた。ちつと坐つて居ると膝がいたくなるので、家にはほかに誰も居ない事は分つてゐるので、膝を崩して横坐りになつて仕事を續けて行つた。

こんなときまつて頭に浮ぶのは國の方の事だつた。今頃はきつとあの柿の葉がつや／＼といふ色になつてゐるに違ひないと思つた。それを食べるごしみて夏になつたのだといふ氣になる胡瓜もみをこつちへ來てからまだ一度も食べない事も考へられた。それにもまして思ひ出されるのは残して來た一人息子の子の耕一の事だつた。

耕一はほんどこにかはいゝ子だ。あの時はまだやつと五つになつたばかりだつたけれど、聞分けのいゝ子でおとなしく家へ残つて呉れたわ。一人しかない子を家へ残したくはなかつたのだけれど、あの時は何しろ鹿兒島へ行く事になつたのだから、それにその頃鹿兒島つて言へばずつと遠國の様な氣もしたもんだから仕方なしに残して來たのだわ。去年國へ歸つた時はほんとに喜んだつけ。けれども又すぐ別れなきやならなかつたんだわ。

「今度は母さんいつ歸るの」つて聞かれた時は、もう少しで泣き出す所だつたわ。いよく今年から學校

へ上るつて言つて來たが、大人で毎日學校へ行くか知ら。それにあの子ばかりだが弱いし。

お房は仕事の手を止めて、ぼんやり外を見て輕いため息をついた。

それやわたしだつて、何も好きこのんでこんな朝鮮くんだりまで出かけて來たわけじゃないけれど、鹿兒島に居るよりかお金も澤山貰へるし、生活もし易いと聞いたからあの人も乘氣になつたのだわ。來て見るごなる程お金はあるご貰へるし生活は樂だし、その點では聞いて來た通りだけれど、何だか淋しくて仕様がな。百姓をして居るだけでは、とてもあの子を上の方の學校へ上げる事は出來ないんだもの。それに祖父さんも祖母さんもおはいゝ孫を大切にしていゝわ。でも早く歸りたいわねえ耕ちゃん。

「母さんは直ぐ歸りますよ」こんな言葉がふと口へ出たのでお房はびつくりして顔を上げた。我ながらおかしかつた。でも直ぐ耕一のふつくらとした赤い頬つべたが眼の前へあらはれるごほんとに會ひたくてたまらなかつた。嘗めてもしまひたい程かはいゝ息子に會ひたくてたまらなかつた。お房は兩手で胸を抱へてだきしめたが、手筈がないのでびつくりすると又息子の事を考へて居るのだつた。

お房が泰三と朝鮮へ渡つて來たのは去年の九月末の事だつた。あれからもう早や一年近くの月日が流れたのだと思ふご何とも言へない氣がするのだつた。國に居れば一年や二年は何でもなかつた。はじめ大郎に居た時分なんぞ「韓國……」と書いた手紙を受け取るごほんとに遠い所へ來てる様で、したがつてそれからの一年も淋しく永いものに思はれた。

内地に居る間はごこへ行つても青い山があつた。豊かな野があつた。然しこつちへ來て見ると山はみな禿山だつた。野は見るからに貧しげだつた。禿げた小山の片かげに土まんじゅうの墓場があつたりし



た。

奇妙な婚禮も見た。あの時はすぐに自分の結婚の日が思ひ出された。

泰三はお房と一しよになる前はぼんたといふ藝者と馴染んで、その人を妻にする事にして居た。けれどもひと度お房が泰三の側にあらはれると、彼の心はぼんたを離れてだん／＼お房の方へ傾いて行つた。泰三は決してぼんたを捨てよう等とは思つて居なかつた。けれどもお房にはぼんたに見られない新鮮なものがあつた。決して捨てはしないと思ひながら、日一日とお房に傾いて行く自分の心を泰三はどうにもする事が出来なかつた。

お房はそんな事をまるで知らなかつた。

ぼんたもお房の事は知らなかつた。然しまもなく氣がついた。變だなと思ひ出した。何かあるのだと思はずには居られなくなつた。ちよつと疑ふとその疑はます／＼深くなつて行つた。そして泰三から凡てを聞き出してしまつた。ぼんたは眞底からがつかりしてしまつた。けれどもお房の事を聞いたからつて、今更やつきになつてお房から泰三を奪ひ返す等といふ事はとてもぼんたに出来る事ではなかつた。ことに泰三がお房の事を、妙におど／＼とあたかも罪人が許しを乞ふ様な態度で白狀するのを見ると、怒る氣にもなれなかつた。獨りで考へると泪が流れたが、その泪には泰三をあはれに思ふ心も多分に混つて居た。お房の事を考へても、不思議にも嫉妬らしい心は起らないで、却つてそのきつとまだ娘々してゐるに違ひないお房が何だかなつかしまれて、一度會つて見たい様な氣さへするのだつた。けれども内氣なぼんたは會つて見たいとは泰三にも言へなかつた。そしてこんなにつかりする事はしても、嫉妬めいた氣も起さない位だから、泰三と一しよにならない方がいゝのかも知れないと考へた。いつそいさぎ

よくお房にゆづつてしまはうかとも考へた。でも泰三に會つて見るとそんな事はまるで忘れて嬉しかつた。返した後で、あれが今お房に泰三を奪はれようとするあぶない瀬戸際の自分の態度かと思つて、その時のはいやいだ心持が情なく思はれる程だつた。そしてやつぱりゆづつた方がいゝのだと考へた。いとしい心はちつとも變らないのだけれど、そんな話を聞かない前よりは却つて増して居ただけで、縁がないのだとあきらめる心が強くなつて行つた。

その頃になつて始めて、泰三はお房にぼんたの事を打明けた。聞いたお房は全く氣も顛倒するばかりだつた。然しお房とても、ぼんたを惡む氣は少しもなかつた。それに泰三は自分の方へ傾いて來るばかりだし、ぼんたも悲しくあきらめて居るのだと聞くと泪ぐましくさへなつて、ぼんたがよく物のわかつた姉の様に思はれるのだつた。

そしてだん／＼一方は疎くなり一方は親しくなつて行つた。そうしてどう／＼お房と泰三とは結婚した。

今でもぼんたの事を考へると、そのかう何だか頬のぼちや／＼した顔を思ひ出す事がよくあつた。頬が圓いといつても、泰三から聞いたわけでもなく、又勿論自分で見たわけでもなかつたけれど、そのぼんたといふ名を思ひ出すといつても先づ頬のぼちや／＼した顔が胸に浮ぶのだつた。けれどもそれを思ひ出すたびに、だ／＼頬のぼちや／＼した姉さんはすこしおかしいと思はれた。

結婚してから泰三はふつ／＼りぼんたに會はなくなつた。手紙の事位は何とも言へなかつたが、二人の間が格別心配する必要のない事は、お房はかたく信じて居た。

泰三は泰三で、ぼんたよりもずっと若いお房を安心させる爲に、會ひたいと思ふ事があつても控へて

居た。手紙なども三度に一度位しか返事を書かなかつたが、それでも恨がましい事を言つて來ないぼんたがはいさうでもあつた。然しお房に不足があるわけでもないの、楽しくおだやかに暮して來た。

生れた男の子を國へ殘して鹿兒島へ勤める頃は、泰三はもうぼんたの事を忘れてしまつたらしく見えた。鹿兒島から朝鮮——幾度考へ直してもう一年近い月日が流れたのだつた。あの子にはもう二年あまりも會はないのだと思ふと、お房は國へ歸りたくて仕様がなかつた。玄海を渡る時は又苦しむ事だらうけれど、耕一に會へると思へばそんな事は何でもなかつた。

それに内地とは違つて、生き／＼した所は多くてもゆつくり手足を伸ばして休むといふ様な心持にはどうしてもなれなかつた。始め來た時は悪い所じやないと思つたが、あれから俸給が上るじやなし、友達があるわけじやなし、こんな位ならいつそちつとばかり苦しくとも内地の方へ移りたいといふ氣が近頃だん／＼濃くなつて來たのだつた。

いつか折を見て泰三に相談しようと思つてる中に一と月ふた月と過ぎて行つた。

その中に突然朝鮮が日本のものになる事にきまつた。お房はそんな噂を今まで一度も聞いて居なかつたので驚いた。そして朝鮮人がはいさうでもあり、又わけも分らず日本人が淺ましくも思はれた。その上近頃は方々に暴徒が起きて、そんな事までもお房の歸心を煽り立てた。

仕事に倦いて一人でひる飯をすますとお房は買物に出かけた。

久しく町へ出なかつたのでぶら／＼してると又しても國の方の事が思はれた。そして珍らしくあのぼんたの事も思ひ出された。何だかすまない事をした様な氣もした。

「だつて仕方がないわ、あゝなつて行くのがいちばん順當だつたんだもの」かう考へてお房は自分を辯

護した。そして今でも二人が時たま昔の事を思ひ返すぐらゐの事は大目に見てもいゝと思つた。

お房が家の方へ歩いて來た時、となりの朝鮮人の小さな家の軒に日の丸がぱた／＼してゐるのを見てびっくりした。なほ近づく、それは何とか云ふ朝鮮にだけある丈夫なふすまに貼る様な紙に赤く丸を描いたものだといふ事も分つた。丁度その家の前まで來ると、中から子供（それはかはいゝ子で、どこか耕一に似通つた所があるので、それに日本語がよく分るのでよく内地の話聞かせたり、一しよに町へ連れて行つた事などもあつた）が出て來たので、

「ちよんが、あれはどうしたの」と日の丸を指さしながらさういふ。

「奥さん、國旗を出す様にどの事でしたので、昨日紙を買つて來てわたしがかいたのです」さう言つてちよんがは顔をまつ紅にした。

「ちよん」

お房はちよんがの顔を見ながら、今夜こそは切り出さうと思つた。

# 美しき暗闇

深町弘三

「ボオは私の一番好きな小説家の中の一人です」と、私が或時何かの話の際にA氏に言つた時、A氏は「さうですか」と、何気なく言つた後、暫く言葉をさぎつて、目をしばたきながら黙つて私の顔を見つめた——何かを思ひあてたかの様に、そしてそれをはつきり思ひ出さうと努力してゐる様に、そしてそんな時誰でもがする様に。それで私も黙つてゐると、A氏はやがて、やつと思ひ出したといふ風に目を光らせながら口を切つた。

「が君」A氏は言ふ。「ボオの好んで書く様な妙な人間が世の中には一体居るものなのかね。」

「さあ——」と私がちよつと言つてそれから何とか答へやうとした時に、それを遮る様にA氏は言ひ續けるのである。私の返事なんか待つてをれないといふ様に、私がめつたなことを言つてくれば困るといふ様に、あはて、——

「居るんだ」そして唾をぐくりと呑んだA氏は續ける。「居るんだよ君。君がいくら否定しても居るのだ。といふのは實際私が一度そんな人間に會つたことがあるのだ。」

さう言つて又A氏は口を噤んだ、さつきの様な目付をしながら——今度は私の目の色から何者かを探らうとする様に。が私が黙つてゐたので、A氏は言ふ。

「……それで、君がボオが好きだと言ふから、その男のことを君に話してあげようと思ふのだ。いや、今の私の心持をあらさまに言ふことを許して貰へれば、私は君に是非聞いて貰ひ度いのだ。この話をしても私の言ふことをほんとと思つて聞いてくれる人がゐない。實際、この話をして其の相手から「それは君の夢だらう」と言はれた一度の経験以來、私は誰にも話さうとはしなかつた。それ以來、その男のことが私の胸の底に秘められてゐるのに乗じて、「それは君の夢だらう」といふ友の無責任なつまらぬ言葉が、今まで私が確かに信じて居た其のこの實在を、私としては恥づかしくも、ゆるがし始めたのだ。ほんとに私は其の男に會ひ一緒に話したのだらうか。或は友の言ふ通りそれは夢だつたのだらうか。私には明言出来ない氣がする、夢ではないと確かに信じてはゐながら、ともすると私の確信はゆるがふとするのだ。……思はず前提が長くなつた。今までの話で君の好奇心は沸き立つて來たであらう。どんな不思議な奇怪な話だらうと君は思つてゐるだらう。では話さう。恐らく私の話は君の其の期待を裏切はしないだらうと信じて。」

そこでA氏は、私の顔に無意識にも浮んだであらう微笑の中に、彼の推量の正じいのを信じ、又彼に對する私の同意を汲みとつて、そして話し始めた。

## (A氏の話)

それは私がまだこゝで警察へ務めてゐた時のことである。(書いておくのを忘れたが、A氏は昔、今の

尾張町へ開業する迄は、石川縣の警察醫をやつてゐたのである。その日は何月の何日であつたか確かなことは覚えてゐない。年は私の警察へ務め出してから確か二年目の筈だから、餘り昔のことでないことは君にはわかるだらう。(A氏が帝大を出て北里研究所に一年ばかりゐて縣へ奉仕したのは大正五年のことであるから、A氏の所謂「その日」は大正七年中の出来事らしい。)確かな月日は忘れてしまつたが、何れにしる春の初めであつた——多分三月の終り頃だつたらう。(こゝでちよつとA氏は言葉を切つた、話の順序を考へてゐる様に。それからやつと考へがついたのだらう、やをら口を切り出したのである。)さうだ。矢張り事の初めから話さう。

私はその日知人を見送る爲め電車で停車場へ行つたのである。午後の三時か四時頃だつたらう。そして天氣はよかつた、丁度今日の様な——(と言ひながらA氏は窓から外を見る。私も無意識に紺青の空を見上げた。それが陽炎にゆらめいて見える四月である。)この日の様子はよく思ひ出せる。私が綿入れを脱いで袷の着物に袷の羽織を着てゆつたこと、共に——が、そんなことはどうでもいゝ。今日の様な春らしい、天氣であつたことを思つてもらへばそれでいゝのだ。で、ちよつと電車が武藏ヶ辻まで来た時であつた。五六人の男や女が私の乗つてゐた電車に乗つた。その一ばん最後に遅ればせに一人の男が乗つたのである。といふよりも、「一人の人間が」といつた方が適當であらう。初め見た時には、男が女か私には見わけがつかなかつたのだから。といふのは、その男は——その男は、眞黒なマントを着て、しかも頭巾をすつぱりと眉毛のあたりまでひつかぶつて、其上口のあたりをしつかりと幅廣い頭巾附きの帶でおほつてゐたのである。ひきずるやうな其の長いマントを着て、殆ど覆面と言ひたいほどに顔をおほつて、その男は——男と言はふ。後で男であるといふことはわかつたのだから。——私のすぐそば

の車掌臺の人口の扉に凭れて私の方を向いてちつと立つてゐた。これから考へてみると、私は車掌臺に近い方に腰かけてゐたのであらう。そして電車はかなり混んでゐたらしい。乗客の殆どすべての眼が、殊に近いので一ばん鋭い私の眼が、好奇心と嘲笑とに燃えてその奇怪な男の身邊に注がれたのは勿論である。何故といつて、時は春で、天氣はいゝ、眞晝である、人は袷を着てゐるのに、マントでしつくり身体を包んだ男は、赤毛布をせおつて大都會の眞只中へ出て来た田舎爺以上に、人の眼を惹くのは當然だから。ところで、私の視線がゆくりなくもその男の顔——顔といつても眉毛までと口から下とはマントでかくされてゐるのだから、見えるのは兩頬の一部分と鼻と眼だけである——その眼に、私の視線がぶつゝかつた時に、そしてちよつとその時その男の視線も私の方へ向いてゐたから、お互の視線がぶつゝかつた時に、私は思はずも

「お！」と、聲をたてずにはをられなかつたのである。(こゝでA氏はちよつと言葉を改めて言ふ。「かういふ工合に話すと、君は定めし私の話が何だか小説じみてゐると思つたかもしれないが、實際その時の私の氣持は、小説の奇妙な不自然な偶然なんかよりもつと妙な氣持であつたのだ。それは——」そしてA氏は話し續ける。)

それは、その男が私の友の淺野謙吉であつたからだ。

君は私が、いゝつかしや、であることを知つてゐるだらう。そしてよくその輕卒から人を間違へて路上でつまらぬ醜態を演じたりしたこと——今でもあるが——知つてゐるだらう。其時も、「お！」と思はず聲をかけてはみたものゝ、その聲をかけたのと殆ど同時に私の心には後悔の念がわいた。併し、「人違ひではなかつたらうか」と思ふか思はぬに、その男——淺野謙吉は言つた。

「お！A君か。」

私の不安は其の聲で消滅したが、今度は私はその聲で驚かされた。彼の聲には、數年も會はなかつた友に偶然思ひもかけぬところで會つた其の驚きと喜び以上に、ちやうど祕密に何かをしてゐたところを突然發見された時のやうな怪しみの調子を含んで、そして吃驚するほど亢奮して高かつたから。で、私が驚いて呆然として居る間に、彼——淺野謙吉はつか／＼と私の前へ歩いて來た。「つか／＼」といつたが實は酒に酔はつたやうにふら／＼と。そして、私の前にとまつて、腰をまげ兩手を私の膝の上へおいて、さうしたまゝ彼の顔を私の顔に近よせてしげ／＼と私の顔を見つめるのである。其の時も手は現はさない。マントにくるんだまゝ。だから、その時彼が着物を着てゐたか洋服だつたかは、彼が電車をおりる時下駄をはいてゐるのに氣がつくまで、わからなかつた。——がそんなことは話に關係のないことだ。私はそうされて思はずぶ／＼と身体が震へるのを感じた。それは私の驚きと恐ろしさの爲に私自身が震へたのか、或は彼が亢奮のあまり慄えたのが私の身體に傳つたのか、或はその兩方であつたかもしれない。何れにしろ私は恐ろしかつたのである。鼻の前にさしつけられた人間の顔は醜い不氣味なものはないのだから。又何れにしろ彼は恐ろしく昂奮してゐたのである、何故なら、彼は一度怪しく亢奮して震へた聲を出したから。前よりもまだ高く——

「お！A君か！」

そのまゝの状態がもう一二分も長く續いたら、私が顔をそむけてしまふか、彼が私の膝に突立てた腕の倒れるがまゝに私の身體に其のマントに包まれた彼の身體（彼の身體が果してあるかどうか疑はしいほど得体の知れぬ黒いマントの包み）をもたせかけて來たか、どちらかの結果に終つたらう。それは

どちらにしても電車の中のことにしては餘りそぐはないことである、實際、彼の私の眼をちつと睨んで居る黒眼のつりあがつた殆ど狂的とも言ひたいほどの鋭い眼は、マントの頭巾から現はれてゐるしかもマントの色どうつりあつて尙ひぐくなつてゐる彼の頬の鉛色の蒼白さと一緒に、私——漸く正氣にかへつた私、を脅かすに充分であつた。それに彼の腕の震へは益々ひぐくなつてきた。が幸にも、何處かの停留場へ來たのであらう、私の隣の客が立つたので、私は彼のマントをひつゝ、かんでその空席へ彼を坐らせた。「まあ、坐り給へ」と言ひながら。半ば無理にひつゝばる様に。彼は案外おとなしく腰をおろした。それから私は電車が再び動きだしてから彼の方を見た、ゆつくりと話すつもりで。が、私のその期待は眞向から裏切られた。彼はもう身動きもしないのである。私の居ることなど忘れてしまつたやうに。そしてちつと向側を見つめてゐるのである。私が思はず不思議のあまりにその視線をたゞらずにはおられなかつたほどに。何か彼の注意を異常に捕へるやうなものがあるのだらう。さう思つた私の期待も裏切られずにはをられなかつた。私の前にはさつきと同じ平凡な背廣が乗つて居るだけである。其の後ろの窓を透しては人家の屋根の上に青空が見える。何も別に興味をひくやうなものはない。私はたまりかねて言葉をかけた。

「淺野君。君は今家は何處に居るのですか。」

私はなんの返事も得られなかつた。相變らず淺野謙吉の眼は何物かを追ふやうに動かない。私は肩で彼の身體を押しながら繰り返へした。

「淺野君！君は今何處に居るのですか。」

こんどは彼はちよつと私の方へ顔をむけた。といふよりも、無意識に頭を動かしたといった方が適當

かもしれないほど、それはかすかなものであつた。そして、

「あ！」

それは腹の底からもみあげたやうな呻きである。

「浅野君！」

不氣味にいらだつた私は言つた。彼は初めて言葉を出した。それはものさうな――

「私の家……………」

語尾の方は聞きとれなかつた。がそれは私を喜ばせた。で私は言つた。がそのものうい言葉の調子は私を不氣味にした。で私はすぐその口を噤んだ。「うん……」と口籠つただけで。彼はその言葉を續けることをしないで黙つて立ち上つた。電車は速力をゆるめてゐたのである。彼はそのまゝ黙つて二三歩車掌臺の方へ歩きかけたが、突然、立ちどまつて私の方を振りかへりながら、又その震へた甲高な聲が口から出る。亢奮に吃音りながら。

「お！さうだ！――待つてゝくれ給へ！」

そのまゝ、彼の黒い姿は見むきもせずに車掌臺から消え去つてしまつた。私はあつげにとられてしまつた。

「お！さうだ！――待つてゝくれ給へ！」何のことだらう？私に言つたことではないのだらうか。では誰に言つたのだらう？それとも獨語だらうか。では何故私の方をわざ／＼振向いたのだらう？その時、今まで頭の中に起らうとして起り得なかつた者が初めて閃いた――彼は氣が狂つてゐるのではないだらうか。私の眼前には、あの大きな澄みきつた何物にも比し得られぬほどの鋭い光を放つ眼と、死人のや

うに蒼ざめた鉛色の顔色とが浮んでくる。その考をジャスチファイするやうに、が氣が變なのだととして、あのわざ／＼私の方を向いて叫んだ「お！さうだ！――待つてゝくれ給へ！」は何の意味を持つて居るのだらう。私の思は沈んで混亂した。若しあの甲高い電車のカーブする軌音が私の耳を突かなければ、そこが白銀町であつたことも知らなかつたであらうほどに。

併し、それもその日ばかりであつた。若し彼がそのまゝ永久に私の前へ現はれて來なかつたならば、私は時々彼のことを思ひ出すことはあつても「彼は狂人であつたのだ」と思つて彼のことを考へるのをやめてしまひ、最後には彼のことは私の頭の中に浮ばないことになつてしまつたであらう。が、その翌日の晝頃彼の名は再び私の眼前に現はれて來たのである。「お！さうだ！――待つてゝくれ給へ！」といふ謎の言葉はやはり誰でもない私に言はれたものであつたらしい。そして少なくともこの謎の一部分だけはその葉書で解けたのである。葉書――彼のところから來た葉書にはかう書いてあつた。大きな亂雑な字で。

待つてゝくれ。十一時に。公園で。屹度。會つて話す。

かう讀まれた。讀んだのではない、讀まれた、寧ろ判せられた。それほど字は亂雑で或所は二つの字が重なりあつてをり、そして奇妙な文面である。

私はそれを見て困つてしまつた。それは本氣に書いたのではないであらうと疑はれるほど亂雑で簡單であつたから。第一日付がなかつたから。それは、君が、いや凡ての人が「馬鹿な」と腹の中で笑ふであらうほど、小説じみて且幾分氣狂ひじみてゐたから。――何故小説じみてゐるかを反問するかもしれないが、それは、この浅野謙吉はその時から殆ど六年前にお互に顔を見なくなつてから、其の日がほ

んどに六年振りの出會であつたのだ、六年振りに會つた友からの最初の消息がこんな葉書であるのだから、それは恐らく小説じみてゐるとか氣狂ひじみてゐるとか言はれるのは當然であるだらう。——これで、淺野謙吉を私が知つてゐた時は大概君にはわかつたらうが、彼は——高等學校で私と親友であつた彼は、高等學校の三年の二學期になつて突然廢學して文字通り姿をくらましてしまつたのだ。あれ程親しかつた私のところへ何の消息もなかつたほどだから、彼の行衛——寧ろその當時問題は生死であつたほどであるが——は彼自身の外誰も知らなかつたのであらう。——「彼自身の外」といふのは或は奇妙に聞えるかもしれないが、これは大して誇張した言でもないであらう。若し私が二度も彼の家へ彼を尋ねて行つても、「何處かへ行つたきり行衛がわかりません」と眞顔で言ひ／＼してゐた彼の家人を信用したならば。

それで話は戻る。で私は困つたが、前日の電車の中で彼の亢奮して言つた「お！さうだ！——待つてくれ給へ！」といふ言葉を思ひ出して、さう／＼——（A氏は、私の顔を見てふつと言葉を斷つて、幾分話してゐる中に沈痛さでも言ひたいやうな色の浮んでゐた顔に微笑を浮べながら、言ふ。「君は微笑んだね。さうだ。私だから行つたのだ、意志よりも好奇心の強い私だから。その好奇心と同じほど多い臆病心の私がどんな心持で夜の十一時に公園へ行つたか。君の微笑んだのを見て、それを説明する必要はなくなつた。こんなことは話にはあまり必要ではないのだから、ごん／＼はしおらふ。」）

公園とだけで別に場所が指定してなかつたので困つてうろついてゐた私は、もうさきから來て待つてゐたらしい彼と、ちようど霞ヶ池の圖書館の裏に當る方に出會つた。私はよく彼の様子を見て、人違ひではないかと思つた程驚かされた。春の晝日中にマントを着て歩くほどの彼が、今は——春とはいへ冷

へる其の夜は、マントも着ない、烏打をかぶつた輕快な姿をしてゐたのである。近寄つて來る歩き振りまでが、電車の中の危い足どりとは全く違つてゐる上に、意外にも私よりも先に聲をかけるのである。「お！A君か。」

その聲までが怪しい程、間違ひなく淺野謙吉であつてもあの電車の中でやうな病的に亢奮した聲で叫ばれては……と内々びくついてゐた私には嬉しい程、寧ろおかしい程、元氣がいゝ。私の不安は和ぎ心は落着いた。

「さうです。やつぱり淺野君か。」

と私は嬉しい氣持で言つた。が、私の心の底にはやはりあの狂人のやうな男が私に今頃何の用があるのだらうといふ疑惑が、恐れが潜んでゐたのであらう。といふのは、そう言つておいてすぐに、私は冷かな詰問するやうな口調で言つてゐたから。

「が、一体何の用なんです？今頃——」

その私の答めるやうな言葉は彼を怒らしたらしかつた。彼の蒼ざめた顔がさつと亢奮して紅くなつたのが夜目にもわかるやうな氣がした。はつと思つた私の袂は彼の兩手で掴へられてゐた、ところが彼はさうして袂をひつつかんだまゝ、物も言はずに歩き出したのである。逃げやうにも逃げられない私の其の時のおびえきつた心は今から考へてみると吹き出したくなるほどおかしい。その時は、もう一途に何か恐ろしい危険が私を待つてゐるやうに思つてゐたのだから。さうして二人は傘山にのぼつた。

頂上へ着くと、彼は倒れるやうに其處のベンチに腰をおろしたまゝ黙つてゐる。その不安な沈黙は益々私の心を不氣味にした。が、彼は私の存在を忘れたかのやうに黙つてゐる。が、彼は忘れたのではな



かつた、そして怒つてゐるのでもなかつたらしい。その沈黙を破つた彼の聲は落着いた普通の聲であつたし、且彼は言ふ。

「A君。驚かしてすまなかつた。君はさぞ驚いたであらうが、それと同じ程度に私も驚いたのだ。君の何の用かといふ間によつて。といふのは夜であつたから。美しい暗闇が全てをつゝんだ夜であつたらう。」

これだけ一息に言つて、彼は前方の暗闇をそこに何かあるかのやうに見つめながら、言葉を斷つた。が、私が彼の言つた言葉の意味を解き得ないで再び寒い不氣味さに心の底を撫でられやうとした時に、彼は暗闇の中でも何かが見えるらしい眼射で私のその心を見抜いたのか、すぐ言葉を續けるのである。

「といつても、君には何の意味か恐らくわからないであらう。わからないにちがひない。今日君にこゝへ來てもらつたのは、その意味を君にわかしてもらふためであつたのだ。」

「夜であつたから。美しい暗闇が私を酔はしてしまつてゐたから。それだから、君の何用かといふ間は、酔から私を現實にひきもどしたといふ意味で、ひごく私を驚かしたのだ。が、驚ろかしてくれたことを君に感謝せねばなるまい。といふのは、若し君があの時あゝした言葉で私の夢をさましてくれなければ、私はいつものやうに夢をみたまゝ家へ歸つてしまつたであらうから。そしてそれは君にわざ／＼こゝへ來てもらつた意味を全く無にしてしまふことになるのだから。(こゝで彼は言葉を切つた)そして、未知の外國語で話しかけられたかのやうに呆然どうなだれてゐた私を見て、彼は微笑んだらしい。私が彼の言葉のどぎれたのにおどろいて頭をあげて彼の方を見やうとした時に、彼はあはてゝ語をついだから。君を不可解のうちに彷徨<sup>サマヨハ</sup>せるのはいい、加減でよさう。これを續けるといふことは、君に私が狂人ではないかと疑はしめるやうな結果になりやすいから。そしてさう君に疑はれ遂にはさう信せられることは私にとつては一ばんつらいことなのだから、少なくとも今だけは。私は氣は狂つてはゐない。酔ばらひは酒に酔はぬと言ふ、狂人は正氣だと言ふと君はいふかもしれない。が、私は斷じて狂してはゐない、氣は確かだ。君は信じてくれるであらう。あとからはどう言はれても仕方がないが、今だけは信じてもらひたい。……では、君に私が正氣であるといふことを信じてもらへたものと假定して、いや確信して、話を初めよう。」

彼の言ふことは相變らず私には五里霧中である、ちやうど言葉だけが聞えてそれが頭にまで傳はらないやうな。が、私の人一倍強い好奇心がどんなにむく／＼と頭をもたげてきたかといふことから言へば、彼の言は私を全く捕へてしまつた譯である。私は唯彼の話し出すのを片唾をのんででも言ひたいほどの心持で待つた。其中に彼は私の方をちらりと見て、それから私の方など見向きしないで話し出すのである。

「いゝから話し出して、かちつと見當がつかない。くはしく話してゐてはきりがないから成るべくはしおらふ、そして最後の要點を言つてしまふことにしよう。其の最後の要點だけを話してしまへば、今日君にこゝへ來てもらつた目的は果されるわけなのであるが、それではさつき<sup>さつき</sup>のやうに君を不可解のうちに残しておくことになる。それは君にとつても不快であらうし、私にとつても困る。だから面倒だが、君を見なくなつてからの私を少し話さう。……君を見なくなつてから——どれだけ長い時の経過がそこにあつたか私は知らない。何れにしてもあまり短いことではなかつたであらう。その間の私を私の口から話す前に、君は、君を見なくならない前の私を、記憶の中に描き出してもらはなければならぬ。」



青白い顔をした陰鬱な男であつた私を。何かに考へ耽つてばんやりとあの廣いグラウンドの隅の城のすぐ下の櫟の林の中に寝そべつてゐたりぶらついたり立ちどまつて石像のやうにぢつと空に浮んでゐるあの神祕な白雲の行衛を凝視したりしてゐた私を。夜は屋根の上へあがつて青白い月光を總身に浴びて數限りもないそして同じやうに數限りもない遠い距離のむかふにいみぢくも光る星を見つめて泣いてゐた私を。或は私の一ばん嫌だつたそして苦しかつた教室の私をでもない。少なくとも憂鬱と幻想の影とのつきまとつた私であるならそんな私でもない。とはいふものゝ、それ以外の私は想像しようにも存在してゐなかつたのだが。あの當時の私を描き出すことは君には容易なことであらう。では、その描き出されたヒポコンドリアクな影の男について語らう。……と言つてはみたものゝ、影の男の影のやうな記憶が影の男の影である男の頭の中ではどんなに影のやうなものであるか、それをいざ言葉で現はさうといふ時にはどんなに困難なものであるか、といふことを考への中においてもらはねばならないのは残念だ。すべては君の私といふ男に對する記憶に訴へよう。そして私の口からは簡單にもつとも影のやうなことを語らう。……君に思ひ出してもらつたその男、考へてみても怪しくもおかしいことであるが四高といふ學校にゐた時分のこの私……かうして考へてみれば悲しい氣がしないでもない。藝術家であることを夢みてゐたその頃の野心に燃えてゐた私を考へてみれば。どんなに私は生れつきのメラニコリアに罹つてゐることを慨くごころか喜んだであらう。佐藤春夫といふ人の小説や詩を讀んで、その作を通して見た作者と私自身との間に似かよつたところのあるのを發見して、どんなに自惚の強い私は喜んでらう、そして胸を轟かせながら藝術家であることを夢みたらう。自分でも呆れるほど空想の逞しい、子供のやうに夢をみ眠りの淺い、白晝も幻を見る私自身を、あのポオの怪奇な物語に現はれた全然日光

や空氣に背いた極端に幻想的な性質を持つたと想像される主人公、たとへばあの「ベレニス」や「モレラ」の主人公（こゝで彼がポオのどの作を舉げたか確かなことは忘れてしまつたが、それでも構はない。私がどれといふよりポオを好きであるといふ君の判斷にまかせればいゝことだから。）にあてはめてみて、どんなに私は藝術的亢奮に震へたことであらう。實際、ポオ位の文名を得ることは何でもないやうに私の空想的自負心は考へさせた。そして、その思ひあがつた空想にそゝられて、どんなに私はウィスキーを啜りながら眞夜中にペンを握つたことか。「譯詩三篇」として北辰會の雜誌にヴェルレーヌとマラルメとボードレールとを並べてみたほど頽廢派や象徵派の詩に耽つたのも、その頃の私であつた。さうした私が、私の所謂「凡才養成所」であり又實際凡才の集りであるやうに私にはうつたあの官僚學校に對して、どんなに叛逆兒であつたか、いや、叛逆兒であらねばならなかつたか。———こゝにいふ風に言つてきてはほんとに切がない。いゝ加減でよしてあゝは全く君の想像にまかせることにして私は言ふまい。——それは君には恐らく容易であらうと思ふ。三部にゐながらあの怪奇な「バルミストの夢」の物語を雜誌に書いた君、それによつて部はちがつてゐたが私とあれほど相親しみあつた君である以上———

（淺野謙吉の話を途中で邪魔することになるが——とA氏は言を改めて言ふ。）彼は、今までの話で太抵君には想像がついたであらうやうに、孤獨であつた。恐らく私以外に友らしい友はなかつたらう。友がない、孤獨であるといふ以上に、彼は、級友からは嫌はれた、寧ろ恐れられた、「彼奴は神經衰弱だ、嫌な奴だ」といつた風に話題にするのも避けられた。その彼と彼に似た性質の所有者であつた私とがどんなに親しい許しあつた友であつたか、彼と同じほどに私を知つてくれてゐる君には想像は容易だらう。

それから、彼が彼の言ふ通り如何に藝術に没頭したか、その藝術に對する態度がどんなにワイルドなどの所謂「藝術至上主義」に傾いてゐたか、などといふことは、あれ以上に私の贅言すべき範圍のことではない——全てを小説家の君に譲つて、私は淺野謙吉の話を續けよう。で、彼は言ふ。

「それも夢であつた。こゝういふ普通の言葉の用ゐ方ではあきたりない。寧ろ、それがほんとの私で、それから後の私——今の私が夢である、影であるとも言はふ。が、夢の中で夢を自覺することは出来るものでないと言ふなら、やはり前の私を夢にしておかふ。さつき私は、「悲しい氣がしないでもない」と言つた。これは私のほんとの言葉だ。あの當時の私は、ポオの物語の主人公に自分自身をあてはめて喜んでゐた私であつた。今はほんとにそれになりきつてゐる。それでも悲しい氣がするのだ。しかも時々は何もかも忘れて昔の時のやうにひたすら空想的な喜びに耽ることもある。こゝにも夢の私とほんとの私の争がある。どちらがほんとの私か、私にはわからないのだ。ところが此の頃は——殊に昨日からは——」

またいつのまにか不可解な奇妙なロジックを蕩々と吐き出した淺野謙吉は、突然、その譯のわからない雄辯の口を切つて、唐突に、

「お！」

と甲高に叫んで、腰を浮かして前方を凝視しながら、續けざまに何か狂的に甲走つた乾からびた聲をたてるのである。それが何如なる意味であつたか、その時私にはわからなかつた。私は、彼の突然の變化の不氣味さにそれほど驚いてもゐたし、又、夢中で口走りながら前へ駆け出しさうにする彼を後ろから抱きとめるためにそんな餘裕なんぞ許されなかつたのである。で、私が、も少しで山から落ちさうに

なつた彼を抱きとめてベンチにもごらした時、彼は、なほも暫くの間譯のわからぬことを呟いた後、やうやく口を切り出した。「A君。早く話をすまよう。もうぐづ／＼してはをれなくなつた。美しい暗闇の彼女があゝいふ顔をしだしては……。それでどこまで私は話したか忘れてしまつたが……。君との親しい交も、君にも度々聞かしたらう私の藝術的抱負も皆、夢であつたのだ。私の自負も沈思も身体も何もかもを滅茶苦茶にしてしまふやうなことが私の耳に入つたのだ。それは——それは、私の身體中を循環つてゐる血の中には狂人の血がまぢつて波うつてゐるといふのである。私はそれがある偶然の機會から人に聞いた。そして、それは、私の心からの否定にも拘らず、續々として證據を私の眼前につきつけた。といふのは、證據を眼前につきつけさすやうにしたのも、私の否定しようとした心のする皮肉な裏切であつたからである。私の父も、祖父も、曾祖父も……。私は死んだ父を呪つた、呪ひ抜いた——こんな月並な文句はぬきにしよう。呪つてみたつて、殊に君に向つて呪つてみたつて、無益なことなのだから。それに間もなくそんな心持はなくなつてしまつたのだから。といふのは、この憐な私を慰めるためか、夜が私に美しい暗闇を見せてくれたからである。美しい暗闇……。お！A君。あそこを見給へ！あそこを！」

淺野謙吉は震へながら右の腕をつき出して頻りに指さすのである、またさつきのやうな譯のわからぬ文句を口走りながら。その熱心さは私に丹念に二三度も彼の指さすところをたどらしめたけれども、勿論何も見えない。月もない眞暗闇である。彼が何もない暗闇を指さして「美しき暗闇」と叫んでゐるのだとわかつた時、私は何だか悲しい氣持に襲はれて、憐な友の姿を眺めながら黙つてゐた。彼は私のそのやうすに氣がついたのか、しを／＼と（何故か私にはさう思はれた）腕をおろして、靜かな調子にか

へつて言ふ。

「君にだけは見てもらへるだらうと思つたのも遂に無益であつた。どうしても私だけに許された恩惠であつたのだらう。そして今は私だけの受ける苦しみであるのだらう。その苦しみを君だけはこの憐な私とわかってくれるであらうといふ期待も破られてしまつた。残念だ。」が、こんなことはどうでもいい。こんなことで君を責めるのが話の目的ぢやないのだから。許してくれ。A君。……で、ちようど、その時分から——或はもつと以前からだつたかもしれないが——私には夜は美しき暗闇の宮殿であつたのである。夜になれば、暗闇がすべてをおしつゝみさへすれば、私はそこにいみじくも展開されるフェアリイ・ランドの王となる。それがどんなに美しい、官能的な美に満ちたものであつたか、どんなに荒唐な寧ろグロテスクなものであつたか、それがどんなに私を苦しめながら樂ませ、惱ましなう喜ばせたか、それ等の點に於てその美しい暗闇の場面がどんなに阿片の夢に——私はオピウム・イイターでは決してないが、私が昔耽讀したド・クイセイの「オピウム・イイター」を通してみた阿片の夢に——類似したところがあつたか、かういふことを私は詳しく話す暇が今はないやうだ。暇はあつても君には結局不可解であるにちがひないであらう。が、正直に言ふと、話したくても私は話せないのだ。といふのは、私自身がそれを殆ど全く忘れてしまつてゐるから。……でも、微かな記憶によつてそれらを傳へやうとするために、私は、君がアラビヤン・ナイトのすべての場面を眼前に書いてみて自分がそのそれぞれ的主人公になつてみることを、すゝめる。そして、それが君に出來たならば——主人公になりきつて、涙を流すところでは自分も泣き、喜ぶところでは笑ひ、官能的なところでは亢奮することが君に出來たならば、それは不充分ではあるが私のあの當時の美しい暗闇の一斑を知つてもらへたことになるであらう。

そして、それは、また、君に、私がその美しい暗闇に酔つて如何にその暗闇を消滅させる白晝の光といふものを嫌つたかといふことを、信せしめる助けとなるであらう。何故ならば、ひとつの例をとつて言ふが、私のその當時の一夜は、あのアラビヤン・ナイトの中でも殊に怪奇な運命の手に翻弄される三人目の托鉢僧の或時に似てゐたから。四十人の美姫に擁せられて歡樂の一年を費した後、與へられた百の鍵で毎日一つ一つの部屋をあけてその輝く逸美に酔つてゐた彼。清い水と美しい木と甘美な果樹の園に、薔薇や莖や水仙やヒヤシンスやアネモネやチュウリップやピンクや百合やライラックやの一時に咲き亂れた花園に心を奪はれ。きらめく碧玉と瑪瑙とで出來た槽に黄金の餌をついばんで紺青の空を仰いで妙なる音を心ゆくかぎりあげてゐる鶯や金翅雀や金絲雀や雲雀の歌に恍惚として耳を傾け。金剛石や紅玉やルビーや眞珠や綠柱石や黄金の塊銀の山や紫水晶や水晶や黄玉や蛋白石や土耳其玉や瑪瑙や碧玉や肉紅玉髓や珊瑚やの綾なす閃めきに眼を見張り。かうして九十九日の間毎日々々唯官能の快樂にばかり浸つて暮してゐた彼。その彼が禁斷の鍵で禁斷の百番目の扉をあけて、今までの歡樂の天國から一舉に禍の地獄に墜落せねばならない自分自身をそこに見いだした時。その時の彼の心中は、美しき暗闇に酔つてゐる最中に、白日の光のために突然に醜惡な現の世界の眞只中に放り出された時の私の悲しみと、どんなにか似てゐることであらう。私が光を見て嘆き怒つた時、私の流す涙の中にはあの憐な托鉢僧を思ふ涙のあつたことを、誰が知らう。……それにしても、この世界は何といふ醜さであらう、何といふ平凡さだらう、何といふ暗さだらう、その平凡な暗い醜い世界を、私から美しい暗闇を奪つてまで、つきつけずにはおらない白晝の光が私は厭はしくなつた、憎くなつた、恐ろしくなつた。その白晝に對する叛逆、憎惡は私を私のいつも夜である私の部屋にどちこもらした。——A君。さうして私は君を見

なくなつた……

「で、私はさつき私を慰めてくれた美しいフェアリー・ランドの場面を忘れたと言つたと思ふ——そんなことはなかつたか知らず——それはそうとして、私はそのアラビアン・ナイトに似たところのある場面はすべてどんなのがあつたか忘れてしまつたのである。それはこの頃はちつとも私には見えなくなつてしまつたから。では、今見るものは——今見るものは——それは——お！あれだ！A君！あれだ！……」

浅野謙吉にはまたさつきと同じ発作が起つたらしい。厄介にもまた私は彼を抱きすくめてベンチへもどらせねばならなかつた。今度の発作は前のよりもひどいらしい。何故なら、彼はベンチへもどつて再び口を切り出しても、発作の時の亢奮が鎮らぬらしく、聲をばづませてゐたから。そして言ふことも急にしどろになつてきたから。

「あれだよ！A君！あの女の顔なのだ！——お！女の顔と言つてしまつたことを彼女にあやまらねばならない。A君！女の顔、只の女の顔ぢやないよ。君にはわかつてもらへるだらう。彼女の顔を只の女の顔といふ奴は呪はれてあれ。A君！今見たとほりのもののなのだ。女の顔ぢやない。わかつたらう？A君！——彼女がこの頃の私の美しき暗闇のすべてなのだ。彼女が私を慰めてもくれ、苦しめもし、樂しませ、泣かせる唯一の美しきファンタズムなのだ。空中に住むといはれる氣仙シルフのやうに美しい彼女は私の美しき暗闇の中に現はれる。そして彼女の顔に一抹の愁の雲でもかゝつてゐる時に、お！私はそんなに泣いたらう、悲しんだらう！時として彼女の顔に氣難しさの線が歪んでみえる時、お！私はそんなに狂妄な怒りに胸をかきむしられて我鳴りたてあばれまわつたことだらう。しかも、A君！幸なことには、

彼女は、この稀な場合をのぞいては何時も、永遠の美と無限の喜びに溢れてゐるのだ。彼女は私の魂、私のサイキーだ。彼女は私に生命を與へ私を樂ませ微笑ませ笑はせる。サイレンのやうにその何物よりも美しい聲で私を酔はせる。その時の私の精神の恍惚、それがサイレンの與へる死といふものであるなら、私はどんなに彼女のまえで死ぬことを喜ぶだらう！彼女は私のフリーだ、永遠の美と生命をもつ美しい美しい極樂のフリーだ。蜜蜂の身體のやうに光る髪、馴鹿のやうな愛らしき眼、秋の月のやうに冴えた顔、胡麻の花のやうな柔和な鼻、ピカ鶯のやうな神祕な音聲をもつたといはれるあのシタだ——

彼の言葉は、このあたりから、どう／＼狂的な囁言のやうなものになつてしまふ。私のことなど忘れてしまつて、狂的な乾からびた叫び聲をむやみにあげる。身體を上下にゆり動かす。腕をふる。幻想の女に戀してゐるらしい友のこの憐な様子を見て私は思はず涙ぐんだ。ところが、不思議にも、みる／＼中に友の様子は段々と鎮つて來るのである。とめやうにもとめられない亢奮が、とめやうともしないらしいのに自然と鎮つてくるのであるらしい。そして、間もなく、唐突に

「A君。ところが——」

と私を呼びかける。その彼が私には愈々不氣味なものに思はれてきた。が彼の言葉は容赦なく續く。今までの甲走つた叫とはうつつてかはつて極端に沈んだ彼の聲は、私に新しい涙をうながしながら、益々不思議な意味を展開する。

「……ところが、さつき言つた通りに（「さつき言つた通りに」）と彼は言ふのである。）彼女は近頃になつて私を白晝の光の中へ招き出すやうになつたのだ。彼女が招く。追つて行く。すると私は白晝の光の中に

おいてきばりにされてゐる私自身を見出すのだ。その時は彼女はもう氣仙ケルンのやうに空中に消え去つてしまつてゐる。そうして、私が彼女のかばりに見せつけられるものは、醜い平凡な暗い白晝の世界である。私は狂氣のやうに走り歸る。かうした日が二三日も續くと、私は、白晝の光の中に自分一人を見出した時の恐ろしさに、たへきれなくなつた。そこで私は夜の中にマントを着ておくことにした。これで幾分か私の恐怖はうすらぐのである。」

こゝまで言つてくると、彼の唾をぐくりと飲みこむ音が大きく聞える。私も思はず唾をのみこんだ。「マントのことなんぞどうでもいい。なるだけ君の不可解を解かうとして言つたまでだ。——が、私の美しき暗闇の彼女が私を招いてどこかへ連れてゆかふとしたことは、忘れないやうにしてもらはねばならない。そして一番大切なことは、かうして私を連れ出しておきながら、彼女は私を、あれほど私の恐ろしい白晝の醜い世界の中に、おきざりにしてしまふことである。これから私は君に聞いてもらひたいのだ。早く話をすましてしまふために、彼女が私を招くのは私を白晝のない常住の暗闇の世界へ私を連れてゆかんがためであるか、或は、彼女が私を見棄て、私から逃げ出さうとするのであるか、この二つの相いいない問題にぶつかつて如何に私が考に沈み悶え、或時は歡びのあまり歡聲をあげたり、或時は悲みのあまり男泣きに泣き叫んだか、そして、しまひには自己悲觀に陥りやすくなつた私の心が後者を肯定したので、如何に私が毎日日々泣きつづけたか、身を悶えたか、それがためか、如何に美しき暗闇に現はれる場面までが恐ろしいもの、やうに感ぜられ始めて私の弱い心が脅かされたか、なぞといふことなどはとばしてしまつて、すぐに、あの日——君に電車の中で會つた日の前の日のことにうつらう。『電車の中』で思ひ出されたが、恐らく別人のやうに變りはて、しまつてゐたであらう私を忘れな

いで聲をかけてくれた君を見て、こんなに私が喜んだか、その喜びのあまりの亢奮がこんなに君を不氣味にしたか、なぞといろ／＼なことが頭に浮んでくるが、これも今言ふかぎりでない。あの日のことを話せば自然にわかることであるのだから。

「あの日、私は何時もの通りマントで身を包んでばんやりつゝ立つてゐる私自身に氣がついた。言はなくてもわかるだらうが、その時はもう彼女はゐない。だん／＼と暗い醜い世界が見えてくる。いつもきまりきつてゐるのだが、彼女のゐたあたりには、眞黒な何かの塊がぼかりと浮いて見えてくる。その中それが森であることがわかる。するとその間に家が見える。村だとかわかる。私はその村へ行く道に立つてゐる。その村が何村だかは知らないが、まはれ右をしてゆけばいつか私の部屋へ歸れることはわかつてゐる。何時もならば、これだけで私は走り歸るのだ、恐ろしさに震へながら。ところが、今日は——あの日、いや、あの二三日前からだつたかもしれないが——今日は、私は逃げ出さない、恐ろしさに震へながらも逃げ出さない。そして反抗的にあたりの醜さを眺めてゐる中に、不思議にも、恐ろしさが消えて、そのかはりに、烈しい憎みが怒りが——いつもは部屋へ歸つてから起つて私に部屋中をころげまはらせ、號泣させ、あたりのものを手當り次第投げつけさゝすにはおらない、その烈しい憎みが怒りが——前よりも一層はげしく私の身體を震はせながら、醜い世界を焼きつくすやうな勢で、起つてきた。

「ところが——お！あの日は何といふ奇妙なそして呪はれた日であつたのだらう！——ところが、私がそうして呆然として立つてゐた時に、私の前に彼女が現れてきた、再び現れてきたのだ、白晝の醜い暗い中へ！それを見た時の私の驚きは察してくれ給へ。がその驚きは一瞬にして喜びにかはつた。どんなに私は喜んだらう！A君！察してくれ。私は夢中で彼女を追つた。不思議はまだある。私があの日彼女

女に追いつけたのだ、いつもは煙のやうに空中に消え去る彼女に私が追いつけたのだ！私の目の前に彼女はちつと私を凝視して立つてゐるのだ。それを見た時の私の驚喜！——それは私を夢中にした。喜びに身を震はして私は、しなやかな彼女の身體が折れてしまふほど、そして、彼女の身體が私のそれと一緒にになるのではないかと思はれたほど、力一杯、彼女を抱きしめた。それから驚喜が私の全身をへくりかへらせた、血もわいたらう、血管も破れたのだらう、そして頭も滅茶苦茶になつてしまつたのだらう、今私の記憶には何も残つてはゐない、何も知らない……。

「それから、私が私自身に氣がついた時には、私はそこにぼんやりと立つてゐる私自身を見るのみで、私の前にゐるはずの彼女は見えなかつた。黒い森がある。私は道に立つてゐる。私は初めから少しも動かなかつたらしい。彼女はごうしたのだらう、確かにつかまへたと思つた彼女は？と思ひながら、ゆくりなくも地面におとした視線に入つたものは——お！A君！——」

かう私の名をよんだだけで、彼は兩手を顔にあて、泣きだしたのである。私は慄然とした。暫くして泣きやんだ彼は言ふ。

「A君！もう何と言ふ必要はあるまい。わかつたらうと思ふから。——A君。私は人を殺したのだ……」  
 新たな戦慄が私の身体を走る。彼の言葉は續く。

「A君！私はあゝして人を殺した、人殺しをやつた……—こゝういふ事實の前には、その私の殺した女が果して彼女であつたか、或は、彼女とみたのは私の視誤りでそれは知らない女であつたか、といふことは問題ではない。——が、私は次のひとことを言つておかう。それは、その翌日も彼女が私の美しい暗闇に現はれてそして私はまたいつものやうに白晝の中に招き出されたといふことである。これは、

前者を否定することになるのだから。(淺野謙吉には、こんな誤つたロジックを吐くほど、現實の女と幻の女とが混亂してゐるらしい。といつて、淺野ばかりを責められた柄でもない。私自身さへもが、その時はこれに氣がつかずに黙つて彼の言ふことを聞いてゐたのだから。)——又、死んで足元に仆れてゐる彼女を見て、私がどんなに恐ろしさのあまり夢中で走り歸つたか、それから、どんなに泣き悶えたか、どんなに絶望のあまりあばれて家人をてこすとしたか、なぞといふことは君の察しにまかせる。——實をいへば私自身そんなであつたかは覺えてゐないのだが。——今から何をくづ／＼言つたところで、私が人殺しをやつたといふ事實には變りがない。——A君！多分君も氣がついて不思議に思つてゐるであらうが、私は今かなり落着いてゐるのだ。諦めたといふよりも、大嵐の後の平靜の中にあるといつた方が適當だらう。大嵐が何故靜まつたか。A君！もう氣がついたらう。大嵐は私が監獄のことを思つたとき、平靜になつてしまつたのだ。私は今寧ろ嬉しい氣になつてゐる、監獄の中にあるであらう獄房に入つてゐる私自身を想像の中に描いてみて。あの高い高い煉瓦塀でとりかこまれた中の、厚い厚い壁で四方をとりかこまれ、光の入る唯一の穴である窓にまで太い太い鐵の格子を入れて光をさへぎつたあの監獄の部屋、それは常住の暗闇——美しき暗闇でなくてはならぬ。A君！美しい暗闇がこゝうして私を待つてゐることを思つた時、私は喜びに震へたのだ。その喜びの中に、私は初めて、オビラム・イイターが物凄く暗い地下室の阿片窟へきびしい人眼を忍んで行く、その氣持がわかつたやうな氣がしたのだ。

「ぢやA君。これだけ言へば私の心は晴れた。私は、私が永久に美しき暗闇の中へ身を没してしまふ前に、誰かにこれだけのことを話しておきたかつたのだ。ぢやA君。私は、祕密の快樂を貪らんがために

阿片窟へ忍ぶオピウム・イイタアのやうに、喜んで監獄へ行かう。美しき暗闇に酔はんがために。ぢやA君！——お！彼女が呼んでゐる！彼女が！——」

かうして、何物かに抱きつくやうな恰好で常に何かを口走りながらよめき歩いて行く、彼自身の心持からいへば、それは春の百花咲き亂れた野邊に蝶をおふ小兒の心のやうに長閑な楽しい心で歩いてゐるのであらう、友の後姿を眺めて、私は一人涙にくれた……（こゝまで話してきたA氏は、この時、その當時のことを思ひ浮べたのであらう、暗然どうなだれてしまつた。が、そこで同じく暗然どうなだれてしまふには、餘りに好奇心が高まりすぎてゐた私のうながしを受けて、涙に光つた眼をあげてA氏は話す。）

これまで話したら、もう何も言ふ必要はあるまい。君も知つてゐるだらう通り、あの年の中に金澤の郊外に人殺しなんぞなかつたのだから。

其他の疑問——たとへば、人殺しをしなかつたのであるとすれば、彼が女の首に手をかけそして足元に仆れた女を見たと言つたのは、すべて彼の憐むべき幻視であつたか、或は、事實ある女を彼が幻の女と見ちがへて近づいたのその女が驚きのあまり氣を失つて彼の足元に仆れ彼の去つたのちに正氣にかへつたのであるか——といふことなどは、君の想像にまかせることにしよう。それから、科學者として——醫者として、君に話すことは私には出来ない。憐な友に對する私の愛を思つてくれ、ば、君も許せるであらう。が、彼女に毎日招き出されたと言つたのは、狂者に特有なソムナムビユリズムの現象ではないか、この世界を暗い醜いと言つた彼の言は、「或る種の發狂の初期の階段に於ては或る程度の色盲存す」といふストツダートの言に證明を與へるものではないか、いかに隨所に<sup>ニツクエクスサイトメント</sup>狂的亢奮が現れて

あるか、なぞは私から言ふまでもないことであらう。それ以上の細い點にわたつて穿鑿することは、私には堪えられない。第一、今になつてそんなことをする必要もないであらう。淺野謙吉は、もう今から一年前即ちあれから二年の後に、癲狂院で死んでしまつてゐるのだから。

A氏の話はこれで終る。

私は今單にA氏の話の記録者でありたい。だから私としてはA氏の話についてこれ以上何も言はないでおかう。既に、以上のA氏の話の記録にも私の想像や訂正を少しも加へなかつたことを、私はこゝに言明し得ると思ふ。私がA氏の話の單なる記録者である以上、そのA氏の話に果してA氏の想像が入つてゐるはしないか、淺野謙吉君の言をA氏が忘れたのでA氏がそこをうまく彌縫したやうなことが果してないか、なぞといふことは、なければ勿論、若しそれがあるとしても、私にとつては許さるべきことであらう。

が、最後に、A氏の「この話はボオが好きだと言ふ小説家の君に何かのたしになるかも知れない。若し君がこれを書いて世間に發表してくれた時、淺野は地下で喜んでゐるであらう。」といふ言葉に對して、私は、いろんな點で自信がない。これが發表されて僅かであつても誰かが讀んでくれるのを待つまでもなく、今こゝで、私から、この拙き記録を書いたことを、A氏並びにその友淺野謙吉君に謝しておいても大して輕卒ではないであらうと思ふ。



# 施療室を周つて

三 木 佑 彦

この男は何んでも紙切れに書きたがる、書かれた紙は大事に机の引出の中に投込まれる、それでいつもこの男の机の中は雑然たる紙切れの堆積だ。その紙切れの一つ一つにはこの男が時々思ひついて書いた文句が書かれてある、恐しく氣取つたものだ、それが如何にも大家の警句ででもあるかのやうに崇敬を以つて取扱はれて居る、その實諸君が小説の一冊もお讀みになれば——それも大したものではない、のだから——ザラに出て來さうな文句である。

従つて又、この男が何か用事があつて引出の中を捜さうものならそれこそ上から下まで二三遍もませこせにして見なければ決して目的物は見付からない、しかもそれをこの男は苦にしない、反つて悦んで居る位だ。この男は物を捜すにも決して一心に捜しはせぬ、見なくてもいい、紙に一つ／＼道草を喰つて行く、そこには例の時に感じて書かれた文句が書いてあるのだ、それを一つ／＼拾ひ讀みして行く、而して俺でもこんな事を考へた事があるのかなあと感心して讀む——これだからやつぱり一寸考へついた事でもちやんと一つ／＼書きとめて置くもんだ、それがどんなになつかしさを以つて昔を思ひ出させる事だらうと又感嘆をこめて考へる。

そんな紙の一つにこの男は書き記して居る、

「俺は時々昔書いた紙片れの中に彷徨する、そこには思ひもよらなかつた昔の俺の思想が棄てられた戀人のやうに俺を待つて居て呉れる」と。

この實この男は戀人なんか持つた事はない、だから棄てられた戀人なんかは勿論持つて居ない、しかし、棄てられた戀人はいつまでも自分を待つて居て呉れるもんだといふ至極お目出度い考へだけをしっかりと持つて居る。

この様にして引出の中に戀人を捜し廻つた或日の事だ、この男は圖書館の特別閱覽室の回数券を見付けた、回数券は學校の試験になつてあはて、公園に馳け付ける時の外は滅多に引出される憂のない代物だ、その回数券の裏には千九百××年三月十七日と日付が書いてあつた。

それはこの男が何かの覺えに書きとめておいた日付である、だからその日はこの男にとつて何かの日でなくてはならぬ。そこであれやこれやと考へた末、とう／＼分かつたものと見えて一寸なつかしさうな顔をしてニヤリと笑つた。この男はなつかしい時にさへニヤリと笑ふ程の男である。

三月は中學校の卒業試験のある月である。十七日はそのすんだ時分である、千九百××年はこの男の中學を出た翌年である、そこで、この男は一かどの探偵にでもなつたかの如く自分の推理の巧妙さを自讃しながら、それはこの男よりも一年遅く中學を出た石原を初めて訪問した日でなくてはならぬといふ結論を得た。

それは北國のまだ膝寒い三月の或晩であつた——この男はツルゲネーフ張りに頭の中で考へる——私は初めて石原を訪問した、と。——私が施療室の話を聞いたのはその時であつた、と。



その頃この男達の一團が小さな廻覧雑誌を出して居た、石原もその同人の一人であつた、その石原をこの男が千九百××年の三月十七日の晩に訪問したといふのだ。そうして世の多くの廻覧雑誌の同人のあるやうにその晩もこの男達は月々の雑誌で一寸評判をとつた作だとか、雑誌の六號雑誌で覚えて來たその作家の悪口だとか、一寸話頭に上すに都合のいゝやうなロシア物の短篇だとかの話をした擧句に、さて自分達の出す廻覧雑誌について話をするのだ——實を云へばその反對なのである、自分達の雑誌の話を先づ初めるのだがそれが思ふやうにまごまごぬので、いつのまにかづる／＼と話が自分達よりも、もつと偉い人々の方へすべつて行つて、終ひに又元の自分達の見影もない哀れな姿の上に還るのだ。雑誌はいつも非常な「生みの悩み」を以つて出される。皆んなが何か書きたがつて居る、しかし誰れも書くべき何物も持つて居ない、しかし書かなければならないといふのだ。

「弱つたなあ、一つ書かんならん」

と一人が嘆聲を漏らす、すると「ウーン」と一人が懷手をして胸から手を出して顎をつまみながら應ずるのだ——「書かんならん」

皆だまつて火鉢にのつて居るコーヒー沸しを眺める、あれやこれやと頭の中で何かいゝ種はないかと捜しまはりながら、

「何んか無いかい」と一人が問ひ出す

「弱つたあ」と又他の一人が如何にも大事業でも委ねられた人間のやうに弱る。

と、また皆んなが黙つてコーヒー沸しを眺める、それはフツ／＼とたぎつて居る、が誰れも手を出さない——今吾々は弱つて居らねばならない、一心に考へねばならない——コーヒー沸しがブツ／＼と噴

き出す——飲んぢあならない。

「あのうな」と到頭石原が云ひ出した。

それは或る大學病院の附屬病院の話であつた、附屬病院には施療病室がある、その施療病室の話だ。施療病室には施療患者が居る、患者は貧乏人だ、だから藥が只でもらへる、その代り大學の學生が稽古臺にして診察の練習をする。

コツ／＼と胸をたたく、舌を出させる、脈をとる、聴診器を當てる——氣取つてポケットから金時計をチャラリと出す稽古も内證でこゝでやる——腹の悪いものには重曹に苦味丁幾を混せて與へる、風邪や咳には杏仁水に何んとかを混せて單舎を加へて甘くする——がそんな患者は施療病室には居ない、貧乏人に下痢や風邪は病氣ではない、病氣とは働けなくなつて喰へなくなつての上の事だ、それまでには仲々の年月と重態とが要する、それからやつとお役人様にお願ひして貧乏人であるといふ難有い證明書を戴いてそうしてこの施療室に轉げ込む、だから施療室には死人が多い。

「それでなあ」と石原が云つた

「その施療室の這入り戸口から五六間廊下があつて、その眞ア向うになあ、屍体の解剖室があるがやといや」

「解剖室?——サア何んぢやい」と皆んなが云ひ出した

「それがなあ、五六間程おいて眞ア向うやといや——それで、生徒が一生懸命にこれあ腹膜ぢやたら、結核ぢやたらいふて藥を盛るやろ、その擧句に死んがてもんぢや——すると、ガラ／＼と車に載せて行つて此度は解剖して見て自分の診察が合うとつたかどうか見るがてもんぢや」

「まあ、有島さんの「實驗室」見たいなもんやなあ——あんな事が本當にあるがやなあ」と初めて「實驗室」の難有さが分つたかのやうに皆んなが云ひ出した。

「それが眞ア向ひてもんぢや」と石原が同んなじ事を繰返へして云つた。

「ひどいもんぢやなあ、まるで患者に今にお前が死んだらあすこへ往くて事を見せつけとるやうなもんやなあ」と一かどの人道主義者らしく憤慨して云つた、その癖

「一体そこに居る患者はどんな氣持で居るもんぢやとなあ、今に自分が死んだらあすこへ行つて解剖されるて事を皆知つとるがてもんぢや」

「そやなあ」と皆んなは施療患者になつたらどんな氣持ちなもんかといふ事を思ひ浮べやうとして——この男達が使ふ言葉で云へば氣分を味はうとして、頭をかしげて障子の棧の上の方を見ながら一生懸命にあれやこれやとその時の氣分を思ひ浮べやうとしてあせり出した。が、只何時か何處かで見た寢臺の澤山並んだ三等病室の汚い有様がチラ／＼と頭の端をかすめるばかりで、疲れ果て、施療室へ轉げ込んで屍体解剖室を見せつけられて居る人々のつきつめた心持なんか單なる頭の中の遊戲で分かつて苦もなかつた——どう／＼それで頭の中の彷徨はやめたが未だあきらめられないらしく「皆んな知つてゐるがてもんぢや」と——と前の語を未練らしくつぶやいて又考へ込んだが、やがて深い息をついて溜息をもらした——

「あゝ何んか一つ書かんならん」

毎日々々の退屈な日がつづいた、この男は毎日同じやうに學校へ行くだけだし——この男は融通の利けない男であつたから多くの秀才のするやうに、一寸一時間休んでみたり三時間目頃から出て來たり晝からサボツたりするやうな藝當は出來なかつた。

石原は中學時代から肺炎を煩らつて居たが中學を出るなり醫者を變へて注射をうけるやうになり今度の醫者の命令で兎に角寐たり起きたりしながらも毎日を床の上で暮すやうになつたから尙更退屈であつた。

退屈しきつた人間には自分の意見といふものがない——考へるといふ事がなくなるからだ——暇な時にどうして働けるもんかい、——こんな人間には他人の云ふ事が皆本當になつて聞える、その癖自分の方からもそれは正しいと積極的には認してやる程の勇氣もない——「そやなあ」と感心する、が次ぎの言葉を出す時にはもう忘れてしまつて居る。

こんなにして退屈しきつた二人が逢ふと——即ちこの男が石原を訪問すると、お互に「そやなあ」を云ひ合ひながらノラリクラリと話をする、たまさか一寸した出來事でもあるときなり元氣づいて大きな聲で話す——相手が靜安を要する病人だらうとそんな事には頓着なく獨りで嬉しがつて大聲で話をする——その癖次ぎに出掛ける日までにはちやんと忘れてしまつて居る、そして又「そやなあ」の會話をする。

それでも時々何か身にせきたてられてどうかしなくつちあならぬと感ずる、しかし一瞬後には忘れられてしまつて後には無氣力な嘆聲だけが残る——

「あゝ何んか書かんならなあ」

月末になると雑誌の原稿を何か書かなければならなかった、が誰れも彼れも書けさうには見えなかつた

「おい、あれを書け」

「何を」

「あれをヨ、治療室の事をヨ」

「ウーン、あいつを一つ書かんならなあ、あいつぞ」

「書け々々、書かにやワシに譲れ、ワシが書いてやる」

「そやなあ」

と、二人は又黙り込んでお互に頭の中で治療室の事を考へる——病室がある、五六間廊下の先きに屍体解剖室がある——そうして治療患者が居る——死にかゝつて居る死んだら向うの部屋を身軀を解剖される事を知つて居るんだ——知つて居るんだ、知つて居るんだ………

が、それから先へは一步も這入る事が出来ない、それから先へは、——毎日々々焦らされて到頭死んで行く治療患者の心の中には一步も這入つて行く事が出来ない。何か思ひ切つてひどい場面を考へやうとした、この男は昔ひどい蓄膿性で鼻を手術した時の事を思ひ浮べて見た——しかしそんな事は到底この患者の心には比べものにならなかつた——書けない、書けない、——病室がある、五六間廊下があつてその突當りに屍体解剖室がある、治療患者が死にかゝつて居る——そこから先きだ、もう一つ先きだ——が、駄目だ——病室がある、——と、もう一度繰返へす、が、何度やつても同じ事だ、結局治療

室の周りをぐるりと廻つて歩くにすぎない、その中へは一步も這入れない、中は實生活のどん底から轉げ込んで來た人達の世界だ——そうして俺達は今迄に何んにもして來た事もなく、今も何んにもしないで退屈しきつて居る人間だ、俺達には實行がない、しなければならぬ事があつた所で懷手をしてポシヤリ見て居て、頭の中で苦しんだ人々の生活を空想してそれに對する同情心を製造して楽しんで居る人間だ、俺達は一体何んだ、俺達は………病室がある——五六間先きに………駄目だ、駄目だ、俺に書けない、書けない………

「おい、——書けよ、きつと書けよ」

雑誌が出來上ると、それでも何んかかんか皆が書いて居た、石原は「芹」を書いた、それは今迄の中で誰れのよりも一番長いものであつた、そうして誰れのよりも一番いいものゝやうに思はれた、——この男も何か書いた、後と先との話が丁度反對になるやうなものを書いた。

次ぎの月末の來るまで又執念深くもこの男達は治療室の周りを廻り初めるのだ、が、いつもつまるところは同じなのである、それなのにどうしてもそれを書かなくちあならないやうに、何かに責められてるかのやうに治療室から離れる事が出來なかつた。

そんな氣分を尙更峻つたのがチエホフの「六號室」であつた。この男達はよくチエホフの話をした、チエホフは退屈しきつた人間を描いた、この男達も毎日々々同じやうな日が來て過ぎて行く中に暮して居た、何もする事がなかつた、素晴らしい事がないのだ、何をしてもしないのと同じだつた、結局他人

の書いた小説を讀んでその氣分にひたる外はなかつた、それで居て何か書きたいのだ、書かなくちあならないやうな氣がするのだ、頭の隅の方に何か書けるものがあるやうな氣さへするのだ。一つの作を讀む毎に、讀んで感銘させられる毎に、そんなものが書きたいのだ——だが、いつでも、そんなものが書きたいのだ、そうして自分自身から書ける何物もないのだ、何故だらう、何故だらう、——と、この男は考へる。

ブランドを讀めばブランドと一緒に叫びたくなるのだ、「罪と罰」をよめばあの抑へ難い正義感を胸に責め立てられて、ラスコーリニコフと共に憤慨したり、憂鬱になつたり、怒りつばくなつたりするのだ、チエホフを讀めばびつたりとチエホフの氣分に浸り得るのだ、それで居てどうして俺達は自らブランドになり得ないのだ、ランコーリニコフになり得ないのだ、何故だ——俺達は嘗て何物かを作り得た事があるのか。

と、この男は昔何かで讀んだ事を思ひ出す、それはこの國の有名な神道學者に對する非難である、その博士はタゴールが盛んに稱へられるとタゴールの思想はチャンと日本神道の中にある、と云ふのだ、ベルグソンが流行するとベルグソンの思想はどうの昔に神道の中に含まれて居るといふのだ——それでは、と、その論者が云ふ——その碩學の博士は何故にタゴールの以前にベルグソンよりも前に其等の人の云つたであらう所の説を日本神道として稱へないのだ、と——それが吾々の民族病ぢあないのか、他民族の新しい思想もこの民族にはチャンと昔からあるのだ、少くともそう云ふのだ、それなのに自分からは何一つ云ひ出さない——さうだ民族病だ、そうして俺は、この俺はブランドにもなり得る、ラスコーリニコフにもなり得る——だけれども自らは何物でもない。俺はこの國に生れ、この國に育つた、

そうして俺は民族病者だ、代表的の民族病者だ——と、この男は安つばいセンチメンタリズムに耽るのだ、自分がこの民族の殉教者で、もあるかのやうに考へ込んで、とても悲哀の感を味はつて、いゝ氣持になつて居るんだ、この男は安つばいセンチメンタリストだ、センチメンタリストは自ら何物をも持つて居ない、日々の外界に影響されて生きて行く、そうして何んでも感動したがつて居る、その癖何物もこの種類の人間には深い印象を與へる事は出来ない、すると云ふ事としないと云ふ事とは同じ事だといふ考へがしつかりと頭へこびりついて居る、そうして本人は恐しく退屈して居る——それでこの男はチエホフを讀む。

「六號室」は随分この男達を動かした、この男達はドクトルと一緒に勤勉に働いた——が何もかも一切良くはならない、小さな町の死亡率は減りもしないし、働けば働く程患者は増して來るのだ、毎日々々同じ事が繰返へされる——どう——醫學の何んたるか？分らなくなる、藥を盛つて人間の生命を五年程延してやる、あるかないかの小つばけな官吏や小商人の、がそれが何んだ、と。藥で以つて人間の一切の苦しみがなくなるもんなら昔から多くの人の由つて慰安を求めた宗教や哲學はどうなるんだ、と。彼は働かなくなる、後には空な醫者といふ人間の機械が運轉して居る、それが何十年とつづく、そうしてその間、たつた一人の話相手と智識階級の教養ある會話を交はすのだ、落著いた調子で、凡てを了解しそれに對して批評を加へ得るんだと云つた様子で、

「何んですなあ、吾々は……」と

そこには限らない空虚な響があるばかりだ、智識階級、教養ある會話、何んと云ふ空虚な響だ、一人

が語り、一人が紳士の禮讓を以つて應ずるばかりだ、そこには何物もない、何んの活動もない、目的ある活動がない——何か活動がなくちあならぬ、毎日のプログラムの繰返しの外何物かなくちあならぬ——どうくこの男達はドクトルと一緒に六號室に入るのだ。

六號室には癲癩病者が居る、何年でも死ぬ迄入つて居る、恐しく汚い部屋だ、恐しい番人が居る、ニキタだ、ドクトルは——それが何時の間にか何かの寫真で見たチエホフに變つて居る——六號室を覗き込んだ——この男達は親愛なる施療室を眺める——ドクトルは六號室から種々な素晴らしいものを見付け出して來た、怒りや狼狽や恐怖や、眞理の時代の先驅者や、彼の長つたらしい哲學や——この男達は一生懸命に施療室を捜し廻はる、がそこからは何物も發見されない、この男達は一寸チエホフの眞似をして物悲しさうな顔付をする、が、顔からは何も出て來はしない——病室がある、五六間先きに解剖室がある、そうして——皆んな知つてゐるんだ、皆んな知つてゐるんだ……

段々暑くなつて來た、がこの男達はやつぱり施療室を離れない、時々子供等が菓子を見較べるやうにソツと六號室を覗き込む、一寸チエホフ式な陰鬱な顔付をする、が書けない、書けない——だが一体何を書かうといふのだ、何が書けやうといふのだ、お前は苦しんだ事があるのか、眞面目に人生を見た事があるのか——この男は考へて見た、後を振返つて見た、そこには何物もなかつた、只殘骸の外は——考へられなかつた思想、實行されなかつた考へ、疑惑にはぐまれた實行、そうして恐しく粗雑な空想、その上にこの男の生活が立てられて居る所の空想、そうして何が書けやうと云ふのだ。

八月が來た、皆は又休暇の中に何か書いて厚いものを出さうと云ひ出した、すると又この男達は懲り

もせず施療室を廻り初めた、が又誰れも書けさうになかつた、其上雜誌さへも出來さうになかつた、倦怠が根強くその力をはびこらした、誰れもが退屈して二の足をふみ初めた、編輯をあつちこつちと譲り合つて遂にこの男の手に落ちた、原稿は三十枚にも足らぬものであつた、この男は恐しい顔をした自畫像を一枚出したきりであつた、石原は小さい詩を出した、そうしてそのまゝ九月になつて又退屈な學校が初まつた、

九月になると皆が散らばつてしまつた、原稿はこの男の手に落ちたまゝ何時迄も綴ぢられなかつた、誰れもせき立てもしなかつた、皆んなが何の期待も持たぬ程あき果てゝ居た、そうして誰れも彼れも何をしたつて同じな生活をして居た。その中で石原ばかりは九月に入ると急にひどくなり出した、そうしてもう會つて話をする事も出來なくなつてしまつた——或る十一月の朝、鉛色の彼の顔を見るまでは。八月に書いた小さな詩は恐らく彼の最期のものであつたらう、それは小さな草の芽と、彼の小さな妹との詩であつた。

集められた原稿はいつまでもこの男の手にあつた、施療室はいつまでもこの男の頭の中にあつた、——何時迄も綴ぢられずに、いつ迄も書かれずに——

# 壽樂座の話

佐々木直次郎

私が今からお話することを、或は、あなたはほんとうになさらないかも知れません。多分、ほんとうにはなさりますまい。いや、ほんとうになさらない方が、ほんとうなのでせう。と云ふのは、普通の常識を持つたお方なら、今の廣坂通が晝なほ暗い鬱蒼とした森林の中の小徑で、夜々天狗があらはれて人をさらつて行つた時代ならいざ知らず、その廣坂通に煉瓦造りの建物<sup>こみち</sup>が空にそびえ立つて、電車が轟々としてつきりなしに走つてゐるこの大正の昭代に、いかに因襲と神祕との幕の中に閉されてゐる芝居小舎の中だとは云へ、今からお話するやうな奇怪なことなんか、どうしても、あり得ようとは思はれないからです。

——と云つて來ますと、今から私がお話ししようといふその話といふのが、昔の怪談か何かにありさうな、恐しく奇怪なものであつて、ほんとうであつてもなくても、そんなことはごつちでもいゝから、せひ聞きたいものだ、とお思ひになるかも知れませんが、さう思つてゐらつしやる、みんなお話ししたあとで、何だ、そんなことか、と云はなくてはならなくなるでせうから、豫め斷つておきますが、奇怪と云つても、今から二月はご前、現にこの話手の私自身が、いや、時によると私自身だけが、夢でもなく幻でもなく實際に、この眼で見、この耳で聞いたことだ、と申せば、大体その奇怪の底も知れると云ふものでせう。

しかし、私がこのやうに底の知れた奇怪と云ひましても、その底の知れた奇怪でさへ、あなたは多分ほんとうにはなさりますまい。いゝえ、何と仰しやつても、ほんとうになさらないことは、まだ話をし始めない今のうちから、私には、よつくわかつてゐます。ですから、ほんとうになさらないかも知、私はちつともかまひません。あなたと私とが、音や色や匂ひやその他すべてのものについて、全然同じい感覺を持つといふことは、とても出来ない相談ですから——。

たゞひとつ、豫め申し上げておきたいことは、この世界は、決して私達の眼で見えるそのまゝのものではありません、言葉を換へて申せば、私達には、この世界のほんとうの相<sup>すがた</sup>といふものがわからないのです、そして、私達人間の眼では到底見られない何か大きなものが、この世界のあらゆるものゝ、深い底を貫いて流れてゐる、といふことなんです、——と、まあ、かう云つた方がいゝでせう。

私のお話すること、それは心の迷ひだ、と仰しやるかも知れませんが、それはさうかも知れませんが、それなら、そこにあなたが煙草の灰皿があると、思つてゐらつしやるのも、心の迷ひでないでござうして云ひ切れませう、今あなたが口からお吐きになつた葉卷の煙りが、渦をなして天井の方へ上つて消えて行くやうに見えるのが、心の迷ひでない誰が斷言出來ませう。

むづかしい議論は、今はよめますが——いや、そんなむづかしい議論は、私の出来ることでもありませんし、しなけりやならぬことでもありませんし、又したいことでもありません。とにかく、私には、この世界の萬象の底には、何か知ら大きいものがあつて、前世、現世、來世の三世を通じてこの世界に姿をあらはしたすべてのものが、ことごとくそれに縛りつけられてゐる……適當な言葉で云へ

ませんが、まあ、そんなやうな氣がするのです。

何だか前口上が莫迦になくなつて、あなたの好奇心をひいたかも知れませんが、果してそれだけの奇怪なことかどうか、お聞きになつてみれば、すつかりわかることです。ですから、たゞ、私の今からお話する話を、ほんとうになさなくても、なさつても、——實を云ひますと、私でさへ、あれはほんとうだつたのか知ら、と、とき／＼は疑ふこともある位ですが——とにかく、最後まで聞いていただければいいのです。

さて、いりもしないことを長々と喋舌つてゐたので、何かからお話していゝか、ちよつとわかりませんが、話は、今では先々月の四月、ちようどT市第一の名所として名高いあの櫻馬場の花が、まあ三分ほど綻び初めた、といふ頃のことなんです。その頃でした、私達の金鈴俱樂部が、隣縣のT市の婦人會から招かれて、T市へ遠征に行つたのは………

いや、金鈴俱樂部のことを充分御存じのないあなたには、話の順序として、それから先づお話ししましょう。

金鈴俱樂部がこのK市の音楽界に姿を現はしたのは、去年の暮のことです。K市には、これまでいくつも音楽の結社が出来ましたが、感情の問題や適當ない、指導者がなかつたために、みんな相次いで崩壊してしまつて、ちようどその頃、残つて健全に發達してゐたのは、レコードを中心にしたKFソサイエティだけであつたので、時機がよかつたためでもありませんが、私達の俱樂部の誕生は、この二三年來激増したK市の好樂家に、大いに歡迎せられたのです。その上に俱樂部は、一度ステージに立つとその熱情的な鮮やかな演奏振りで聴衆をすつかり熱狂させてしまはれるヴァイオリニストの高木氏、女流

音楽家として有名な加能竹子氏と清水鈴子氏、それにピアニストとしては英國人のウオムス夫人——などのK市とT市の一流の音楽家を網羅してゐるので、この二月に始めて第一回の演奏會をこのK市で開いたときには、入場券を賣り出してから日がたぐさんなかつたにも拘らず、あの廣い公會堂のホールに、一つ残らず倉庫から出した椅子が全部聴衆に占領されて、遅れて來た人はホールの外の喫煙室に立つてゐたといふ位の大盛況でした。そしてこの演奏會で、一舉にしてK市の音楽界に重きをなした、といふ譯で、それから後も六七人の部員が毎土曜日を練習日として熱心に練習し、四月には、高木さんの郷里であるT市の、婦人會から招聘されて、そこで第二回の演奏會を開くことになつたといふ次第です。

會場や期日、その他すべてのことは、高木さんと、部員の中の最年長者の河野さんが、交渉の任に當りましたので、私達はその前まで詳しいことは少しも知りませんでした。が、演奏曲目は二月にやつたのと殆んど變らないと云ふのでした。日がさまると、私達は、演奏會のあるのは勿論夜ですが、T市の見物かた／＼、午前にこちらを出發することにしました。

その日は、注文通りに、からりと空が紺青いろに晴れ上つた美しい日でした。公園の早い花はもうぱつと開いてゐる頃ですから、朝から何となく氣が浮き立つやうで、そわ／＼した氣持で朝食を終へてから、この前のやうに演奏會の前になつて二本も三本も弦が切れると大變と思つて、補充のヴァイオリンの弦を買ひに出掛けると、大通りには、はやもう、樺いろや緑いろのバラソルが人浪の中にあちらこちらに浮いてゐるし、他所から入り込んで來た団体の花見の客などが、ぞろ／＼と賑やかに通つてゐて、とび立つほど愉快な日です。

家へ歸ると、俱樂部の藤本が、新調の背廣を着てしましこんで、玄關のところに腰をかけて待つてゐ



ました。いつもは牛のやうにゆつくりした男で、停車場へ行くのに汽車の着く前に行つたことがないのに、今日は新調なので嬉しくて早く出て来たんだな、と思つて、「おい、莫迦に早かないかい」と、顔を見るとき、かうやじつてみますと、これも近頃買ったらしい金時計をポケットからひき出して「うん、でも、もう二十分だぜ」と相變らず憎いほど落ちついて答へるぢやありませんか。たつた二十分さいて、びつくりして茶の間へ行つて置時計を見ますと、まさしくもう十時で、發車までに二十分しかありません。さあ、私はあわてゝ自分の部屋へとびこんで、着物を投げすてるやうに脱いで、洋服の袖へ手を通しながら、その間に横文字のわかりさうもない女中に、今夜の演奏曲の樂譜を叱るやうにしてとり出させ、ハンケチやら鼻紙やら時計やら手當り次第ポケットへ投げこみ、ヴァイオリンケースをひつ抱へて、玄關へ行つて靴をはかうとしますと、藤本が自分のと私のと二つケースを抱へて、私の譜面臺と樂譜とだけそこにおいて、もう立ちかけるぢやありませんか。私はますくあはてゝ、少し小さくてよく入らない靴を、ひつかけるやうにしてはいて、家をとび出しました。とび出して角の電柱のところで、藤本に追ひ付いて、ハンケチを出して額の汗を拭はうとすると、藤本が「寫眞機を持つて来たかい」と云ふのです。このときは全くなにはなしに、かつと癢にさわりました。でもしようがないから、また走つて歸つて来て、門のところ、寫眞機を手にした妹に逢つたときは、蘇生の思ひがしましたよ。

それから藤本と私は、ケースやら譜面臺のサックやら樂譜やら寫眞機やら、ちやうど辨慶の七つ道具のやうに抱へて、停留場まで駈けつけて、辛うじて、ちやうど折よく来た驛前行の電車にとび乗つて、停車場へついたので。

ブラットフォームには、大きなセロを抱へてゐる河野さんや、その他のヴァイオリンケースを一つづ

つ提げた連中が、すぐ目につきました。その連中と少し離れて加能さんの姿も見えました。お互に「やあ」と二間はどへだたつたところで、帽子をとつて挨拶したときに、下り列車が構内に走りこんできたので、挨拶もそこへ、早速一同は一つの車室へ乗りこんだのです。

汽車の中でも、いろいろ面白い話がありますが、この話には關係のないことで、くどくどしくなりますから、今は一つも申しません。とにかく、私達の一行は、正午頃にT市の驛から、たくさんの花見客といつしよに、礫ころを敷きつめた驛前の廣場へ、吐き出されたのです。女の人とセロなどの大きい樂器だけは、俥で高木さんのお宅まで行くことになり、私達は、散歩かたぐ、例の七つ道具を抱へて、ぞろぞろと、「金鈴俱樂部のT乗込みだな」「今からヴァイオリンを弾きながら街廻りをしようか」などと冗談を云ひながら、赤い雪洞が何百と兩側に立てゝある、櫻の樹のトンネルのやうな櫻馬場を、午過ぎのあたゝかい光線を浴びて、ゆつくりと高木さんのお宅の方へ歩きました。荷厄介なセロを俥にあづけてしまつて、空手になつた河野さんは、寫眞機を一つ持つて、一行の前へ走つたり後になつたりして、「いま撮るぞ、いま撮るぞ」とおどしてはすぐ「光線がわるくてだめだ」など、云つてやめたりしながら、櫻馬場に於ける金鈴俱樂部一行の街廻りの光景を、フィルムの中に収めようと努力してゐたものです。

こんなことを、くわしく申してゐても、しょうがありません。そこで話はだんく本題に入つて來ますから、も少しの御辛抱です。そのうちに、私達は高木さんのお宅について、お城の濠にのぞんだ素敵に見晴らしのいい部屋で、一二時間みんな揃つて、今晚演奏する弦樂合奏の曲を練習し、それから、裾模様連——と云ふのは、藤本と私が俱樂部の女の方をよぶ名ですが——だけを残して、私達は市街



見物に出掛けました。

相變らず冗談などに耽りながら、古城址の公園を散歩してしまつてから、街をぶら／＼歩いてゐて、ふと、ある小さな楽器店のショウキンドウにかけてある金鈴俱樂部演奏會といふビラを見たときに、ピオラの松田君が、今から今晚の會場をちよつと見て来ようぢやないか、と云ふ動議を提出しました。無論、古城公園と櫻馬場の外に特別の名所もなさうなので、どこかあてのない一同は、早速、うん、見て来よう、とばかりに賛成しました。

この話には何より大切なことで、最初にでも申し上げておかねばならなかつたのを、今まで申し忘れてゐましたが、その會場といふのは、T市ではまあ第一等の、壽樂座じゆらくざといふ劇場なのです。

私がこのことを、高木さんのお宅で聞いたとき、私はすぐ、小供のとき歴史で習つて頭に描いてゐた、宏壯な聚樂邸から聯想して、それに、思つたより繁華なこの市街で第一等といふのですから、華やかな色彩の天井模様や、棧敷の朱欄が明るい灯に光り輝く美しい劇場を想像しました。かういふ想像は、えて幻滅の悲哀に終るものなどは、いつも思つてはゐるものゝ、やはりその場になると、さうした想像をせずにはゐられないものです。そして、私はそのうへ、聴衆があふれるやうに樹まきの中へ坐りこんでゐる美しい劇場の、ひろい舞臺の上で、郷土的色彩の濃厚なあの美しい「アニトラの舞」や、勇壯な「デルヒーの戦鬪」や、いかにも落ちついた和らかな氣分にみちた「オルフォイス」のバレエなどを、目眩いくらゐる明るい光線を浴びて、演奏する自分達の華やかさまで、想像してゐたものです。

私達一行が扇町まで来たときは、朝出るときにはびかびか光つてゐた靴が、すつかり埃ほこりを浴びて白くなつてしまふ位、歩いてゐました。T市通の河野さんが、途中から雲隠れしてしまつて、誰もこの町を

知つてゐるものがないので、街に遊んでゐる子供に道をたづね、扇町の中程から横のせまい小路へ入つて、かれこれ一町ほど歩きますと、ちよつとした廣場へ出ました。そのつきあたりに、灰いろの古い木造の、庇ひさしが半分は雨に朽ちて剥けてゐる、そして閉ざされた板戸には、糊で貼りつけた紙をひきさいたあとがきたなくこびり付いてゐる、見るもみすばらしい小舎が、あるぢやありませんか、——其が、壽樂座だつたのです。

私は全く幻滅を感じました。けれども、私のものの好きな心は、ながくは幻滅の悲哀を味はうことをさせませんでした。私は、さつき停車場前のカフェーで、その日のT市の新聞紙上に「金鈴俱樂部の大家音樂會」と二段ぬきに書かれた標題の、御丁寧に麗々しく私達の名前まで掲げた記事を見たときの誇がましい満足と、反對の満足を味はひました。——と云ふのは、樂器を一つ抱へて、數十里も離れたこんな街へ来て、その古いきたない芝居小舎で演奏するといふことが、旅から旅へど田舎廻りをする敗殘の旅役者を思ひ出させることによつて、私の、放浪を好むものずきな、そして妙に偏屈な、趣味を幾分満足させたからです。

私はもう一度、ゆつくりと、そのぼろ／＼の今にも壊れさうな、芝居小舎の前を見つめました。柱や板戸は、永年風雨にさらされ叩かれ、腐つてゐるやうに灰いろに黝くろずんでゐて、じめ／＼と微でも生えてゐさうで、庇ひさしは頭がつかへると思はれるくらゐ低く、屋根も餘り高くなく、閉めきつた板戸で、なかにはちつとも見えませんけれども、いかにも中は、うす暗くて、陰氣で、埃ほこりだらけで、きたなくて、入つたらふんど異様な匂ひがしさに思はれるのです。そして、ちつとその建物を見てゐればゐるほど、何だか中には、恐ろしい祕密でも包まれてゐさうな氣がし出し、その上ちつと耳をすませると、その陰氣な

建物の中から、<sup>つひ</sup>呟いてゐるやうにも思へるし、すゝり泣いてゐるらしくも思へる怪奇な管弦樂が、聞えてくる氣さへするのです。

私は咄嗟に、この芝居小舎を寫眞に撮つておかうと、思ひました。そのときはもう、他の人達が口々に「小つぽけなところだな」「きたない小舎だね」など云ひながら、それでも私は幻滅は感じなかつたらしく、横の町の方へ下りて行きかけてゐましたので、私はあわてゝ、コダックの寫眞機をとり出して、二十五呎にビントを合はすと、すぐばちつとシャッターをきりました。そして早速寫眞機をサツクの中へしまひこみながら、怖いものから逃げるやうに、そこを立ち去つて、皆のあとを追ひかけて、坂を走り下りました。あとでわかつたことですが、そのとき餘りあわてたので、フィルムを廻すことを忘れて、前に高木さんのお宅で皆の合奏中のを寫したフィルムに、二枚重ねに寫してしまつたのです。私が寫眞をやり初めてから、こんな失態を演じたのはこれが最初で、いつも一枚寫すすぐフィルムを廻しておくのですが、さつきは少しごた／＼してゐたので其を忘れて、今その同じフィルムの上へまた、壽樂座の外景を寫したといふ譯です。——二枚重なつたとは、あとでわかりながら、ものすきに、現像も焼付もして見ましたが、その寫眞はこゝにあります。御覽なさい。ちやうど未來派の畫のやうでせう。こゝに壽樂座の屋根がありますし、この隅の方に入口の格子戸があります。そしてこの庇の上にヴァイオリンを弾いてゐる人が二三人突き出てゐますし、こゝにセロが見えるでせう。ヴァイオリンやらセロやら弓やら、人の顔やら、芝居小舎の建物やら、それに煙突やピアノまで、——ちよつと、類のない珍寫眞ではありませんか。こんな珍寫眞を撮らされたのも、やはり、今からお話する、壽樂座の祟りかも知れませんよ。

話は横道へ外れましたが、——私達は四時頃、高木さんのお宅へ歸ると、やがて、涼しさうな水色の洋装をしたウオムスさんも、夕方の列車でやつて來られる、そして「今日はK市ではたいさう暑くて汗が出る程でした。こちらはどうでしたか」など、流暢な日本語で、お愛嬌をふりまかれる、それから、カプリスバスクや、スーヴェニール、ロンドカプリチオンなどのヴァイオリンレコードを聴きながら、みんないつしよに夕食を食つてゐますと、劇場の方の人が、もう準備が出來たと云つて、やつて來ました。それで、そろ／＼支度を初めて、六時半ごろ、いよ／＼會場の壽樂座へ、揃つて乗込むことにしました。乳いろのほんのりした夕靄が、街々をたちこめかゝつた、春のたそがれごきのことです。私達は何となく愉快な浮きたつやうな氣持で、靴も軽く、歩きながら、松田君をつかまへて「ビオラ氏、今晚はしつかり頼むせ」など、口の軽い冗談を云つたり、鼻聲で「アニトラの舞」の美しいメロディなどを歌つたり、してゐたものです。

しかし、それが不思議に、晝見たあの壽樂座の前まで來ますと、今まで浮はついてゐた心が、妙な豫感におびえて、ひき立てようとしても氣が沈んで來るではありませんか。

この劇場には、特に樂屋の入口といふものがないので、聴衆の入る格子戸のところ、——晝見た格子戸はどり拂つてありましたが——そこから、私達は、婦人會の幹事の人々に迎へられて、靴のまゝ、闕をまたいで建物の中へ入りこみました。そして、一足壽樂座の建物の中へ踏みこんだそのとき、私の魂が何かしらちやうど、急に大きな手でひつ掴まれたやうな氣がするのです……………

入口に立つて劇場の内を一瞥しますと、外觀に比べては、思ひの外にきれいでした。平坪には、柵と柵とをしきる格子の細い板がすつかりどり拂はれて、一面に赤い敷き物をしいて、その上に聴衆がまば

らに、あちこちに固まつて、舞臺の方を向いて、靜肅に開會を待ちながら、行儀よく坐つてゐます。高い舞臺には、上手の方に、ピアノが一臺どつしりと具へてゐるのが、何だかあたりの調和を破つてゐるので、すぐ眼につきまます。——ゆつくり見てゐる暇もなく、私等は、花道の横の暗いせまい廊下へ案内されました。

松田君のあとへついて、そこへ入つてゆきますと、不思議に胸騒ぎがして、動悸が強くうち初めました。そして、さつきから、何だか、この芝居小舎の中には、陰森としたけはひがみなぎつてゐるやうに、感じられてならないのです。と、その途端、前に豫感したとほりの異様な匂ひが、ふんと私の鼻を襲ひました。その匂ひは、私がいつか——遠い遠い昔の子供のときか、それとも、もつと昔の生れぬ前かに——一度嗅いだことのあるらしい匂ひです。かう思つたとき、私は、胸の底から、泉のやうに少しづつ、湧きあがつてくる軽い恐怖の念に襲はれて、思はずぶる／＼と顫へたのです。けれどその恐怖の念は、私が急にどつんと頭を叩かれたときに、やみました。廊下が一尺ほど高くなつてゐるところで、私は頭を鴨居にぶつつけたのです。そこを上つて右の方へ曲ると、舞臺の裏ですが、せまい二尺か三尺くらゐの幅の廊下の、兩側には、机みたいなものや、古い鏡臺や化粧道具や、ごたくとした小道具がつんであつて、それに足もとが危いので、氣をつけて歩かないと、すぐ蹴躓づきますから、その方に氣が取られてしまひましたが、それでもまだ胸騒ぎはやみません。その暗い廊下のつきあたりの、舞臺の上手の方の斜めうしろに、赤い光りの電燈がひとつ天井からぶら下つてゐる、樂屋の大部屋がありました。そこへ入つたときは、ほつと安堵の吐息をつけるかと思ふと、やはりまだ、何かしら身体がぞく／＼するのです。

大部屋と申ししても、十二疊敷くらゐの小さな部屋で、十六燭の電燈がその中を照らしてゐて、疊は赤くなつて、へりはすりきれてゐて、ひどく古くてきたない部屋です。舞臺に遠い方には、床の間と古風な違ひ棚がありました。大部屋の隣りには、觀客席の方に向つた窓のある、六疊ばかりの、これもあり、疊がきたなくてじめ／＼してゐるらしい、囃方の部屋と思はれるのがあります。

一同はこの大部屋へど／＼入るとすぐ、譜面臺を立てたり、ケースから樂器をとり出して、調弦にとりかゝつたり、しました。ヴァイオリンのA線の音や高いE音の音や、それにまじつて、低いセロやピアノの音などが、音樂會の氣分をそゝりたてるやうに、雜然と小さな部屋の中に響き初めました。

私は、さつきから何だか、妙にそわ／＼して心が落ちつかないので、大部屋の入口の反對の方の障子をあけて、まだうす明るい外を眺めました。そこには、部屋の障子の外についてゐる竹縁から、三四尺も下に低く、二三間ばかり奥のある、荒れはてた庭があつて、その向ふには、くづれかゝつた土塀があり、土塀のうしろには、高い竹藪が空を蔽うてゐましたので、おやもうこゝは町はづれなのか知ら、——と思ひながら、暫くぼんやりと何心なく、春の夕ぐれ、雜草が生ひ茂つてゐるその荒れはてた庭をちつと眺めてゐますと、やがて、私の眼の網膜の中に、蛙のやうな形の動物が、ひとつづつ、ちつと映り出します。はつと思つて、眼をきつぱり据えて見ますと、一間ばかりはなれた私の眼の下に、果して一匹の蟄が、庭のどび石の上に腰を据えて、ちつとこちらを見つめてゐました。私は生れてから蟄といふものを見たのはこれが初めて、何でも蛙の大きい形のものだつたから、あれが蟄だらうと思ひますが、餘り氣持のいゝものぢやありません。けれども、薄氣味のわるい思ひをしながら、私もその蟄を睨みますと、蟄は俄かにあわてかへつたやうに、横の叢のなかへどびこんでしまひました。そのあわてかへつ

た恰好が可笑しかつたので、私は思はず吹き出さうとしましたが、そのときに、急にざあ／＼と前の竹簾の中を、誰か五六人の人が這ひこんで来るやうな、葉のすれあふ音がするので、簾の方を見上げますと、その日は朝から今まで微風さへなかつたのに、かなり強い風が、一陣さつと竹簾を吹き過ぎたのです。春とは云へ、四月の中頃で、夕方の風はひいやりと冷たく、肌にさわりました。そして暫くひつそりしたと思ふと、また一陣………また一陣………と竹簾から、庭いち面に生ひ茂つた草木を、さあ／＼とかすれた音をたて、揺すり初めるのです。庭の草はみな、ひよろ／＼と長く莖がのびてゐますので、風が吹くたびに、倒れかゝるやうに、ひゞく風の方へ靡きます。氣味のわるい風が出たものだな、——と思つてそれを見てゐますと、ふと、長い莖のさきについてゐる白い花が、私の眼に映りました。何の花だか、うす暗くてはつきりわかりません。土塀の前の叢の中から、ぬつと長くつき出て、ちよつと首をかしげて何か考へてゐるやうな、白い花です。何の花だらうと思つて、暫く見つめてゐますと、風が吹いて、外の草葉や竹簾の葉が、風の方へ靡いても、その花だけは、釘づきにされたやうに真直に、いや、前のとほりにむしろ風の反對の方へ、頭をかしげて延びてゐて、小揺るぎもしないのに氣がつかしました。おや變なことがあればあるものだぞ——と思つて、横の草葉を見ると、横の草葉はみなしきりに風に吹かれて、倒れるやうに靡いてゐます。庭をぐるりと一廻り見廻はしますと、隅の方に、も一つそれと同じ白い花がありましたので、こゝにもあるな——と思つて其を見つめると、今まで風に揺れてゐたその花が、あわてかへつたやうに止つてしまつて、さつきの白い花は、ほかの草のやうに、竹簾をしきりに吹きまはる風に、揺れ初めたらしいのです。そしてまた別の白い花を見ると、その花がまた釘づきにされたやうに、ちつと立ち上ります。その様子がちようど、私にみつめられて身をすくめ

てゐるやうでもあり、また恐しい眼をして私を睨み返してゐるやうでもあるのです。——そのとき、私の頭には、私の身体に誰かの魂が、この芝居小舎へ入つたときから、のりうつゝたのぢやなからうかといふ、荒唐無稽な考へが、一瞬間、閃きました。が、やつぱり自分は自分として確かに存在してゐるやうな氣持がするので、その氣持が、前の考へを否定してしまひました。すると今度は、さつきからずつと、誰か私の後につきまゝとゐるのだ、私の肩におひかぶさるやうにして誰かづついてゐるのだ、といふ考へが起りました。こんな考へも、信じられませんでした。が、でも、この考への方が前のよりは、確實性をより多く持つてゐるやうに思へました。

しかし、こんなことを穿鑿してゐてもしようがないと思つたので、私はもう花を見ることをやめて、立て付けのわるい障子を荒々しくしめると、ケースからヴァイオリンをとり出して、調弦にかゝりました。

そして調弦を終へてから、障子の外のもの音を聞くと、さつきの風は忘れたやうに止んで、ひつそりとしてゐるのです。私は、さつきの、夕闇の中に、ちつとこちらを睨んでゐた墓と白い花のことを思ひますと、無氣味でたまらなくなつたので、こんなことは忘れてしまはうと思つて、樂屋の大部屋の入口に脱いでおいた靴をはいて出て、舞臺の上手のピアノのうしろから顔を出して、觀客席——今晚だけは聽衆席ですが——の樹の方を見ました。

樹には、かれこれ二百人ほどの聽衆がゐたでせうか。鶉や棧敷の方には、誰も入れないことにしてありました。この音樂會が婦人會の主催だつたためか、その聽衆の大半は女の人で、それにこの土地の學生などがまじつてゐて、皆平坪の敷物の上に行儀よく、ひつそりと、誰も大聲で喋舌るものもなく、

坐つてゐるのです。場所が場所だからでせうか、何だか妙にいつもの「音樂會氣分」といふ一種の雰圍氣が、少しも醸成されてゐません。

そのうちに七時の定刻になると、婦人會の幹事の方の簡単な挨拶があつてから、開會となりました。舞臺の上には、十ばかりの椅子と、電燈にぴか／＼光る銀色の譜面臺とが、聴衆の方に向つて半圓形に並べられました。プログラムは、組曲「ペーアギント」の弦樂合奏「アニトラの舞」に始まるのです。

私等は、おとなしい拍手に迎へられて、第一ヴァイオリン、セロ、ビオラ、第二ヴァイオリンといふ順序にならんで、一人づゝ舞臺へ出ました。この曲では、私は第一ヴァイオリンを弾くことになつてゐるのです。たくさんの方の視線が、こちらへ向けられてゐるのを感じながら、私は、右手にもつて來た樂譜を譜面臺の上にのせ、樂器を左手に抱へ、ゆつたりと椅子に腰をおろしてから、右手で椅子を前の方へひきよせた、そのとたん、私の身体はどつと激しく前へのめつて、危く倒れようとしたので、はつとしました。見ると、椅子の一本の脚が、舞臺の板の上にあいてゐる直徑二三寸の穴へ、はまりこんだのです……

芝居小舎の舞臺の上なら、いろ／＼の道具を立てるため、そんな穴があるのだ、と思へばすむことなのですが、そのときは、そんなことを考へる心の餘裕ありません。椅子といつしよに倒れかゝつた瞬間、何百の聴衆の視線が一時に、私に集つたやうな氣がすると同時に、どこからか私の耳のすぐ近くで、さつきの墓と白い花が、せゝら笑つたやうな聲が聞えたものですから、たまりません。私は、椅子といつしよに、舞臺の下の深い／＼奈落へ、眞倒さに、ごんと墜落したやうな氣がしました。——それからあさは、少し氣がばうつとして、滅茶苦茶です……

頭腦にこびりついた濡れ紙を一枚々々剥ぎとるやうに、意識が、少しはつきりして來たころ、例の白い花がちつと私を見つめてゐます。他の草葉はみな風に搖れてゐます。しばらくすると、その白い花がさつと動き初めました。とたんに、「アニトラの舞」の最初の長い連續音が、一齊に響き初めました。私はあわてゝ、無意識の中にヴァイオリンの弓をとり直すと、後から追ひかけるやうに弦を弾き初めました。——後に考へると、そのとき、第一ヴァイオリンのリードアの高木さんの、合圖の弓が、さつと振られたので、白い花に見えたのは、その弓の白い毛でせう。

かうして、初めからあわてたものですから、もう前にある樂譜も、聴衆も、眼に霞がかゝつたやうで、少しも見えません。そればかりではなくて、あの墓のぶつ／＼、咄／＼や嘲笑する氣味のわるい聲が、弦樂器の音の間ごとにまじつて、しつきりなしに、私の耳に聞えるのです。私は、もうどこが Pizz. か、どこが Repeat か、少しもわからずに、半無意識的に弓や指を動かしてゐましたが、幸なことに、私はいつもから譜はたいいてい譜記する癖で、殊に音樂會に演奏する曲などは、幾度となく練習をしますから、殆どひとりで手や指が始から終まで動く位に、すら／＼と譜んじてゐるので、そんなにして弾いてゐても、メロディは勿論、テムポなど、辛うじて皆といつしよに合つたらしいのです。けれど自分では、いつどこを弾いたか、ちつとも覺えがありません。それはたくさんの方の前へ出たので上氣して氣がばうつとしたのぢやないか——と仰しやるのですか。いゝえ、さうぢやありません。私は今まで何べんも音樂會には出たことがありますし、辯論會の演壇などにも立つたこともありますし、それにどつちか云へば幾分面の皮の厚い方ですから、そんな筈はないのです。ぢやどうしたのだ、と仰しやれば、どうしても、この壽樂座の中にこもつてゐる、陰々とした妖氣に祟られたのだ、としか答へられません。私が

ヴァイオリンを弾いてゐるすぐ肩のうしろに、誰かゞ楽譜をのぞきこんでゐるやうな、かと思ふと、そのものが既にもう、私の身体にのりうつてしまつてゐるやうな、底氣味のわるい氣がしてならないのです。さう／＼、ちやうど、ひどい高熱にうなされるときのやうな氣持です。これだけ申せば、妖氣にたゞれたことが、おわかりになるでせう。

「アニトラの舞」の曲が、長い餘韻を残して、終つたときでした。樹の方から、つゝましかかな拍手が盛に起りましたが、それが止んでしまつても、まだ、わあ、と遠くの方で喝采するやうなごよめき聲が、耳の中へ残るではありませんか。そしてその聲は、聞き様によつては、すぐ近いところのやうにも、思はれるのです。變だなど思つて、楽譜をたゞむ手をふとやめて、聞き耳を立てると、そのごよめき聲は、まさしく人のこゝろのない向棧敷の方から聞えるものではありませんか。さう聞いたのは私一人ぢやない證據に、そのとき椅子から立ち上つて、私のひとつ前に退場しようとしてゐた成瀬が、向棧敷の方を睨むやうに眺めて、「何だい、あの聲は」といかに不審さうに、獨り言らしく呟いたのです。自分の耳ばかりではなく、成瀬の耳にも聞えるのだと思ふと、うす氣味わるくなつて、私は返事もしずに黙つて、わざと成瀬のあとからせき立てるやうに、ヴァイオリンを抱へて立ち上つたので、成瀬も、自分の聞き違ひかと思つたらしく、さつさと退場しました。

さあ、それから樂屋へ入つてから私は、ます／＼無氣味で無氣味でたまりません。どう考へても、さつきの墓といひ白い花といひ、いまの向棧敷のごよめき聲といひ、不思議と云へば不思議です。と思ふと、何かしらあたりに、妖怪變化がひそんでゐさうな、いや、この小舎の中の柱でも壁でも天井でもが、化物屋敷のそのやうな氣がするのです。

皆は、妙に黙りこくつて、十六燭のうす暗い電燈の下に、火鉢のまはりへあつまつて、坐つてゐました。第二回はセロの獨奏で、舞臺の上からは、河野さんの弾いてゐるセロのこもつた低い音と、ピアノの伴奏の音とが、地の底から響くやうに、聞えてまゐります。そして私の坐つてゐるところから見える、舞臺裏の暗いところには、誰かゞ行つたり來たりしてゐる氣配がします。どうかしてるな、きつと氣のせいだ——と思つてみても、さう否定すればするほど、なほ強くそんな氣がしてくるのです。

たえずそんな妙な氣がしてゐるうちに、プログラムは二つ三つと進みました。そして聴衆の拍手のちには、きつと、影のやうなあのごよめき聲が、浪のやうに、大部屋にゐる私の耳のところまで聞えるのです。私は、そつと兩手の指で耳の孔を塞いでみました。——でもやはり、同じい大聲で聞えます。突然横にゐる藤本に「おい、何をしてるんだい」と問はれて、よほど、「あの妙な聲が聞えないか」と云はうかと思ひましたが、藤本には聞えないらしいから、云つたつて大ていわからないだらうと思ひましたので、黙つたまゝ手を耳から下しました。そして、皆と少し離れて壁にもたれかゝつてゐる成瀬の方をみると、成瀬は、きれの長い眼をどちて、ちつと何か考へてゐました。

それから、五番目の清水さんのソプラノ獨唱のときでした。曲は「カルメン」の「ジブシイの歌」で、伴奏はウオムスさんです。私はそのとき、大部屋の隣の囃方の部屋へ行つてゐました。その部屋は、電燈がなく、觀客席の方に向いてゐる、古いきたない簾のかゝつてゐる低い窓から入る光と、大部屋の方からもれて來る光とばかりで、うす暗い部屋でした。その窓の簾からのぞくと、觀客席の方もよく見えますし、舞臺の方もよく見えますが、外の方からは簾のために、中は少しも見えないのです。

曲は、ピアノの伴奏のピアノシモから始まりました。窓のすぐ前の、私の鼻のさきに、ピアノがあ



るので、鍵の音がどん／＼と大きく耳にひびきます。やがて歌が始まりました。私は、その高いはりきつたソプラノの肉聲と、ピアノの鍵の音との快い交錯を、半ば夢心地で聞いてゐましたが、ふと變なことに氣付いたのです。變なこと、云ふのは、とき／＼ピアノの伴奏の音が、びたと止んで、また思ひ出したやうに鳴りひびくことです。それで私は、聴衆の方から眼を轉じて、すぐ眼の前に腰を掛けて、輕快なタツチで鍵盤を叩いてゐるウオムスさんの手附きを見つめてゐますと、折々、ウオムスさんが一生懸命に叩いてゐるにも拘らず、四分の三拍子のちようど一小節ほどの間、音が少しも聞えないことがあります。そしてウオムスさん自身は、平氣で弾いてゐるところを見ると、ウオムスさんには立派に聞えるのでせう。すると、私の耳の誤りか知ら——と思つて、一心に聞いてゐても、鼻のさきにあるのですから聞えない筈がなく、殊に外のときは聞えるのに、やはりどうしても、とき／＼一小節ほどの間、音が消えます。奇怪千萬、と思つて、次の間へ成瀬や藤本を呼びに行かうとして、立ち上つて大部屋へ來ると、もう曲が終つてしまつたので、友人達にこの次第を話す氣にはなれませんでした。『そんな莫迦なことがあるものかい』と一言の下に退けて、誰も相手にしてくれないだらうと思ひましたから。

次は高木さんのヴァイオリン獨奏でしたが、このときも、ピアノの伴奏が途中で消えたかどうかは存じません。その次が、私達がみんな出なければならぬ、一部の最後の幻想曲「デルヒーの戦闘」の弦樂合奏でしたから、また前のやうな醜態を演じてはならぬと思つて、私は出来るだけ心を落ちつけようと思つて、つとめて、そんな奇怪なピアノの伴奏に氣をとめないやうにしてゐました。

そのうちに、いよいよ私達の演奏の番となりました。私は第二ヴァイオリンの、舞臺の端から二番目の椅子に、さつきのやうに舞臺の上にたくさんある穴の中へ、椅子の脚がはまりこまぬやうに注意しな

がら、ゆつくり落ちついて腰を下して、皆が順々に着席する間、例のとほりわや／＼聲のする人のゐない機敷の方を睨んでゐましたが、今度は幸に、心が落ちつきすぎるほど落ちついてゐます。私のちやうど向ふ側にをられる、高木さんの弓を合圖に、私達は弓を弦にあて、弓がさつと振られたときに一齊に弾き初めました。

始めの方のアンダンテやアンダンチノのところは、全くよく合ひました。そして、曲が黎明、日の出、喇叭、叛逆者のデルヒー占領、印度の歌——とだん／＼進んでくるうちに、私は、身体がすこしばかり宙に浮くやうな、——さあ、どう云つたらいいでせうか、ちようど、小舟に乗つて漣のたつてゐる海の上へ出たときのやうな、とても云ひませうか、そんな氣持になつてくるのに氣がつかしました。そしてその氣持が、足もどの方から起るのを感じたので、どうせ譜は諸記してゐて見てもゐなくても、同じいのですから、樂譜の頁から眼をはなして、左手の指と右手とは絶えず動かしてゐながらも、足もどに眼をやりました。すると、暫くはべつに何の變つたことにも、氣づきませんでした。ふと、私は弓を持つてゐる手がどまるくらゐに、びつくりしたのです。私の頭には、またおそろしい想像が、描かれました。

と云ふのは、くわしく申せば、私の腰掛けてゐる椅子は、ちようど廻り舞臺の端にまたがつてゐるのです。廻り舞臺の大きい半圓形の弧は、私達の作つてゐるところの、舞臺の前端の正面に中心を持つてゐる半圓の弧と、深く交はつてゐて、一等舞臺の端に腰掛けてゐる、即ち一等聴衆に近い、第一ヴァイオリンのリーダーの位置にゐる高木さんと、第二ヴァイオリンのリーダー、即ち私の横にゐる成瀬との外の、七八人は皆廻り舞臺の上につてゐるので、そして私の椅子は、右の二本の脚と左の脚とが廻り舞臺の上につて居り、左の後脚だけが、廻り舞臺につてゐないのです、これだけ説明しておか

ないどころありません。――

私が足もとを見てみますと、その廻り舞臺が、あの、ぎざい……ぎざい……といふ大きい軋り音もたてず、ゆつくりと殆ど一分、一厘ほどづつ、廻轉してゐるのです。ごちらの方へ廻つてゐるのかと思つてみますと、前の方へ廻つてゐるやうで、廻り舞臺へかゝつてゐない椅子の脚が、すすつと前へひかれてゐるやうですが、暫くするといつの間にか、私の身体は椅子と一緒に、後の方へまた少しづつ戻つてゐます。よく氣をつけてゐますと、前へ行つたり後へ行つたりしてゐるらしく、さあ、長さにしますれば、五寸ほどでせうか、そんなに多くはないかも知れませんが、それだけ位の間を、ゆつくりとおそい速さで廻つてゐるのです。私の方は五寸ほど動いたとしても、廻り舞臺の圓の中心に近くゐる人々は、一分か二分しか動きません。圓の端に近いほど、たくさん動く譯です。こゝまで考へてきた私は、やはり續けてヴァイオリンを弾きながら、私の向ひ側に第一ヴァイオリンを弾いてゐる、加能さんと清水さんの方をちらと見ましたが、二人とも一心に弾いてゐて、無論廻り舞臺には氣が付かないらしいのです。そのうちに、もう下を見るまでもなく、まさしく私の身体が前へ出たり後へさがつたりしてゐるのが、ヴァイオリンを弾いてゐる私にも、はつきりと、感じられるのです。

私の頭には、廻り舞臺が廻つてゐるのに氣がついたその瞬間、舞臺の下のうす暗い奈落で、もの凄いい形相の妖怪變化があつまつて、まはり舞臺を廻してゐる、身の毛もよだつやうな有様が、くつきりと描かれたのです。

曲はもう正に眞最中で、モデラートから、アレグロのウィルソン將軍の攻撃命令のところに移りましたが、セカンドの方の拍子が、だん／＼ファストより早くなり出したので、私達はファストの拍子に合は

さうとあせりましたが、あせればあせるほど、今度はセカンドの中でまた互に速さが違ひ初めて、尙更雜然とした騒音になり初めます。その上、氣のせい、廻り舞臺が前よりもだん／＼速く、前後へ廻り出したやうなのです。ちやうど、退却して行く敵軍の不揃ひになつた足並を、追撃を急にします／＼亂させるやうに。――さうして、叛逆者の逃走といふ標題のついてゐるあたりは、ちやうど瓦をあとか／＼と、がら／＼崩すやうな音が、雜然として、舞臺の低い天井の下にひびきわたりました。さあ、さうして一度拍子が亂れると、容易に揃ひません。どう／＼最後までそんな風に終つてしまいました。――それが、私には、どうも廻り舞臺のせいに思はれてならないのです。いや、廻り舞臺をまはした、この舞臺座の奈落に住む妖怪變化のせいに思はれてならないのです。この曲は練習のときなどでも、いつも立派に合つたのですから。

この「デルヒーの戦闘」の曲が終つたときには、廻り舞臺は止つてゐましたが、よく見ると、私の椅子が、成瀬の椅子から、一尺足らずばかりも後へ下つてゐるぢやありませんか。成瀬の椅子だけが、私達の作つてゐる圓弧から離れて、一尺も前へとび出してゐるのです。いや、成瀬の椅子が前へとび出したのではなくて、私達の椅子の方が、廻り舞臺に廻されて一尺も下つたのです。私は、演奏中に、舞臺が廻つた氣がしたのが、嘘ではなかつたのを知りました。

部員はみな、今の演奏の不首尾だつたのに、がつかりして、すご／＼と樂屋へひきあげましたが、そのときにも、棧敷の方から、「それみるろ！」とばかり、嘲るやうなもの凄いせつら笑ひが、聞えたさうです。これは後になつて、成瀬が私に話してくれたことなのですが、さう云はれると、私も何だか、そんな聲が、例のざわめき聲の中に聞えたやうにも思ふのです。なぜ、やうにも思ふ、など、申しますと、



私はそのときは、すぐ／＼と一人づゝ順々に皆が退場してしまふまで、前後の一尺もはなれてゐる成瀬の椅子と自分の椅子とを、たゞ茫然として眺めてゐるばかりであつたからです。

一部と二部との間には、十分の休憩時間がありました。女が大部分ですから、演奏中は非常に静肅でしたが、それでも休憩時間になると、座を立つ人や話したり笑つたりする人があるので、少し樹の方はざわつきましたが、少しざわついて呉れた方が、私には却つて嬉しう御座いました。と云ふのは、餘りひつそりしてゐると、また、今までのやうな奇怪なことが、起りさうだつたからです。

私達が大部屋の火鉢のまはりに坐つて、煙草を吸つてゐると、舞臺の幕のうしろの暗い廊下に、大勢の人が、がや／＼云ひ争つてゐる聲が聞えたので、何事が起つたのか知ら、と思つてゐますと、そのうちに、ぎや／＼と大部屋へさしてやつて来る氣配がいたします。聴衆の中の子供か、この土地の何かの有志の人が、樂屋をのぞきに來たのだらう位に思つてゐますと、ます／＼その聲が大きくなつて、わめきどなつてゐる聲さへ聞え、たゞならぬ氣配がするので、一同は暗い廊下の方をすかして見ましたが、それでも何も見えないらしいので、不思議に思つて、ピオラ氏の松田君が立つて見に行きましたが、入口のところで怖いものをのぞくやうな恰好で、暫く廊下の方をのぞいたきり、そして、少し蒼い顔をして歸つて來て「誰も居ないんだけど、騒々しいな」と力のない聲で復命するのです。部屋の際の疊の上に椅子をおいて、ひとりだけ、靴をはいたまゝ、黙つて腰かけてゐたウオムスさんが、私の方を向いて、日本語で「何が起つたのですか」と訝かしさうにきいたのをみれば、その聲が、外國人のウオムスさんにも聞えたに相違ありますまい。みんな云ひ合したやうに、暫くひつそりしてゐると、突然セロ氏が「この芝居小舎は化物屋敷だぜ」と云つて無遠慮な大きな聲で笑ひましたが、誰一人として、返事は勿論笑

ひさへしません。河野さんも、しょうがないので口を閉ぢてしまひました。そのとき、今まで廊下に聞えた音が、急に天井の方に聞えはじめた、と思ふ瞬間、河野さんがまた「おや、天井板に血の痕がついてゐる！」と頓狂な聲で叫んだので、私達はその血の痕がほんどうについてゐるかどうか、天井を仰いで見ないうちに恐しさのために、ぞつと身ぶるひしました。が、皆仰いてみると、天井は黒ずんだ古い板で、若しほんどうに血痕がついてゐるとしても、ちつともわかりません。人を驚かすことの好きな、年の割合には非常な茶目坊の河野さんが、でたらめに云つたことなのです。けれども私達は、事の眞偽は別として、たゞ血痕といふことを思ひ出すことによつて、既にもうぞつとする位の恐怖を感じたので、つまり、立派に河野さんの罠にかゝつたわけです。

後にきいた話ですが、このとき松田君や成瀬や宮井は、申し合はしたやうに、何といふことなしに、累殺しや四谷怪談の芝居を思ひ出して、首すぢからぞつとした寒さを感じたさうです。私は幸にして、今まで、日本の芝居といふものは、殆ど観たことがないので、そんな聯想はいたしませんでしたが。

それから血痕といへば、これも歸りの夜汽車の中で、松田君にきいた話ですが、松田君は、この劇場の樂屋の一本の白木の柱に、黒くなつた血痕がついてゐるのを、樂屋番の爺さんに實際に見せられたさうです。

話のもとへ戻りますが、たつた十分の休憩時間にさへも、この大勢の人が罵りあふ聲がやむど、舞臺の上の高いところで「きやッ！」といふ悲鳴が聞えたり、やはりそのあたりで、きり／＼とつるべをあげるやうな音がしたり、隣りの囃方の部屋から、かすかな三味線の弦の音とまじつて、滅入るやうな女のすゝり泣く聲が、とだえ／＼にながく聞えたり、暗い庭の方で、とび石をつたつてくる駒下駄のカラ

ンコロンの音が聞えたり、——こんな奇怪なことが、かなりたくさんありますが、これは私の耳の誤りと申せば、それまでのことです。事実、これは私の耳の誤りかも知れないんです。何故つて、いつもから、耳の錯覚のひどい私のことです。——うつとりした倦怠を覚える夏の暑い午後なんか寝ころんでゐると、よく前奏曲の「牧神の午後」をきいてゐる気がしたり、夕方木の葉が風に躍つてゐるのを見ると、ビエルネの「セレナアデ」を聞く感じがしたり、深夜などに、明るい電燈の下に、濃緑色のテエブルクロスの上におかれた花瓶にさしてある、一束の青や紅や黄の鮮かな洋草の花の色をちつと永く見つめてゐると、かすかに耳の中で弦樂四重奏が聞えたり、こんなことが一々例を挙げられない位にある私のことです。——

いや、かう云つてしまへば、今までお話ししたこともみな、私の錯覚だと仰しやるでせう。耳ばかりではなく、いつも、よく幻想にとらへられる私のことです。或は實際さうかも知れません。もしさうすると、こんなくどくどしい長い話をきかされるあなたの方は、さぞ御迷惑のこと、思ひますから、今からは、私の壽樂座で見たこと聞いたことの中で、あなたにもほんとうと思つていただけさうなことを、お話しすることにしませう。——

休憩時間がすむと、演奏會のプログラムは二部に入りました。初の弦樂合奏「越後獅子」は、——プログラムの中には、特に一般の人の興味をひくために、所謂日本ものが一つ加へられてゐたのですが、この曲の演奏中は、頭のながい髪の毛が一本づつときく強く後へひつばられる感じがした外には、——この感じはこの時ばかりではなく、舞臺へ出るごとにしました。——その外には、べつに怪しいことはありませんでしたけれど、次の女聲三部合唱のときでした。寫眞屋が來て音樂會の記念撮影をするこ

いふので、寫眞に少しの興味を持つてゐた私は、舞臺のピアノの後からのぞいてゐますと、寫眞師は花道のところに寫眞機を据えて、舞臺に並んで立つてゐる三人の裾模様連に、しきりにピンツを合してゐます。そしてやがて合唱が終らうといふところに、マグネシウムに點火すると、しゅうつといふ音がして、白い煙がばつと立ち上りました。なに心なく、その白い煙を眺めてゐると、煙は天井の方へ上りながら、ちつとも薄くもならず、しだいに白く濃く固まつた、と見てゐるうちに、いつのまにか、恐しい形相をした人間、——それも白装束をした役者のやうに思へましたが、人間の形になつて、聴衆を下に睨みつけた……かと思ふと、たちまち煙はくづれ初めて、天井のところで、あとかたもなく消えてしまひました。——それがほんの五六秒の間のことなんです。

息もつかずにこの奇怪な煙を見てゐた私は、この煙が天井のところで消えてしまふと、餘りの不思議さに驚いて、誰か自分といつしよに、この奇怪を見てはゐなかつたかと思つて、聴衆の方を見廻しましたが、皆ばつとマグネシウムの燃えたときこそ、ふり向きはしましたが、そののちの煙の行衛なんか見てゐたものが、何百人の中に誰一人としてなかつたのも、不思議と云へば不思議と云はねばなりません。普通田舎などで、いや當地でもさうですが、講演會や音樂會などに、夜間寫眞撮影のマグネシウムを燃やすと、煙が消えてから一分ほどたつても、ばかんとして、煙の消えたあたりや天井を眺めてゐる人が、きまつてゐるものなんです。——

次にお話しすることは、奇怪とは云へないかも知れませんが、この壽樂座の中であつただけに、やはり何かの祟りと結びつけて考へたくなるのです。それは、高木さんが、ヴァイオリン獨奏に、サラサーテの「チゴイネルワイゼン」を演奏せられたときのこと。私達はみんな、いつもながらの高木さんの

鮮かな演奏振りにひきつけられて、舞臺の後へ出て聞いてゐましたが、曲がもう終らうとする *animando* *sempre* のところまで来たとき、A線や他の線ならまだしも、E線が、ぴんと鋭い音をたて、ぶつたり切れるぢやありませんか。妖怪の悪戯(いたづら)にしては、餘りに巧みな、手に入つた、そしてそれだけ憎むべき悪戯です。なぜと云ひますと、この *animando* *sempre* の後は最後のビチカトを除いてはE線ばかりで終るのですから。そしてそれが長い曲の最後の僅かのところまできて切れたのですから。そのうへ後で聞くと、高木さんも「あの弦は切れる筈はないのだが——」と云つてをられたのですから。

その後にも、ウオムス夫人のピアノ獨彈のときに、彈奏の眞最中、舞臺の上には、風もないのに樂譜が、ちようど風に吹きとばされるやうに、とんで落ちたり、アルト獨唱のときに、舞臺裏からうめき聲やすゝり泣きが、おどろかしい聴衆でさへ「叱ッ！叱ッ！」と云ひ出す位に、獨唱の聲にまじつて大きく聞えたり、そんな奇怪なことがやみませんでした。

それから、私は大部屋へ入つて、ひとり、隅へ坐りこみ、ざら／＼したきたない土色の壁に身体をもたせ、眼をつぶつて、さつきからのいろ／＼の奇怪なことを考へて、きつとこの劇場に昔からまつはつてゐるらしい、世にも恐しい因縁(いんねん)を想像しようと思ひました。が、たゞ、化物屋敷、執念、祟り、白装束の役者、人殺し、血染れ、振り亂し髪、怨靈、墓の化身、………こんなやうな、まごまりのない考へが、かき亂された頭の中に渦くばかりで、何かに捏(ねづ)つち上げようとしても、その想像は一つもまごまつた形をなしません。

そのうちに、部屋の中が妙にうす暗くなつたやうな氣がしたので、ふと眼を開いて視線を上げると、部屋の中には相變らず暗い十六燭の電燈が、低くぶら下つてゐて、あたりを照してゐますが、ふと、私

の坐つてゐるちようど向ひの、天井に近い壁のくらいどころに、神棚が一つあるのに氣がついたのです。どんな樂屋でも、樂屋にはみんなきつと、お稻荷さんがまつてあるものだ——と、いつか私の友人の福井君が云つたのを、思ひ出したので、私はすぐ、お稻荷さんだな、と思ひました。その神棚の上に、小さい今にも消えさうなお燈明が、ぼつちり赤く瞬きながら光つてゐて、その灯をぢつと見守つてゐると、魂もその灯に吸ひ込まれて行きさうで、幽界に燃えてゐる火、と云つたやうな感じがします。さうして私がどれだけの間、それを見つめてゐたときでしたが、やがてそのお燈明がぼつと消えたと思ふと、急に世界がまつくらになつたやうな氣がして、それと同時に、どこからともなく私の耳に、もの凄(こ)い大地の底からひびくやうなバスのうめき聲で、「三世(さんぜ)につながる惡因縁(あくいんねん)にひかれて、たゞ生きかはり死にかはり、世をかへ時をかへて、輪廻(りんね)の浪に浮沈(ふちん)するのぢや」と云ふのが、はつきりと聞えたぢやありませんか。……さつきから度々の怪しいことになれてゐるとは云へ、こんな凄(こ)い文句を、しかもはつきりと聞かされては、やはりいゝ氣持がいたしません。しばらくの間といふものは、外のものおとは何ひとつ耳へ入らずに、そのもの凄(こ)いうめき聲が、耳の底に残つて、こびりついたやうに消えなかつたものです。ふと、何時(いつ)だらうと思つて、時計を出して見ると、時計は九時十五分前のところで止つてゐるので、壁ぎはから身体を起して、次の演奏の準備をしてゐる成瀬のところへ行つて、時をきくと、妙なことはやはり九時十五分前で止つてゐます。「不思議だな、夕方螺旋(ねぢ)をまはしておいたんだが………」と成瀬が不審さうに云ふので、私は今度は藤本に、「いま何時だい。終列車にや間に合ふだらうか」ときいてみますと、今九時十五分前だから大丈夫だらうと云ひます。「狂つてゐやしないか」と云ふと、「品物が違(ちが)うせ」など、云つて金時計を前へさし出してみせるのです。してみると、成瀬のも私のも、今止つた

ばかりなのです。これは變だと思つて顔を上げると、成瀬の視線とびつたりと合つたので、思はず「何かの祟りだぜ、時計にまで祟るのだから恐いな」と云つて、成瀬の時計をのぞきこむと、これはまた奇妙に、私のと寸分違はず四十秒のところ秒針が止つてゐます。成瀬は、神經質的な蒼白い顔をして、陰鬱な表情で、暫く黙つて二つの時計の面を見くらべてゐましたが、やがて「さう云へば、僕は今しがた……」と云ひかけて、何を思つたか、そのまゝ口を噤んでしまひました。成瀬はそのとき、私の想像しなかつたやうな、非常に恐いことをふいと聯想したらしいのです。私は、かうしてお話してゐる二月後の今でさへ、あのときの成瀬の、發作的恐怖に魂を奪はれたやうな眼と、痙攣的にふるふるへた唇と、血の氣のなくなつた陰鬱な顔色とを、はつきりと思ひ出すことが出来ます。

T市からK市へ行く終列車は九時半なので、私達は九時に演奏をすませて、すぐ停車場へ向ふことになつてゐました。

豫定より少し時間がおくれたので、一同はヴァイオリン獨奏が終ると直ちに、舞臺へ出て、二部の最後の弦樂合奏、歌劇「オルフォイス」中のバレエを演奏しました。この演奏中にも、舞臺の上の方で、くらくと綱をまき上げる音がしたり、人氣のない棧敷でざわめき聲が聞えたり、舞臺全体が地震のやうに幾度も揺れたり、小舎の中を風が吹き荒れてゐるやうに、樂器の音が強く響いたり弱く響いたりしたことなどは、大体今までのこと、似たりよつたりで、餘りくどくどしくありませんから、申し上げませんが、これで私達金鈴俱樂部のT市演奏は、無事に、——餘り無事でもありませんが、兎に角終つたので、この後には三部として、この土地の人々が、琴、三味線、尺八の三曲合奏「里の曉」「楫枕」などを、やることになつてゐるのです。

私達は樂屋へ退いて、もう九時を過ぎてゐるので、随分あわてゝ、樂器をケースにおさめたり、ちらばつてゐる樂譜を集めたり、譜面臺をたゝんだり、忙がはしく歸り支度をしました。そして私は一等さきに支度が出来たので、生れてから今まで経験したことのない、奇怪な二時間を過した、この劇場の樂屋も、——これから後何年、或は何十年、又はもう一生再び來ないかも知れぬこの樂屋も——これでお別れだと思ひながら、世話掛の人のくどくどしい挨拶を後に聞き流して、一人さきに樂器を抱へて、大部屋を出ましたが、來るときはまだ少しうす暗かつた舞臺裏の廊下は、もう眞黒闇でした。この廊下でまた、最後の、そして最も奇怪な出來事が起つたのです。

私は、手さぐりで、暗い廊下を、小足で歩いて行きました。鼻の前に拳をつき出されてもわからぬ程の暗さです。

廊下の左の方には、舞臺の後の、幾重にもなつた黒い幕がありました。そして幕をすかすと、ごく微かに、舞臺や觀客席の方の明が見えましたが、舞臺の方ではもう三曲合奏が始まつてゐると見え、ツツン、テン、シャン………といふ美しい琴の爪弾きの音が、夕風の音のやうな竹の音と、流れてゆく水のやうな三弦の音とに交つて、ゆつたりと聞えてまゐります。その音をきいてゐると、暗いしめつぽい洞穴の中にでもゐて、ずつと離れた上の方に奏でてゐる音樂をきくやうな、やるせない寂しい感じがします。そして、その三曲の音は、この劇場に深い執念をもつてゐて、そのあたりにさまようてゐる怨靈を、慰めてゐるやうな安らかさと落着きと、しかし愁しさと寂しさとを持つてゐます。

舞臺は、さつきまでのヴァイオリンやセロやピアノが、華やかにしかし騒々しく響いてゐた舞臺とは、まるつきり變つてしまつた別の舞臺のやうな氣がし、そして、この三曲の音の方が、いかにもしんみり

としてゐて、この古い芝居小舎には、やはりふさはしく思はれるのです。

私はいつの間にか、暗い闇の中にひとり立ち止つて、寂しい憂鬱な三曲の音に、耳を傾けてゐました。大部屋の方からは、誰もまだやつて来ません。あたりはひっそりしてゐます、たゞ、三曲の音が、遠い遠い別の世界から聞えて来るやうに、響いて来るばかりです。

——そのときでした。何かしら、あたりの闇の中にひそかな氣配が感ぜられましたが、つゞいてふんと強く鼻をうつたのは、お白粉の匂ひと、肉体から發散する蠱惑的な惱ましい脂じみた匂ひとです。變な匂ひがするな、と思ふ間もなく、私の身体の右の方をすれ／＼に、たしかに誰かゞ通つて行くらしい、かすかな衣きぬずれの音がするのです。……………そのときこそ、私は思はず背中から、ぞつと冷水を浴びせかけられた思ひがしたものでした。

けれども私は、氣を落ちつけると、暗くて危いから蠟燭を灯ともして行かうと考へて、そこへしやがむと、譜面臺についてゐる蠟燭をとり出し、ポケットから煙草マツチを出して、闇の中でばつと擦つて、蠟燭をともしました。そして、もう大丈夫といふ氣持で、蠟燭を持つて立ち上つて、その灯であたり一間ほどの間が、ぼうつと明るくなつた足もとの板を見たときに、總身の血が逆流するかと思ふほど、恐しいものを見たのです。——裸蠟燭のゆらめく光りに照らされて、正体はちつとも見えませんが、私の立つてゐる板のすぐ横の足もどから斜め前に、右手につんである何かの櫃のやうなもの、中頃の高さまで、頭の方が折れ曲つて、黒々と人の影ばかりが、板の上に横はつてゐるぢやありませんか。自分の影なら、後へうつるといふもの、それに誰一人としてゐないこの廊下で、蠟燭をさし出してゐる前に、それも影ばかりが、私の鼻の前に誰かゞ立つてゐるとしたら、ちやうどその人の影のうつる位置に、黒々

と板の上につつた、——と云ふのです。餘りの恐しさに慄へ上つた私は、咄嗟に灯を吹き消すと、急いでまたもとの闇の方を前へ歩き出しました。

少し来ると、右の横の方から、明りが闇の中にぼうつとにじみこんで來てゐるので、ほつとしました。そこまで行きますと、樂屋風呂などのある方へ行く廊下があいてゐて、その廊下の半ばほどのところに、カンテラが壁にかゝつてゐて、そこからその光りが流れて來てゐたのです。そしてそのカンテラの黄い光りを、禿げた頭から浴びて、樂屋番らしい爺さんが、こつちから云ふと後向きになつて、中腰にしやがんで、ぶつ／＼と咳くやうに、何かひっそりで喉舌つたり返事をしたりしてゐます。それが、さも前に誰かがあるやうな風なのです。私は今見たあの影のことを思ひ出すと、また、ぞつとしたので、わかつてはゐるものゝ、わざと、「爺さん、出口の方へ行くには、こつちへ行くんだねえ」と後から云ひかけました。自分ながらびつくりするほど、腹がれた聲しか出ませんでした。すると爺さんは暫く返事もせずに、まだぶつ／＼云つてゐましたが、やがて「あゝ左様々々」と云つた風な領うりやうき方を二つ三つすると、はじめてくるりと此方に向きました。頭の禿げた、人の好きさうな、それでゐていかにも一癖ありげなざろりとした眼つきの、ちやうど千兩役者の紛した老爺とでも云ひたいやうな、そして昔は一度はたしかに役者をつとめてゐたに違ひないと思はれる面付きをした、爺さんでした。此方を書いて、依然とした中腰で、洋服を着てヴァイオリンのケースをさげて立つてゐる私の姿を、ぢろりと一瞥すると、にこりともせずに、手をあげて指しながら「おう、そつちへ行かつしやれ」と、いかにも他聞を憚るやうな、きつぱりしない聲で云つてから、その後「……………ぞ」と云ふやうなことを附け加へて云ひました。私にはよく聞きとれなかつたのです。今から考へると、あの爺さんはやはり樂屋番の爺さんで、そ

のときは「幽霊が出るかも知れませんが」といふ意味のことを、方言か何かで云つたらしく思ひます。私は爺さんにお辭儀をひとつすると、さつきとは少し明るい、狭い、ごた／＼した小道具の間を、また歩き出しました。後から、倶楽部の人が一二人／＼と、大部屋をひき上げて来る様子でした。その足音に力を得て、また一歩足をふみ出したときに、私の一間ほど前でせうか、こゝで云ひますと、その書架の上にあるシネリアの花のところで位距つたところにですが、夜目にも白い白木の柱があつて、その柱の、私の背の高さ位のところに、見るも恐しい、凄惨な形相をした幽霊が、ま／＼と現はれたのです……………」。

よくは覚えませんが、顔の色はまつ蒼で、髪はばら／＼に振り亂れ、たしか左の蟀谷から眼と頬へかけて、赤い血が／＼と流れ、傷口は柘榴を割つたやうで、齒を喰ひしぱり、眼はかつと見開いて……………」と云ひますと、普通の怪談をつくりだすやうな仰しやうかも知れませんが、私は、芝居の怪談はもとより、普通よく讀まれてゐる怪談といふ種類の本は、今まで殆んど一つも讀んだことのない男です。もし私がいつもから、そんな怪談を讀んでゐたなら、その場にのぞんで、もつと精密な觀察をすることが出来たでせう。そしてそれを、怪談から得た自分の聯想と、つき混せて、もつと／＼奇怪な怪談を作り上げて、お話しすることが出来たかも知れませんが、合憎怪談に關する知識は何ひとつ持ち合はさない私としては、たゞ見たまゝを、——と申しても、やはり幾分か補ひの想像が、無意識の間に入つてゐるかも知れません。何しろ、時間にしたら一秒か二秒、長くて四五秒のことですから、そんなに／＼しく幽霊を見られる筈はないのが、ほんとうでせう。とにかく、見たまゝと自分で思ふことだけを、申し上げるのです。

話はまた横道へ逸れましたが、その幽霊は、白装束を着てゐたらしく思ひます、胸は露はにして、——そして兩腕は背中の方へ吊りあげられて……………」さう云へば、顔も少し下向きになつてゐて、身体が上から太い荒縄か何かで、吊り下げられてゐた様でした。それから女のやうな白い細い頸すぢには、白い刃のさきが……………」など、これ以上に申しては、何だか、自分でも、實際なのか想像なのか、わからなくなりますが、これで申し上げないことにしませう。とに角、この世ではちよつと見られない、もの凄惨な形相をした幽霊でした。

これで、私の壽樂座の話は、おしまひです。だら／＼した面白くもない長い話で、さぞ御退屈せられたこととせう。あなたのお顔には、もう退屈の色があり／＼と見えますもの——。

幽霊にあつてから、どうした、と仰しやるのですか、それからのことは申すまでも御座いますまい。そのときの私の、殆ど氣絶しやうとした位の恐怖感や、はげしい戦慄などは、今更にとり出して／＼と／＼と／＼とお話ししなくても、充分おわかりだらうと思ひますから。

とにかく、生きた心地もなく、それこそは、う／＼の態で廊下から逃げ出し、三曲台奏の眞最中の水をうつたやうに静かな壽樂座の中から、格子戸の出口をどび出して、朧月夜の、どこからか櫻の花びらが二三枚散つて来る、芝居小舎の前の廣場に立つたときは、何だか知らぬが、自分の体から、今まで自分の魂といつしよに、まつはりからみあつてゐた別の魂のやうな感じのするものが、離れてしまつて、それでみる／＼と／＼も壽樂座の中へ入つてからそのとき出るまで、壽樂座の妖氣に祟られて何かに／＼と／＼かかれてゐたらしいのが、ちよつと背中／＼に荷をなが／＼かついでゐると、終には荷のあることを忘れてしまひ、荷をとると始めて「あゝさうだ、今まで荷をかついでゐたのだな」と思ふと同じやうに、それがはつき



りと私にわかつて、もう幽霊のことなんか忘れたやうに輕々とした心持になり、少しおくれて格子戸から出て來た宮井と二人で、後の連中を残して終列車におくれぬやうに、途で、櫻馬場の夜櫻が、幾百と並んでゐる火のついた赤い雪洞の明りに照らされてゐる、夢のやうに美しい光景を横に眺めながら、停車場へ駆けつけて、間もなく次第に一人二人とやつて來た一同といつしよに、十分ほど延着した九時半の終列車に辛うじて乗り込んで、びり／＼といふ汽笛の音と共に、この奇怪な壽樂座の所在地であるT市を後にしたとさへ、最後に、つけ加へておけばいゝと思ひます。これでこそ壽樂座の話は、完全におしまひです。

いや、もう一つだけ、お話ししておかなければならぬことを、忘れてゐました。

私達は壽樂座を一步出たときから、もうすぐ壽樂座の妖氣から離れることが出來たと、思つてゐたのですが、それは、私の早まつた考へと申さねばなりませんでした。と云ふのは、かういふ次第なのです。このことだけ申して、この退屈なく／＼しい話を止めますから、これだけはお聞き下さい。これだけお話ししたら、もう話して呉れと仰しやつたつて、話しません。だから、も少しのことでもありますし、是非お聞きして下さい。と云ふのは、時によると私は、あの夜汽車の中ばかりでなく、壽樂座のあの幽霊と前世からの因縁があつて、一生壽樂座の妖氣から離れられぬかも知れぬ、と、いふ氣がするのですから、今この話の序に、この次第を申しておきたいのです。こんなことを長々と申してゐると、また退屈の原因になりますから、早速とりかゝりますが――。

私達は人の少ない夜汽車に乗り込んで、持ち物を皆、棚の上や足の下に片つけてしまふと、今日の演奏の出來榮えなんかそつちのけにして、早速、めい／＼今夜自分の見たり聞いたりした壽樂座の奇怪を

話し合ひました。私は黙つて、皆の話をひとつも残すまいと思つて、聞き耳を立て、聞いてゐましたが、皆の話した奇怪は、私の感じた奇怪ほど、小説的ではありません。髪の毛のひつぱられたやうな氣がしたとか、「きやつ！」といふ悲鳴をきいたとか、から／＼とつるべを上げるやうな又綴帳をひき上げるやうな音を聞いたとか、舞臺裏で大勢のわめき聲を聞いたとか、血染れになつた凄惨な幽霊を見たとか、こんなことは大てい皆と一致してゐました。中には少しもそんな怪しいものは知らない、自ら稱する藤本や河野氏の如き剛の者もありましたが――。その外の奇怪については、嘘か本當かは知りませんが、いろ／＼各自によつて、異つた奇怪が話されました。そしてその話の種が漸く盡きると、今度は、その奇怪の原因について、お互にめい／＼の考へを主張し、いろ／＼の想像が逞うせられました。そんな想像なら、私がこれだけお話しした以上は、あなた御自身で御想像なさつた方が、ずつと眞に近いと思ひますから、一々申しませんが、松田君の説明によると、いや、歌舞伎通を以て自任するビオラ氏の説明によると、芝居の上のむつかしい術語や通用語は少しもわかりませんでした、その大体を云ひますと、昔、この劇場である女形の役者が、何とかいふ怪談の芝居のある役を演じてゐるとき、その稽古中に、こみいつた色戀の關係から、座頭の一味徒黨のものに、ちようどその芝居と同じやうな無残な殺され方をした、何でもその當時まだ新樂したばかりのこの芝居小舎の舞臺の白木の柱へ、宙に縛りあげて、滅多斬りにして殺したとかで、その柱だけは、何百年を経た今日なほ、その當時のまゝ眞白で、血痕があざやかにしてゐるのを、自分は歸る時に樂屋番の爺さんに見せて貰つて來たのだ、さうで、この芝居小舎にはそれ以來この非業の死を遂げた役者の幽霊が折々出ること、その祟りが實に恐しいこと、そしてこの樂屋番はみなすぐ不慮の死で死んでしまふこと、けれど今度の樂屋番は何故かその幽

靈と氣が合ふらしくて、これで二十年の間何の變りもなく樂屋番をつとめてゐること、今晚は終列車で歸れないといふことを犠牲にするつもりで、自分はその爺さんからこの芝居小舎の因縁由來を聞いてきたこと、——などをいかにもまことしやかに、松田君が話のです。いまお話ししたことだけでは、いかにもほんとうらしくて又ほんとうかも知れませんが、松田君の話には、この外に自分で作り出したやうな、随分出鱗目のことがたくさんあるのです。

松田君が一座の話を奪つて、得意になつてひとり滔々と、壽樂座にまつはつてゐる由來歴史を話してゐると、さつきまで幽靈なんかは少しも見ないと稱してゐた河野さんが、少しいま／＼しくなつて、T市通の名を恥しめてはならないと考へたのか、横から口を入れて、壽樂座は何といふ年號の十何年に建つたので、そんな簡単な縁起を持つてゐるのぢやない、あそこでは何十人の人が殺されたかわからないのだ、幕末と何とかいふ藩の學者の書いた何とかいふ書物によると、かう云ふ由來縁起が書いてある、と嘴を入れ初める。さあ、さうなると、どうせ誰も真相を知らないのだから、と思つて各自が、いや不義をした男女がこの小舎の中で町人どものみせしめに、芝居の中に用ゐて殺されたのだとか、いや、さうぢやあるまい、こんなことがあつたらう、あんなことがあつたらう、と各自の臆測を逞うする、すると松田君が躍起になつて反駁する、又河野氏がそれにくつてかゝる、ちやうどそれこそ蜂の巢をつゝいたやうな騒ぎで、その有様は、さつき壽樂座の樂屋で、火鉢を圍んで、妙にひつそりして黙つてゐた一同と思はれません。

この問題になつた壽樂座の奇怪の原因については、あなたはあなただけで御想像になつた方がいゝと思ひますから、私の想像は、今は申し上げますまい。何でもかなりこみいつた、小説的な怪奇な由來縁

起があるらしいのです。

とに角、闇の中をひた走りに走つてゐる夜汽車の中で、さうして盛に皆が壽樂座のことについて爭論してゐる間に、私は、成瀬ひとり、隅の方に腰かけて、さつきから一言も吐かずに、蒼白い顔の半面を電燈の光りに照らされて、眼を瞑つて何かちつと考へ込んでゐるのに、氣がつかしました。

すると私は、氣輕になつて今自分も皆の話の中へ入らうとしてゐたのを、はつとさし控へました、べつに何といふ譯もなしに——。

その瞬間、今はもう十里も離れてしまつたT市の壽樂座の建物を、ふつと思ひ出したからたまりません。私の眼の前には、あの荒れはてた庭の白い花と墓とか、相つゞいてまぎ／＼と浮び上つたかと思ふと、瞬き一つするとすぐ消えて、今度は、私の腰をかけてゐる向ひの、汽車の玻璃窓に、——窓の外に田舎家の赤い灯が點々と映つて見えてはゐますが、その他は眞黒の鏡のやうに、汽車の中の有様が、その赤い灯に重なつて映つてゐる玻璃窓に、そつと車室を覗きこむやうに、また私を睨みつけるやうに、あの、血染れになつた振り亂し髪、眼を見張り齒をくひしばつた、幽靈のもの凄しい形相が、車室の内の腰掛や乗客が鏡のやうに映つてゐる上に、また重なつて、前に見たより一層大きく二倍ばかりの大きな顔になつて、殆どその窓いっぱい、映つたのです……………。

私は、十里も離れた、しかも疾走してゐる文明の利器であるところの汽車の、窓について走つてまで、私を追つかけて来る、その亡靈の執念深さを思つたとき、思はず、ぞつと心臓がちかに氷にあたつたときのやうに慄へ上りました。

そしてやがて、その恐しい形相がかき消すやうに窓から消えると、ちやうど折から通りかゝつた俱利



伽羅のトンネルの中の、あらゆる音を消してしまふ車輪の轟々たる響の上に、はつきりと、大地の底からひびいてくるやうな低い聲で、「三世につながる悪因縁にひかれて、たゞ生きかはり死にかはり、世をかへ時をかへて、輪廻の浪に浮沈するのぢや」と、私の耳のそばで、もの凄くうめくのが、もう一度聞えたのです。

私は眼を瞑つてしばらくの間、この壽樂座の恐しい未來永劫の執念を思ふて、人間の到底知ることの出来ない奥深い宇宙の底の神祕に、一瞬間ひやりと觸れたやうな氣がいたしました。

—二二・六・二脱稿—

## 部 報

### 音楽部部報

先學年は一學期に一回音樂會を開いただけで、二學期には三年の人々は卒業を急がれるし、僕達きりでは余り人数が少ないのでやめることにした。そして何さかもう少し人数が澤山になるやうに努力した。それで音楽部としてはおぼろしい位にやゝ人数が多くなつたので、新學期が始まると同時に大に練習した。四月三十日至誠堂で春季演奏會を開いた。プロバガンダのよかつたためか堂にあふれる程來聴者があつたのでうれしかつた。

#### 曲 目

#### 一、弦樂合奏 部 員

歌劇「トラヴィアタ」拔萃曲……………

ザエルデイーワインナ

#### 二、マンドリン二部合奏 部 員

歌劇「マリタナ」拔萃曲……………ウオレス

#### 三、次中音獨唱 宮澤 義衛

カムホエア、マイラヴ、ライズ、

ドリミング……………フォスター

#### 四、ヴァイオリン獨奏 會 廣駒

夢みつ……………シユーマン

ジョスランの子守唄……………ゴダール

#### 五、次中音獨唱 松山亥三雄

ナンシー……………アダムス

歌劇「メリー・ウイドウ」中のヴァリアソング……………レハール

#### 六、ヴァイオリン二部合奏 西願 忠雄

舞曲「小夜枕」……………ボーモン

#### 七、マンドリン二部合奏 部 員

歌劇「タンノイザ」拔萃曲……………ワグネル

#### 八、低音獨唱 酒匂 常伸

歌劇「ホフマンの物語」中の船唄……………オッフェンバツハ

#### 九、ピアノ獨奏 藤中 博

シルヴァリイウエズ……………ワイマン

#### 十、ヴァイオリン獨奏 西願 忠雄

「ライフ、レット、アス、チェリシ」の變奏曲……………フアーマー

#### 十一、マンドリン合奏 部 員

コールミドライ……………ブルツフ

#### 十二、次中音獨唱 宮澤 義衛

アテイスティクマンドルス……………レボリニ

#### 十三、弦樂合奏 部 員

歌劇「ウイリアムテル」拔萃曲……………

#### 十四、弦樂合奏 部 員

歌劇「ウイリアムテル」拔萃曲……………

## 雜 報

### □春季水上運動會

五月二十二日。於大野川。

聯合艦隊の公報ぢやないが天氣は好いが恐しく風の強い日だ。今年は昨年のやうに大きな旗を立てたり我鳴り聲をあげる連中が少い

世の中がそれだけ進歩したんだらう。集つて来た人も少いやうだ。初めの中は番組の關係が古い顔が甚だ少いやうだった。下駄履きで川の中へ落ちる氣の早い連中も居る。田中先生がせつせひひりてボートの用意をして居られる。漕艇部は果報者ぢやテ。

風の關係が第二コースをとつて勝つた組が非常に少かつたやうだ。

中等學校の對校競漕は豫選で七尾中學が金澤一中を、小松中學が七尾商業を破つて、七中と小中との決勝となり結局小松中學の優勝となつた。

學校の先生と學士會との競漕で先生組が勝つたので彌次馬共が大騒ぎをして軸に待構へて片ッ端から胴上げを喰はす。逆轉宙返へりをやつて飛行機氣分までも味はつた先生が居るが少し虫が好過ぎるやうだ。その中に裏の方から逃げた先生が二人居る。一人は歴史の先生。綱手から逃げ出す戦術の實地御指導だ。不肖の弟子共は以後氣を付けるがよい。但しランタの説ちやないらしい。もう一人が圖學の先生。此れは多分距離の測定から最短距離をさられたものだらう。不幸にして文科生には分らない。

文科理科の對校競漕は文科の勝。(三木)

## 同人雜記

### 編輯後に

なかの

べ切迄にはたゞの一篇も集まらなかつた。べ切がすんでからもほつ／＼としか集まらなかつた。そして、いゝものは中々集まりさうにも見えなかつた。ところが極近頃になつて割合に一時に數篇集まつて來た。今度は詩が多かつた。いゝ詩があつた。けれども都合によつて詩や短歌は來學期へ延した。今度は同人の中に病氣をやつた人が多く、その爲學校で一同顔を合せるなど、いふ事は一度も出來なかつた。今度の編輯は殆んど佐々木と三木と二人でやつて呉れたわけだ。集まつた個々の作品に就ては誰か書くだらうから止すが、たゞ次の事だけは言はして貰ひたい。學校の雜誌は純粹な文藝雜誌ではないかも知れない。けれ共それだからと言つてぞんざいなものを持つて來られると全くがっかりするのだ。いくら純文藝雜誌でないからと言つて、出鱈目なものを持つて來られては困る。幼稚

なものでも、浅いものでも、そんな事よりは作者の態度の見え透いて淺ましいのが厭なのだ。模倣は絶対に避けた。たとへそれが無意識に影響を受けたのだと見る事が出來ない事はないと言つても、作者自身がどこに居るか分らない様なのは仕方がないと思ふ。ヘンをとる人はよくなくともその間だけは一向事を精進してほしい。眞剣な態度であつてほしい。書く人がもつて居るはずだ。かくれて居るのだらうか。それとも、書く人が居ないといふのだらうか。居ないといふならそれまでだが居るなら書いてほしい。わたくしの言ふ事は之だけ。

### 本堂の裏から

三 木

神經衰弱になつたつて誰れもほめて呉れず同情しても呉れない。だから俺は神經衰弱ぢやない——決してそんなものにあならぬ覺悟だだが物覚えの悪いのは生れつきだから致し方がない。俺の頭の悪いのは先天的だ——こんな所で先天的なんて語を使ふと哲學の先

生に叱られるかも知れぬが——ほめられるなんて事は尙更知つた事ぢやないが、兎に角使はして貰う事とする。そこで先天的に悪い頭の中で考へられた事は先天的に悪い考へであるべく運命づけられて居る、そこで、さ大注意を戴いた論理學の中から三段論法とか云ふ奴を引張り出して、俺の書いたものは悪いもんだといふ結論になつたのだ。

そこで何か申譯を作る必要が出來たので、悪いものを書いたその源に溯つて悪い頭について申譯をしやう。さいふのは悪い頭にも仲々棄て難い利益のある事で、此れが俺の組織した唯一の學問、經濟學だ。

一つの本を讀むにしても秀才ださ一度で隔々まで覚え込んでしまつて、もうその本には用がなくなる、即ちその本は只一回の使用にしか堪えないものとなる。反之、頭の悪い人間は一度讀んでもすぐに忘れる、だから又讀む、又忘れる、又讀む……かくて一冊の本は少くとも數回の使用に堪え得る。結局安價上りだ、だから經濟だ、だから經濟學だ、さかう來るんだが、この物自体が即ち俺の悪い頭其れ自体を證明する事に役立つの外何の用もないやうだが致し方がない。先天的なんだから。

試験間際になつてあはて、原稿がどうしたで御坐るのといふのが雑誌部のトラジションださうで頭が悪いからかう云ふ事だけは正直にしつかり守る。といふさ他のの方も傍枕を喰ふ譯だが、先天的さば必然的普遍妥當的といふ事ださうだから俺が頭が悪いや普通妥當的に佐々木も中野も頭が悪いとするのが哲學の旨意にも適う事だし四宮先生の弟子たるにふさはしい事だと思ふ。

俺はお寺の本堂の裏に居る。来る奴が来る奴皆静かでない、さか勉強するにいい所だとか云つてはめて行く、俺も人真似にさう云つてやるが俺にすりあ書癪に都合がいい位なもんが、勉強なんて人並臭い。俺の所へは誰れも仲々遊びに来ない、来る奴は普通妥當的に頭が悪い。大抵同じ話を二三度して行く。此方も五六度云つてやるが、その度毎に新鮮なる興味を以つて聞いて行く、中には俺が話してやつた事を又俺に話して聞かせて呉れる奴が居る。要するに皆頭が悪い、普通妥當的だ。

これで頭の悪い事についての頭の悪い申譯をしたつもりだ、だから普通妥當的に了解してもらひたい。もう一つもらひ度い事はもつと原稿を出してもらひ度い事だ、そうして毎

日學校に出るさ先生から未だか未だか責め立てられる俺のやうな無能な事務家に安らかな墓場を與へてもらひたい。

### 赤い部屋にて

佐々木

□夕方、原稿紙と万年筆を布呂敷につゝんで家をふらりと出て来た私は、今この赤い部屋にゐて、階下から持つてきて貰つたコ、アな一杯飲んで、六號雑誌を書き始めた。これさへ書いてしまへば、――まだ校正といふ厄介な仕事はあつても――重荷のやうに思つてゐた九十一號の雑誌の編輯も、さう角終つた譯である、やはり何さなく嬉しい。

□今度は雑誌の仕事が、おそくなつて閉口した。來學期はもつと早く雑誌を出したいと思つてゐる。だから原稿の締切は、なるだけ確守してゐたい。

□今度集まつた原稿は、掲載した六篇の外に、小説二篇、戯曲一篇、詩三篇、短歌一篇。□憎まれ口をたゝくやうだが、相變らず、不

思議な位に、いゝ原稿が集まらない。余り悪口は云はぬことにしておくれけど、實際驚くほどの幼稚なのが、かなりあつた。たさへ、いかに素質がよくても、中學生が見て笑ふやうな作品は、高等學校の雑誌として、出せない。

□掲載したもので、例の通り、幼稚で貧弱なものだが、こんなものを出さなくちゃならぬほど、いゝものが集まらないのだ。けれども、よく考へてみると、學校の雑誌としては、どこでも、たいいていゝんなやうなものだらう。傑作などゝ云ふものは出る筈はない、と思ふ。何故さ云ふと、毎月の文壇の多くの作品を眺めても、お世辭にでも傑作さ云へるものは、數へるほどしなくては、他はたいていゝ、いろいろの評語を與へるさう出来るが要するに、くだらぬ作である。だから、まして経験や苦勞の足りない私達の、この北辰會雑誌に、傑作が出るさういふことは、とても望まれないことであらう。

□雑誌に詩が出ないのは、委員に詩がわからぬからだ――と思つたら少し間違ふ。もつと、ほんさうに詩らしい詩が来るなら、私達は喜んで載せたい。事實、私は詩の熱心な愛好者である。

今度集まつた中の堀江君の詩は、いゝ素質のものだったが、表現が少し粗く洗練されてゐなかつたのは惜しい。それから、これは短歌だが、長君の歌の中には、三四首いゝのがあつたやうに思ふ。

□挿繪には、Van Gogh の Woman with Frying Pan を入れた。セザンヌ及びピカソと共に、後期印象派の代表者であるゴッホについては、改めてこゝに書く必要もあるまい。この畫は、彼の鋭い感受力、獨創的な表現、卒直な性格を、遺憾なく知るこの出來るものである。ゴッホのもので、もつと獨創的なものがあるけれど、それは版の都合で、はつきり出ないと思つたので、これにした。

表紙の畫の作者 Herbin については、私はくわしく知らない。この風景畫は、表紙としては、最上と思つたから、これを用ゐた。□私は今學期は書かないつもりだつたけれども、掲せる原稿がないので、多少自分の健康を犠牲にしても、書かなければならなくなつた。さうして「壽樂座の話」が出来上つた。検閲を受けるために先生にさし出した時は、きまりが悪かつた位の、つまらぬ作である。私だつて、こんな作品よりいゝものが書けるつもり、又書いたつもりだが、學校の雑誌

となるさ、ある程度の制限が必然的に起つて来る。個性などいふものは、ふみにじつて毫も顧みない、現代の教育制度の下に於ける學校には、より以上の大なる矛盾、暴政が十八世紀の衣を着て平氣で存在してゐるのだから、こんなこと位は、特別憤慨すべきことでもなく、むしろ已むを得ないことだ。こんな次第で、――勿論其ばかりではないかも知れぬが、――かうしたつまらぬ作を、出さればならないのである。

□もう試験前まで、みんな盛に試験勉強さといふものをやつてゐる。

その中で、ほんさうの實力のために勉強してゐるものが、何人あるだらうか。自分といふものを作り上げるために勉強してゐるものが果して何人あるだらうか。恐らく一人もあゝるまい。情ないことだ。

けれども、こんなことを云つてゐて、學校の試験の準備を少しもしないで、試験にパス出来ないことも、余り賢い方法でないから、近々の中に私も初めようと思ふ。なるほど、もう授業は四日しかないのだ。

□私はこの五月に、病院で、健康破産者の恐

しい宣告を受けた。私自身は存外平氣であるが、それは確かに恐しい宣告に違ひない。

けれども、私はこれを以て、學校を半分はご休んだことの申し譯にしようと思はないし、従つて雑誌の編輯その他の雑誌部の仕事がおそくなつて、度々先生方に御厄介なかけたことの逃口上しようと思はない。これは全く私自身の悪いことだ。次の學期からは、なるだけ改めたいと思つてゐる。

□私の近頃特に讀みたいと思つてゐるものはストリンドベルヒ、讀み残しのワイルド。何にしても語學は大切だと思ふ。それから伊藤さんのシヨニツツレルの翻譯は、出版されたら早速讀みたいと思つてゐる。

□藝術さ云ふとさう、赤色か何かのやうに、危険視する人が、この學校にさへゐるのには、あきれてものが云へない。

□今度の休暇には、久しぶりに畫を描いて、秋には昨年の通り、雑誌部で洋畫展覽會を開かうと思つてゐる。

(六月二十五日夜)

## ■病床にて再び■

佐々木

□最後の校正刷を見ると、豫定の通りちようご百二十頁になりました。一頁の余白が出来ましたから、一言お詫びを書いておかれなければなりません。

頭は鉛をつめたやうに重くて、身体には少しの力もありません。起き上るとふらふらと眼まひがして倒れさうです。しょうがないから、床の中で仰向きに寝ながら、これを書いてゐる有様です。

□試験を一日だけ受けて、音楽會に行つてその翌日、哲學と獨逸語を少し調べてゐた夜から、突然發病しました。夜明け頃に醫者が來て注射をした頃まで覺えがありますが、それからしばらくとも覺えがありません。たゞ死んだ方がまだいいと思つた位の苦しさだけが少し頭に残つてゐます。それから二日間ずつこの床の中に居てゐます。——こんな次第で、雑誌の最後の校正刷は、一昨日印刷屋から持つて來て、それから二三度さらに來たさうですが、まだ渡せません。そしてたゞさへ發行が遅れた雑誌は、その爲にまた完全に二日は

ご遅れることになりました。何とも申譯がありません、深くお詫びしておきます。

當分の間まだ試験は受けられまいと思ひますが、校正は今からすぐすませて、早速印刷屋へ持つて行つて貰ふつもりですから、雑誌は多分七日か八日に諸君の手に渡るだらうと思ひます。萬一學校がすむ日までに發行出來なかつたら其こそ大變、と心配してゐます。

試験の眞最中——いやこれは私一個人のことですが——大切な雑誌の發行まじはに、こんな病氣にとつつかれるとは、何さいふ不運なことだらう、と泣き言を云つてもしょうがありません。これも壽樂座の祟りかな。

でも今日校正の出來るだけの身体になれたのは、とにかく有り難いことです。

□病氣になると健康の幸福がしみじみ感じられます。けれど病氣にも少しいゝことがあります。讀書と思索が出来ることです。私のやうな人間は病氣にでもならないと、ゆつくり落ちて一人で本を讀んだりものを考へたりしませんから、ところが今度の病氣には、本を讀む氣がしないのに閉口します。

□眞實といふことの尊さを私は近頃つくづく感じました。眞面目に正しく生きるといふこと——其は大切なことです。勿論私の眞面目

さ云ふのは外面的の薄べらなく人の間違へてゐる眞面目ではありません。正しく云ふ

のも舊い道徳から見ての正しくはありません。ほんさうの人間として正しく眞實に生きることです。だから、うはつただけを見る人には、その反對に見えるかも知れません。

この世間には嫌惡すべき打破すべき舊い道徳が余りに多くはびこつてゐます。私は今こゝで徒らな空虚な道徳無用論を稱へはしませんが、もし今の所謂道徳なるものが、眞の道徳であるなら、私は道徳を疑ひます。

無益な憤慨はしないこと。——たゞ私はあくまで自己の「生」を、強く、正しく、美しく、生きたいと思ひます。

□原稿紙を宙にさへてゐる手が疲れてきたから、もう止めます。藥を飲む時間だ。

(七月五日)

## ■注■

- 原稿は四百字又は二百字用紙に記すべし  
□作品の種類は作者の自由たるべし  
□締切期日は遵守すべし

大正十年七月七日印刷刷本  
大正十年七月七日發行

第九十二號

## 【ずら賣に市】

編輯兼發行者 吉村政行  
石川縣金澤市高岡町九十番地  
印刷者 大村重松  
石川縣金澤市高岡町九十番地  
印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

